
機動戦士ガンダム-連邦の野望-

rahotu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム - 連邦の野望 -

【Nコード】

N2758Q

【作者名】

rahottu

【あらすじ】

コスミック・イラ
ユニバーサル・センチュリー
C・E70 U・C79

後に第二次再構築戦争、プラント独立戦争、宇宙間大戦、統一戦争、等様々な名で呼ばれる戦いの火蓋が此处に切って落とされた。

様々な国や人の思惑が渦巻くなかどう立ち向かうのか？

あえて言おう 君は生き残ることが出来るか？

はじめに（前書き）

完走目指して書きます。

始めに

始めまして。私わたくしラホツと申します。現在別の小説を連載させていた
だいておりますが現在滞っておりますので気分転換がてら此の小説を
書いていこうかと思っております。又この作品は連邦万歳な作者が書
いたので連邦に都合がいいことが次々と起こりますので、そいつ
たものがお嫌いな方は”戻る”を押しすことをお勧めします。

此の小説はガンダムSEEDの世界に地球連邦があつたら。または
ファーストの世界にSEEDの連中がいたらとそういった妄想の産
物で出来ています。某ジオン公国がSEEDの世界に来たらと若干
かぶりますが(爆
何とか完走目指してがんばります。

この作品は大艦巨砲主義な作者が書きますのでかなり無茶苦茶です
が宜しく願ひします。

又随時皆様からの感想等で兵器や内政などのアドバイスを受け付け
ておりますのでそちらのほうも願ひします。

皆様からのアドバイスなどをどしどしお待ちしておりますのでどう
ぞお気軽に感想の方にお書きください。

第一話・新しい世紀・（前書き）

此の話はガンダムU.C.のネタばれと思われるものが含まれるので、
ういったものが嫌いな方は「戻る」を押してください。

第一話・新しい世紀 -

西暦2046年 12月31日 低軌道ステーション・ラプラス -

この日地球連邦政府主催の改暦セレモニーが行われた。

旧暦から新暦へ。本来なら宇宙世紀の時代の幕開けとなる輝かしい日であり、人類の偉業の第一歩が今此処に宣言されるはずであった。

連邦大統領リカルド・マーセナスの演説の途中でそれは起こった。

巨大構造物であるラプラスが突然の爆発を起こし、連邦政府官僚や各国政府要人、報道カメラマンを含む多くの人々の命が一瞬で奪われた。

後にラプラス事件と呼ばれ、死者千人以上を越す人類史上最悪の宇宙テロにより宇宙世紀はその産声を上げたのだ。

第二話・再構築戦争・（前書き）

今回はかなり滅茶苦茶ですのでお気をつけ下さい。

第二話・再構築戦争

低軌道首相官邸ラプラスがテロにより崩壊し世界は騒然とした。

報道局は連日事件の事について報道し、連邦政府による報道規制も一度流れ出した情報を止める事は難しく、遠くコロナーまで報道が伝わるようになった。

しかしそれ以上に世界を揺るがす事が中東で起こった。

爆発後まるで図ったが如く、中東全体で連邦離脱と再度独立を叫び彼らは徹底抗戦の構えを見せあまつさえラプラス事件を起こした首謀者を民族の英雄として保護した。

連邦政府はこれに激怒しすぐさま鎮圧軍を派遣しこれを機に一気に地球連邦の支配権確立をしようとした。

これは、歴史的パラダイム・シフトになる筈であった。そう最初圧倒的な軍事力を誇る連邦によって中東は直ぐに平定され愚かな分離主義者共は一掃され首謀者はその組織そのもろとも壊滅されるはずであった。

しかし、彼らが歌うナシヨナリズム、民族高揚、民族自決、自由と独立、連邦政府成立から長年の間押さえつけられてきたこれ等旧世紀の異物が鎌首をもたげ戦乱は中東からインド、アフリカ、東南アジア、東アジア、ロシア、バルカン半島、まで広がり、又本来これ

等を鎮圧すべき軍隊も軍内部の分離主義者達が反乱を起こし酷い所では部隊を伴って投降するのが各戦線で見られた。

戦乱は地球全域に広がり以後U・C0022の「地球上の全ての紛争消滅」宣言まで続いた一連の世界規模での紛争は後に「再構築戦争」と記憶されることになる。

第二話・再構築戦争・（後書き）

この世界の連邦軍は併合した国家の軍をそのままスライドさせる形で連邦軍に編入し駐留軍として各国に展開していましたが、連邦軍に對してかなりの不満が強かったのです。

第三話・新国家群・（前書き）

感想が欲しい今日この頃です。

第三話・新国家群

U・C・0009 中央アジア、カシミール地方で核兵器が使用される「最後の核」事件が起こった。誰がどの組織が核兵器を使用したのか0079現在を以ってして尚真相は闇の中だ。

連邦構成国の間では終わる気配の無い戦争、テロの恐怖、そして若者を戦争に取られ社会不安が増大し連日連邦政府に対する抗議デモや非難の声が出された。

U・C・0018 連邦を構成する主要国家特、特に北半球に属する国家は連邦政府に最早戦乱を止める力無しと判断しこままでは連邦共々心中することになる事を嫌った各国はこの日、連邦政府からの離脱を宣言し新たな国家群の形成及び新暦C・Eの制定を表明した。

これは明らかに連邦に対する反乱であったが連邦政府はこれを黙認。その理由は明らかになっていないが有力な説として、このとき既に連邦政府内でも分離独立を叫ぶ勢力があり、これ等構成国に対し制裁行動を起こすことはより一層の混乱を招きいたずらに国力を疲弊させることにもつながり、又そもそも連邦政府には新たにこれ等国家群を敵に回す余力は無く結局のところこれ等離脱した元構成国を黙認するしかなかったのである。

離脱した元構成国は新暦の制定と共に新国家群を形成した。

大西洋連邦、ユーラシア連邦、東アジア共和国、スカンジナビア王国、アフリカ共同体、オーブ連邦首長国、新たに形成された新国家

郡は連邦政府とは紛争中は協力を約束するも連邦とは一定の距離を保ちあくまで連邦構成国の枠外だとゆう姿勢を見せた。

U・C・0022 C・E・13 紛争終結後連邦政府と新国家群とで連邦加盟についての会議が催されたが結局議会は平行線を辿り、結局議会は何ら成果を挙げないまま閉幕した。

その後世界は新国家群と地球連邦とに二分され地球圏及び月面、宇宙開発をめぐり対立、冷戦状態にまで陥ることになる。

第三話・新国家群・（後書き）

うう．．．一度書いた文がミスで全て消えてしまつて再度書き直す
羽目に（涙）

最初に書いたのとかかなり内容は違いますが大まかな筋は一緒なので
大丈夫だと思いたいです。

第四話・後悔・（前書き）

今回は才り設定が色々とあります。

第四話・後悔・

ジヨルジュ・マーセナスは暗い部屋で一人呻いていた。

時々小さく「どうして．．．何故．．．いつたい何処で情報が漏れた。」と呟く以外は執務室の机に両肘を着いて身動きもせず俯いていた。

本来なら実の父をテロと思わせて殺し、その後首謀者と組織、及び其れを支援していた旧世紀の遺物を引きずる分離主義者共々壊滅させ、一挙に連邦による覇権の確立と未だ愚かな闘争を宇宙世紀になっても続けようとする分離主義者を根こそぎ根絶し連邦が真の意味で地球上で唯一の国家組織であり其れに反するものはどの様な高邁な思想があろうと全て反逆者として直ちに粛清されるべきものという人類共通の思想を体現するつもりであった。

そしてその後の移民政策で各コロニーを連邦の完全な支配管理下においてようやく連邦とゆう人類史上最大の統治機構が成立する。確かな未来が其処にあった筈だった。

だが現実とは違った。何処からか情報が漏れたのか万全の監視体制を築き何時でも検挙できる手はずを整えていたはずなのに首謀者は逃げおおせ、あまつさえテロ行為自体が連邦政府による自作自演と声高に唱え、反連邦をうたい自身を連邦に一矢報いた英雄だと言う始末だ。

あまつさえ本来分離主義者を鎮圧すべき軍内部でも離反者や命令に

従わないものが続出し、又議会でも誰がテロの真犯人かと犯人探しに躍起になり互いに疑心暗鬼に陥る始末。

そういつた中で自分が「リメンバー・ラプラス」を謳い第三代連邦大統領に就任したとしても一向に収まる気配は見せない。

自分以下真相を知るもの達は硬く口を閉ざし現在の状況になんら打開策を示せずに居た。

カーテンを閉め切った暗い執務室で唯一人自身の筋書きと違つ未来に唯うめき声しか上げることが出来ずにいた。

まるで本来あつた未来を奪われたラプラスの亡霊が父親殺しの自分に見せている悪夢のように思われた。

しかしこれは現実で現在自分は地球連邦大統領で人類史上最大最高の権力を有する男であり、又父親殺しの大罪人でもあり現在の世界状況を引き起こした根本の原因の一つでもある。

そんな失意の中の彼に最悪のどん底に落とし込む報告が届けられた。

中央アジアカシミール地方で核兵器の使用を確認。展開中の軍にも被害あり。

ジョルジュ・マーセナスは何度も報告を確認したがいずれも核の使用が真実であると結ぶ補強にしかならず、彼を慰めるものは何一つ無かつた。

第五話・新思想・（前書き）

更新が遅れて大変申し訳ありません。

これからはなるべく早く更新できるよう精進していきたいです。

第五話・新思想

宇宙世紀 0031 コズミック・イラ22 この年世界を驚愕の渦に巻き込むある重大な事件が発生した。

Evidence 01 通称「羽クジラ」とも呼ばれる謎の巨大生物の化石がジョージ・グレンの手で発見された。

持ち帰られた化石は直ちに調査されこれが地球以外の宇宙由来の「生物」の可能性が高いという調査結果が出た。

各宗教界はこれに揺れ、大混乱に陥りあるものはこれを受け入れ新たな信仰の対象化をはかり、又あるものは頑なに教義を守り此れを受け入れないとする立場を崩さず結果的になんら具体的な見解を示さない宗教界はその権威を失墜しその中で盲目の導師・マルキオ導師は混乱するばかりで「パレスティナ公会議」を開き宗教界の権威者が一堂に会するも何等解決策を示せない宗教界を捨て自ら独自の道を模索し始めた。

後に彼の理論は長年の思索によりある一定の成果を得る。
SEED理論と呼ばれる彼の考えは混迷を極める宇宙世紀後半において特にコーディネイター、ナチュラル双方において大きく支持されることになる。

同じ頃連邦支配下のコロニーにおいて地球を神聖視する「エレズム」と呼ばれる信仰が生まれる。

地球に住む人口のおよそ半分が宇宙に住むなか宇宙の民、スペースノイドと呼ばれる彼らは棄民政策によって二度と戻れぬ地球に郷愁と憐憫の気持ちを抱き地球は美しく清浄で清らかであり決して穢しでは成らないという一種のユートピア「理想郷」に思いをさせ、未だ地球にへばり付き地球環境を汚染しているアースノイド達への痛烈な批判にもなりジオン・ズム・ダイクンの提唱するコントリズムと合わせりにジオニズムとして宇宙世紀に新たな光明を開くことになる。

宇宙世紀に入って三十年が経過しようとする地球圏において人類は其れまでとは違った新たな時代の胎動を薄々と感じ始めていた。

第五話・新思想・（後書き）

此処で皆様にアンケートと質問です。

話の展開は遅いですか普通ですか？

また遅い場合は行き成り開戦直前まで話を飛ばしますがよろしいでしょうか。

あとジオン共和国、公国は本作品に出てもよろしいでしょうか？（勿論連邦と共闘する意味で）本作品でどの様な取り扱いをすれば良いのか皆様に確認を取りたいです。

結果によって今後本作品によってジオニズム及びそれに付随するニユータイプの存在がどの様な扱いになるかが決まります。

宜しくお願いします。

第六話・宇宙時代・（前書き）

感想が欲しい兔に角欲しい。

批判でも何でも良いので感想が欲しい。

何故なら感想は作者のやる気と潤滑油の両方だからだ。

後今回から書き方を少し変えますのでご注意ください。

第六話・宇宙時代

C・E30年「Evidence01」の発見と宗教界の権威失墜によって自分の子を第二のジョージ・グレンにという親が急増し、それにより世間がコーデイネイターにたいして寛容的になり第一次コーデイネイターブームが到来。

このとき地球連邦より宇宙開発が遅れていた大西洋連邦、ユーラシア連邦、東アジア共和国等で本格的に宇宙ビジネスへが活発化し今まで連邦政府が建造していた移民施設としてのコロニーからより商業的、産業色の強いコロニーの建造が各国共同で行われるようになる。

また、オーブでも資源衛星コロニー「ヘリオポリス」、マスドライバー基地「カグヤ」が建造される。

C・E・35年 大西洋連邦の月面軍事基地「プトレマイオス」の建造が発覚し、各国間で軍事競争が強まる。

連邦政府により宇宙統治法が改正されこれにより連邦軍は従来の地球・コロニー間の配置から月面、地球軌道、各コロニー等に駐留軍を置き新たに独立機動艦隊を編成し各方面軍と暗礁宇宙域、地球・火星間及び木星間の保持、警備等の外周警備艦隊を有していた。

U・C0045 地球連邦サイド4出身のトレノフ・Y・ミノフスキーが、ミノフスキー理論を提唱。最初連邦学会はこれを一笑し、博士を学会から追放した。

博士は連合の学会でも此れを発表しようとしたが選考段階で即刻落選してしまふ。

失意の中にあつた博士だが、しかしこの理論に目をつけたのが当時サイド3でジオン・ズム・ダイクンの右腕として活躍していたデギン・ソド・ザビは博士をサイド3に招き新兵器の開発依頼と引き換えに資金と研究施設を提供。以後博士はミノフスキー粒子の発見とそれを使った新兵器の開発に尽力する。

ミノフスキー物理学として大成した研究成果は小型熱核反応炉及びミノフスキー粒子の発見により、後の軍事的、エネルギー生産において大きく新国家群を引き離し後の対戦を有利に進めることにも繋がった。

ジョージ・グレンによる新型の天秤型コロニーの構想が発表され建造が開始される。

L4、L5に建造されたこれ等コロニーは其々コロニー「メンデル」

、「プラント」として大西洋連邦、ユーラシア連邦、東アジア共和国、等の出資国による「理事会」で運用されることになる。

極秘裏に作られた第一次世代コーディネイターが各方面で活躍するようになると明らかに現在の「ヒト」としての能力の差が顕著になり各宗教勢力で批判的な意見が盛り返す。

また第一世代同士との間に生まれたことも高い能力を有する第二世代コーディネイターとして誕生し新たな物議をかもし出し、コーディネイターとナチュラルという新たな人種の壁が生まれる。

コーディネイターに対して不寛容なブルーコスモスや過激な宗教は地下で結託し反コーディネイター運動を起こし地下武装組織を使ったコーディネイターの抹殺など過激な行動を行い市民もまたコーディネイターによって引き起こされた犯罪や事件などが後押しをする形で徐々にだが反コーディネイター感情が高まっていった。

そういった状況で宇宙に上がってコロニーに新たな居場所を求めるコーディネイターたちが次々と「プラント」に移住。プラントで作業に従事するのはコーディネイターという図式が完成。以後これが長らく定着して後の大戦への引き金にもなる。

第七話・独立・（前書き）

地球連邦が設定以上に拡大しますのでそういったものが嫌いな方はブラウザで戻るを選択してください。

第七話・独立・

U・C・ 0050 全人口110億人の内70億の人間が宇宙に住むことになるが依然として40億もの人類が地球に住み続け、「理事国」を中心とした各国は新たな土地開発を進め地球環境は悪化の一途を辿りこのままではあと四十年もしない内に地球は人間の住める環境ではなくなるとされた。

この事実を受け地球連邦政府は、各国に地球環境保護とコロナへの移民を提言したが各国はこれを無視。あまつさえ自国民の地球連邦政府コロナへの移民を禁止し、又新たな土地開発を続け、連邦政府との関係が悪化した。

各コロナは此れに激怒。スペースノイド達の怒りの矛先はいつしから自分達を搾取し重い空気税を懸ける地球連邦政府から、未だ地球にしがみつくと各国のアースノイド達へと向かっていった。

U・C・ 0051 地球連邦政府は構成国の内地球上の軍及び政府のスタッフとその家族及び地球上でしか出来ない生産活動に従事するもの以外これ以上の移民は地球上での安全を損なうものであり事実、近年「理事国」を中心として非構成国での軍事的脅威は日に日に増していた。

此れを受け連邦政府は「新規コロナ開発計画」の一時凍結と此のままでは遅かれ早かれ地球は滅亡し人類の種としての存続のため火星のテラフォーミング化、及び木星圏での人類の生存圏の確立及び外宇宙探査を目的とした「地球外惑星移民探査計画」を発表。

一部では「地球放棄計画」とも揶揄された計画だがコロニーで逼塞するスペースノイド達に新たな希望を与える結果になり後に地球連邦が宇宙開発において各国を大きくリードすることになる。

U・C・0058 かねてからコントリズムを提唱していたジオン・ズム・ダイクンがサイド3で独立宣言をしジオン共和国を樹立。国防隊を発足した。

ジオンの独立宣言に対して地球連邦政府は緩やかに経済的圧力を加え、又コロニー建造及び火星植民、木星開発により拡大した地球圏の治安維持を目的として60年代軍備増強計画を発動したが此れはジオン共和国に対する圧力と云うよりも軍拡いちじるしい「理事国」に対して牽制する意味を多く持っていた。

この一年後に C・E・50 プラントで後に議長となるシーゲル・クライン、パトリック・ザラによる黄道同盟が結成され以後プラントで自治権、関税自主権を求める運動が活発化し「理事国」は此れを弾圧。此れ以降「理事国」とプラントとの間で対立が明らかとなる。

プラントに住むコーディネイターの中に地球からの独立を求める声が増しに高まって来たのもこの時からである。

「理事国」も宇宙開発において連邦の後塵を拝する形になり其れを埋める上でもプラントは必要不可欠な存在であった。

彼らは恐れていたのだ。再構築戦争以来連邦政府にとって彼らは今

でも裏切り者である事には変わらず、人類史上最大の軍事力と経済力を誇る連邦がいつ自分達に復讐戦を挑んでくるか。

その時圧倒的に劣勢である自分達が生き残るためには倫理観を捨てコーデイネイターを作り出し宇宙開発に隷属させることによって国力を養い来たるべき戦争に向けて何とか生き残りを図ろうとしていた。

第七話・独立・（後書き）

地球連邦と後の地球連合とでは七十年代において三、四倍の国力差がありますので彼らは必死で原作以上に奇烈な搾取を行うでしょう。

第八話・パンデミックス - (前書き)

まだまだ連邦は強くなります。

流石に北半球の大部分が切り離された状態で史実のような戦力はもてませんのでいたし方ありません。

あとこの小説では一部歴史的な誤った表現がつかわれているかも知れませんがご注意ください。

第八話・パンデミックス・

U・C・ 0060 地球連邦軍は今まで各駐留艦隊独自の指揮系統を纏める為コロニー建設資源小惑星ユノーを軍事基地化。其処に宇宙艦隊総司令部を置き逐次艦隊の再編成と装備の更新に当たるところになった。

U・C・ 0062 ジオン共和国で地球連邦に対する脅威論が巻き起こりデギン・ソド・ザビを中心とするタカ派が国防隊を正式に国防軍へ昇格。ザビ家を中心とする軍の統制が徐々にだが始まる。

C・E・53年 ジョージ・グレンがナチュラルの少年の手によって暗殺される。

地球連邦政府は彼の死に哀悼の意を示し、また彼によって築かれた数多くの功績を称え名誉連邦市民勲章を特別に授与した。

この事件は当時いかにコーディネイターと、ナチュラルとの対立が激しいかを物語り、後の悲劇的局面にも繋がることにもなる。

この年プラントの運営を各市代表による「プラント評議会」へと移行。これはジョージ・グレン暗殺によって「反理事国」感情が高まったプラントに対する一種のアメでありまた表向きは「評議会」が運営するがその実「理事国」の息のかかった者や、その意を受けた「特別政治顧問」と称し常に議会を監視報告し少しでも意にそぐわない事があれば「評議会」の承認なしに以後議会の運営を取り仕切るなど有名無実化していた。

がしかし、「プラント」に住むものが政治的権利を得たことには変

わりは無く、以後「プラント評議会」は密かに「黄道同盟」を支援し、また独立への準備を着々と進めていた。

C・E・54年 S型インフルエンザが変異し従来のワクチンが効かないS2型インフルエンザが大西洋連邦を中心に大流行し、「パンデミック」を引き起こす。

これにより地球上のナチュラルの三人に一人の確率で発症しワクチンが出来るまで実に数百万人以上もの感染者を出し死者は百万を超える」とされた。

このインフルエンザは抵抗力の強いものには感染が弱まるとされ、実際コーディネイター達の多くは感染せず又感染しても何時もより熱がひどい程度で普通の風邪と変わらない症状しか発症しなかった。

そしてそんな中、ナチュラルの間でこのインフルエンザは実はコーディネイターがジョージ・グレン暗殺の報復措置として地球上のナチュラル全てを皆殺しにするために作ったものだと言しかに囁かれ、コーディネイターに対する市民感情は悪化した。この裏にブルーコスモスの陰も囁かれたが真相は未だ明らかになっていない。

C・E・55年 「プラント」でワクチンの開発が成功し地球への供給が開始されたが時は既に遅かった。各国は「トリノ議定書」を採択し今後地球上での遺伝子改変は禁止され、同年各国支配下のコロニーにも感染が拡大し、各地で暴動が起きコロニー「メンデル」ではブルーコスモスを名乗る武装組織による襲撃まで起きた。

インフルエンザによる社会不安、ブルーコスモスの暗躍、明確に現れたコーディネイターとの差、今までの鬱憤とが混ざり合いナチュラル

ラルの反コーディネイター感情は最悪になり各地でコーディネイターに対する迫害が行われ多くのコーディネイター達が「プラント」へとその難を逃れることになる。

後に宇宙世紀最大の民族浄化、ホロコーストとまで呼ばれる事態まで発展し後の大戦の原因の一つとなる。

第九話・火星領有・（前書き）

前を書き上げたのでそちらもどつどつ。

第九話 - 火星領有 -

U・C・0065年 この年地球連邦政府はある重大な発表をした。

地球連邦による「火星圏の領有宣言」が発表された。

宇宙世紀初期から構想されていた地球外惑星への移民計画。それが実を結んだ瞬間であった。

地球と火星は嘗てジョージ・グレンが設計した「ツオルコフスキー」を元に開発された全長二キロにわたる資源採掘探査船「ジユピトリス級」を完成させ数隻が建造された。其の内の二隻が地球火星間航路で半年間をかけて行き来していた。

それによって火星表面にドーム型の基地が数多く作られ又地球からの移民を受け入れるための軌道ステーションやコロニーも建造されていた。

各国はこれを非難。地球外惑星の開発は国家の枠組みを超えて一陣営が独断で行うものではなく国際社会共同で行うものだと「国連」で発言した。

他国にとって宇宙開発の遅れは益々宇宙での利権が連邦の独壇場になることを意味していたからだ。

各国も長らく他惑星への移民は計画していたがそれには莫大な資金と時間が懸かり、一国だけでは当然支えきれぬものではなかった。

それを解決するため各国共同でD・S・S・Dを創設しその資金と人員の目途が立った所にこれだ。

各国は焦った。特に「理事国」は「プラント」完成後着々とその力を蓄えたがその実、構成国同士が地理的、歴史的に絶えず緊張関係にあり又プラントの運営に関しても大西洋連邦とユーラシア連邦、東アジア共和国が対立し内輪揉めを起こしていた。

その為折角得た利益も互いの軍事力に浪費するばかりで新航路発見など夢のまた夢であった。

さらに連邦は木星圏にも資源採掘用のコロニーを建造し数基が実稼動にあると発表。

このままでは遅かれ早かれ木星も連邦の勢力圏に組み込まれ、地球にいる自分達は外宇宙への道を閉ざされ地球上で逼塞する事になりかねない。

そうならない為にも彼らは今まで以上にプラントに対して思いノルマを科すようになった。

翌年の C・E・57年 大西洋連邦、ユーラシア連邦、東アジア共和国の三大国の宇宙軍が合同でプラントに駐留を開始した。

後の連合軍の前身となるこのこの駐留軍はプラントに対する監視と有事の際二国共同で連邦に対抗するための意思表示でもあった。

同年プラント評議会に黄道同盟の創始者シーゲル・クラインとパトリック・ザラが当選。

シーゲルは理事国との交渉をパトリックは自衛戦力の充実に努め、来るべき理事国との独立戦争への道歩んだ。

第十話・開戦前年

C・E・60年代からプラントが地球への工業製品、エネルギー供給地として開発が進み、理事国はその恩恵にあずかった。

この時地球圏では「プラントに作れるもの無し」と豪語されるようになるが唯一つ食糧生産だけは地球からの輸入に頼るほか無かった。

何故か？初期の頃は閉鎖空間であるコロニーでのバイオテクノロジー農業が危険視されそれを理由に生産を禁止されていたがしかし、連邦コロニーでは自前の食糧生産プラントを持ち地球に輸出までしていた。

そしてようやくプラント市民は気付いた。此れは自分達を縛る首輪であると。食料が無ければプラント市民は生きてはいけず食料の輸入停止＝プラントの滅亡を意味しなにかあれば直ぐに理事国は食料の輸出を止めるだろうしその場合食料の備蓄が少ないプラントでは直ぐに理事国より先に限界が来るだろうし第三国を頼ろうとも理事国側の何らかの妨害があることは明白であった。

又プラントの利益独占に対して非理事国の反発が日に日に強まり一部では連邦との関係強化に進む国や黄道同盟を支援する国も出てきた。

プラントは重いノルマを課す理事国に対して起こした技術者の一斉サボタージュを行ったが理事国は此れに対して新鋭のモビルアーマー艦隊を派遣しプラントを威嚇。

折からの深刻なエネルギー不足で理事国に対する不満が高まっていたときにこの行動は逆にプラント市民が一気に独立派へえと傾く切欠になった。

評議会内部でも秘密裏に独立を目指すグループが結成。
工業用機会モビルスーツの軍事転用が水面下で進められた。
そして黄道同盟も此れを境に次々とシンパを増やし組織拡大と活性化に勤めた。

C・E・68年には黄道同盟党首のシーゲル・クラインが評議会議長に選出され、また多くの独立派が評議会議員の多数派を占めた。

そして監察官に極秘でプラントの自治権獲得と貿易自主権を決議し翌月理事国に発表、監察官はこの前日に運悪く交通事故に巻き込まれ重傷を負い以後評議会への出席が不可能になった。

理事国はこのため対応が遅れ結局のところ武力による示威行為に出るがプラント側も貨物船を改装した武装商船で対抗。

両者は睨み合い互いに軍拡への道を進む。

この件により地球上でブルーコスモスの勢力が強大化し全地球上で（連邦支配下を除く）コーディネイターに対する迫害や弾圧が強ま

り殆どのコーディネイターがプラントへと移住することになる。

残ったのは身分を隠したものが、連邦領に住む者に限られた。

プラントは極秘裏に非理事国に近づき食料輸入及び工業製品輸出の取り決めが行われまた連邦に対しても上記のことが交渉され第三国経由での支援を取り付けた。

非理事国が食料の輸出を始めたが「マンデルブロー号事件」が発生。プラント籍の食料輸送船が理事国哨戒船の臨検を拒否しそのままプラントへと突っ切ろうとしたため理事国側は此れを撃沈。

しかし調べた結果非常に驚くべき結果がでた。この船は確かに登録上はプラント籍だが実際は連邦所属の船であり行きプラント製の工業製品を満載し、月面のコペルニクス市で降りし帰りは引き換えに食料を満載して帰ってきたのだが此れは偽装で本当は連邦政府が送り込んだ工作員が乗っておりプラントに潜入し独立派への接触を行おうとしていた。

こうした事が手段を代え相手を代え行われていたことが判明し理事国は関係国を強く非難し理事国と非理事国及び連邦との関係が悪化した。

プラントでも一部事実を伏せられ「マンデルブロー号事件」は非道な理事国によるプラントに対する悪質な弾圧だとしてパトリック・ザラを中心として黄道同盟は解散、再編成され保安組織と合併しM

S 中心の軍事的組織である Z A F T が結成された。

翌年の C・E・69年 シーゲル・クラインは独自食料生産の開始に踏み切りユニウス市の7〜10を食糧生産プラントとして改装。

これに伴い理事国は実力でこれを排除すると勧告しプラントに対して威嚇行動にでるがプラントは此处で初めてMSを公開し、世界初の公式での実戦を行った。

Z A F T は理事国側の M A を翻弄し中流艦隊を完全に排除しクライン議長はこれを受け理事国側に完全自治権と対等貿易を要求。

理事国側はこれを当然拒否したが軍事力の整備が未だ不十分でその意味で時間稼ぎとしてプラントと理事国との間で交渉が行われるが議論は平行線を辿りプラント側は70年の1月1日までに回答が得られないならば理事国に対して資源及び工業製品の輸出を停止すると言言。

プラント側でも理事国に対して戦力が十分そろう前に決着をつけたいと強く思いその為、互いに緊張が激化した。

第十一話・式典・

多くの群衆が見守るなか、首を長くして今か今かとそのときを待っていた。

今日地球圏の多くの人々がこの時をテレビやラジオ、或いはネットの情報に耳目を傾けていた。

「ジオン共和はその独立にさい実には幾多の困難を乗り越え、今日この日を迎えました。」

「見てくださいこの群集を。今日この日のために各家庭及び各コロニーから多くの人々が集まって来ています。それほど今日この日多くのスペースノイドにとって重要な意味を持つ日に成るからです。」

そこでレポーターは言葉を切り改めてカメラに向かって話した。

「本日今日主賓が到着しだい始められるこの式典。そう、既にご存知のように今日この日史上初めてコロニー国家が正式に認められた日であると同時にジオン共和国独立十年を記念する記念式典が行われます。」

「既に会場には多くの人々が入り本日発表されている出席者の中には現内閣首相以下関係スタッフやザビ家を筆頭とするジオン有数の名家達、ジオニック社を始めとする各企業の重役や地球連邦政府が

らは連邦議会議員が多数出席しています。それ以外にも各国大使職員やプラント評議会からも大使団が来る予定です。」

そういつてカメラがポーターを離れ会場全体を映し出していく。式会場はズムシティの首相官邸裏にある広場で行われている。テロを警戒してか広場には銃を持った警備員やそれ以外にも此処に来るまで何重にも設けられた検問所を通るしかなくそれ以外の道は全て軍や警察によって封鎖されていた。

宇宙港でも厳重な身体検査や荷物検査が行われいつも以上に気合が入っていた。

またコロニー周辺ではジオン共和国国防軍艦艇と地球連邦軍による警戒が共同で行われており正に蟻の子一匹たりとも通さない念の入れようだった。

そうしてカメラが会場の全体像を写したあと今度は壇上にいる人たちの顔を一人ずつ写し始めた。

「現在まだ到着していない方もいますがそれでも铮々たる面々がその姿を見せています。中でもとりわ．．．。」

そこでリポーターの声は不自然に途切れカメラの画像が海上まで一直線の道走る二台の車を追い始めた。

そこに掲げられているひときは目立つジオンの国旗。それを柵引かせながら会場に入る黒塗りの車。

まず先頭を走っていた車がとまると自然会場の目もそちらに集中する。

車の周りを屈強な男達がガードしながら扉が開けられた。

まず最初に出てきたのは細身の長身をスーツに包んだ男である。国民の絶大な支持の元若くしてジオン共和国議長と国防大臣を兼任し又ザビ家筆頭であり長男でもある天才カリスマ、ギレン・ザビ。

続いて降りてきたのは軍服に身を包み、周りを固める屈強な男達を頭一つ分上回る巨軀を誇り、顔には夥しい傷跡が目立つが逆に臆することなく歩を進める男。ザビ家三男にして事故より奇跡の生還を果たした男。現国防軍艦隊司令を勤める武人、ドズル・ザビ。

その次に降りてきたのは此方もスーツに身を包み肩から踵までを確りと着こなし確かな足取りで歩を進める女性。その政治力ほかのギレン・ザビに勝るとも劣らぬ手腕を発揮しジオン外交を一手に引き受ける女傑。ザビ家長女キシリア・ザビ。

二台目の車からまず降りてきたのはまだあどけなさの残る顔立ちをした美形の少年である。仕官学校を卒業しまだ若く任官したばかりだが、その優しい人柄が国民に好かれ甘いマスクも会いあまってジオンの御曹司として人気がある少年。

四男ガルマ・ザビ。

最後にガルマに手を取られるように出てきたのは嘗て建国の父にして急逝したジオン・ズム・ダイクンの右腕として建国に尽力し、ダイクン亡き後二代目首相として国内の建て直しに勤め現在は第一線を退くも政界のご意見番として確たる影響力を誇る人物。ザビ家当主にしてギレン達兄弟の父、第二の建国の父として称えられる男、デギン・ソド・ザビその人の登場に会場はいよいよ盛り上がった。

片手に杖をつきながらも確たる足取りで壇上までの歩を進めるデギン。

其れに続くようにして兄弟達が歩みを進める。周りをボディイガード達が固めながら彼らは堂々と会場入りを果たした。

U・C・0077 開戦二年前の出来事であった。

第十一話・式典・（後書き）

皆様にアンケートです。

シヤアやセイラを如何しましょうか今悩んでいます。

出すべき出さざるべきか。

二人が出ないとアムロの出番が中々作れないので迷っています。

そこで二人を出すか出さないかを問いたいと思います。

あとできれば出す場合は二人の立ち位置を大まかでもいいので感想のほうに書いてくだされば幸いです。

ついでにダイクンは死んでもアストレイアの方は幽閉されています
ん。

第十二話・ジオン共和国・

式典が厳かに行われる中、ギレン・ザビはここまでの長い道のりを思い出していた。

U・C0067 連邦政府が頃々に自治改正法案を可決し、正式にコロニー国家として独立しその後の様々な各国との協議。

いやもつとそれ以前のことを彼はその脳裏に思い浮かべていた。

ジオン・ズム・ダイクンに思想に触れ若き日に学生闘争に明け暮れた日々、そんな折父から連邦への留学を決められ、反対するも結局は留学することになる。

最初は愚昧な連邦の元で学べることは無いと高を括っていたが、しかし其処で自分がいかに小さな世界にいたかまざまざと思い知らされた。

そこで出会った一人の男。

タマーム・シャマランとの出会いが全てを変えた。

そして私は変わりたいや変わらざる終えなかった。

今までの小さな世界でのジオン独立ではなくより大きな人類全体の

事について、そう人類という一つの種について私は大いに彼と議論した。

そしていままでジオンの思想を盲信していた自分が恥ずかしい。

確かにジオニズムはスペースノイド達に希望を与えた、しかしその考えは本来はスペースノイド達の独立を促し地球に住むものたちを全て宇宙に上げる事であつたはずだ。

しかし、実際のところその思想は迷走を始めているとしか思えない。新人類、つまるところ宇宙に出た人々はその環境に適応するために認識力が拡大し互いに誤解なく判り合えるようになる。

俗に言うニュータイプ理論だ。

ジオンは段々このニュータイプ理論に傾倒し最近ではニュータイプによって旧人類、つまり地球に住むアースノイドは滅ぼされ新たにニュータイプを中心とした人類社会が形作られる。

そういつた暴論の達成のため、ジオンは父デギン・ソド・ザビとたびたび対立してきた。

そして、極めつけはシャマラン自身が語る人類の新しいビジョン。

コロニー等ではなく他の惑星まで人類の生存権を確立し、地球を含む一大経済圏を築き、それによって人類の延命と地球環境の回復を図ろうというものだ。

そして実際に連邦政府は志願制で火星や木星の移住者を募り、その運動はスペースノイド、アースノイドの垣根を越えたものになっていた。

これはジオニズムと対立しないどころか初期のジオンの目標であるスペースノイドの独立さえも夢物語ではなくなる。ある一点を除いて。

そう、ニュータイプ理論と真つ向から対立してしまったのだ。そのためこの考えを発表するまでに何度もジオンの手のものから暗殺されそうになったり、実際に彼は公演中に狙撃されている。（犯人は分かっておらず、未だ捜査中で反シャマラン派のものから犯行と見られているが、実際はジオン・ズム・ダイクンの意を汲むジンバ・ラルの手のものによって行われた。）

私は最初此れを聞かされた時私は信じなかったがしかし留学を終え、父の傍で政治に関わるようになって見えてきたジオンの本質。

私はこのままでは遅かれ早かれジオンの独立どころかスペースノイドの独立さえ怪しく、若い学生の頃に思い浮かべていた英雄の真実の姿に落胆もしていた。

私は表向きは字音派としてダイクンに近づきつつも父と共にいかにして現実的な方法で独立を勝ち取るかを模索した。

連邦との間で何度も協議を重ねた。幸いにも時代は我々の味方だった、連邦政府は各コロニー駐留艦隊を引き上げたいと考えていた、それによって編成した新たな連合艦隊を地球圏の押さえとして使いたかったのだ。

しかし、連邦は建前上は地球の保持者であり、連邦市民に対してその生命及び自由と安全の保証を行うものである。

コロニーから艦隊を引き上げることには「連邦政府が市民を見捨てることに同義と捉えかねない。

そうなれば各国の格好の介入の口実にもなるし連邦の意義も問われる。

だがその点、ジオンは独立という建前があるから連邦は手を引けるとうか既に連邦経済の中心はコロニーではないのだ。

金のかかるコロニー経営よりもよリモっと大きなリターンが期待できる他惑星への開発で連邦はやっていけるし、コロニーに不満な市

民も優遇措置を取れば簡単に火星へ移民できる状態にある。

だてに、地球上の全人口の70%を移民させた連邦だ、その手のことはお手のものだった。

いまは志願制を敷いて急激な移民者増加に備えているが、準備が整えばそれが実行できるし、さらにコロニーが自分達で自治を行い安全や保障を自ら行うようになれば、連邦としてはさらに他惑星に向けての開発に専念できるそういうもんだった。

だから、最初は自治権の拡大から徐々に権利の譲渡を行い最終的には現在の連邦構成国と大体同列の権利を認め連邦議会に参加する権利を与えつつも経済的には連邦が握り、またコロニー人口の増加も移民で解消し尚且つ各コロニーの必要以上の躍進を抑える。

そのための先駆けとして連邦政府でも反対派を抑えジオンの自治権の拡大、最終的には独立まで行くと、各サイドでもそういった動きが出るためにわざわざ自分達の手を煩わせる必要がなかった。

そして、U・C・0067 連邦政府がジオン共和国の自治を容認し、ここに史上初めてのコロニー国家が成立した。

しかし、翌年ジオン・ズム・ダイクンは帰らぬヒトとなった。

彼は晩年政治を省みず専らその政務の殆どをデギン・ソド・ザビが

行い自身はジンバヤローゼルシア等と共に部屋に籠る様になり、久しぶりに人々の前に姿を現し、演説台に立ったところで彼は倒れた。もともと心身ともに疲弊し、心臓に問題を抱えていたカリスマは結局自身の思想の成果を見る間も無くこの世を去った。

最初これをジンバなどジオン派はザビ家の暗殺だと騒ぎ立てたが、しかし連邦政府による中立的な司法解剖の結果、心筋梗塞での死亡であり人為的なものではないという証拠が出たため逆に彼らはダイクンが死んだことにより、政治の主流から脱落することになる。

その後は、連邦の後ろ盾の元ザビ家がジオン共和国の実権を握った。一応平和的で公平な選挙も行いその結果殆どがザビ派のものが当選した。まあ当たり前ではあるが。

ただし、独立したから何でもよくなったわけではない。一番の問題は各国との関係である。とくに「理事国」は植民地である「プラント」の自治権を巡り争いが絶えないし、その影響か我々に対してもあまりよい感情を持っていない。

そして、国家にとって一番大切な剣と盾としての役割。つまるところ国防である。

本来は無謀な連邦に対しての武力による独立達成を目指すためにM

Sや新型船を開発建造していたがこれからはそれを公に出来る分、連邦との相互安全保障条約により互いに同盟関係でもあるから、日に日に理事国と連邦との関係が悪化するにつれ、我々もまた決断を強いられるだろう。

そう遠くないジオンに未来について考えているとどうやら式典が始まるらしい。

今回は特別なゲストをお呼びしているからさぞ父上や式典を見ているものたちを驚かすだろう。

「ふっ。 ジオン百年の計はこのときより始まる。」

第十三話・式典2・（前書き）

誤字、脱字、用法の間違いがあつたら感想のほうに書いてくれると
あり難いですので宜しくお願いします。

連邦の独善のターンです（笑

第十三話・式典2・

式典が始まったとき、シャア・アズナブルは士官学校次席として会場に立っていた。

彼はシャア・アズナブルは本来ならばこの式典の主演として壇上に上がってもおかしくは無かった。

そう、何を隠そう彼こそが、ジオン・ズム・ダイクンが遺児キャスバル・レム・ダイクンなのだから。

シャアは幼い時に父ダイクンが死にその後を受け継いだデギンがキャスバルを保護しようと動くが、ダイクンの側近であったジンバルはこれを察知し、キャスバル、アルテイシア、そして二人の母であるアストライアを連れ旧知のマス家を頼り地球に逃れた。

二人は身分を隠すためそれぞれ、エドワウ・マス、セイラ・マスと名乗りテアポロ・マスの養子として地球で過ごした。

ジンバは地球で二人にダイクンのニュータイプ思想とザビ家の陰謀説を説き、二人にザビ家への復讐心を植えつけようとした。

が、成長するにつれキャスバルはジンバが説く陰謀説とダイクン像、

母アウトライアが語る生身のダイクンの余りにも激しい剥離にキヤスバルは疑問を抱く。

そしてそれは父の理想であるニュータイプ、人の革新にも及んだ。

ジンバが死んだことをうけ、キヤスバルはシャア・アズナブルと名乗りジンバの息子ランバ・ラルを頼り再びサイド3に戻ってきた。

シャアは父の死の真相とダイクンの真の姿を知るために士官学校に入学はたし、そこでザビ家の末弟ガルマ・ザビと出会う。

ガルマが語る現在のジオン、そして父が目指したジオンとの違いをはっきりと認識しつつ、彼と友好を深めた。

そして現在。

式典が始まり横目に壇上のザビ家の面々を見つつ姿勢を正ししつかりと前を向き、士官学校次席に恥ずかしくないように振舞っている。

そして、演説台にジオン共和国首相、ダルシア・バハロが立った。

「御集まりの皆さん．．．」
ダルシア首相の演説が始まった。そして演説が一段落下し本来ならば来賓の話と国歌が斉唱される所だ。

しかし、そうはならなかった。ダルシア首相が突然「本日はここに居る皆様のほかにさる特別なゲストをお招きしております。」

そういつて自然と衆目の眼が壇上に集まりダルシア首相が壇上から降りていき。

そして、その人物が姿を現すと同時に会場がざわついた。それこそ本来ここにはいない筈の人物。地球連邦大統領 ベンジャミン・マツキンリー本人が壇上に上がってきたのだから。

人の良さそうな笑みを浮かべ聴衆に手を振りながらしかし連邦大統領としての威厳を兼ね備えた男が今私の目の前に立っている。

「皆さん、こんにちは。私は現地球連邦大統領 ベンジャミン・マツキンリーです。」

そう、マツキンリー本人が挨拶した。

「今日ここで皆さんと共に、この記念すべき日を迎えそしてこの場に立つ機会を皆さんと共に嬉しく思います。しかし今日世界は大変困難なときにあります。」

「かつて、連邦から離脱した各国は独自の陣営を築き対立してきました。地球に未だ住み続ける各国の皆さん。思い出してください。我々の先人だどういった気持ちで宇宙に飛び出したのか。そして何故地球を離れなければならなかったのか。」

「環境汚染、熱汚染に苦しむ地球に未だ多くの人が住み着き、それを特権として振りかざす。そして今日のスペースノイド、アースノイドの対立を引き起こしました。」

「しかし我々連邦はいち早く地球から巣立つべきだと。初代連邦大統領であり故リカルド・マーセナスは宇宙世紀改暦セレモニーで、人類は地球という揺り籠から飛び出て独り立ちをしなければならないと。そう語った故大統領は非道なテロにより惜しくもその命を落しました。」

「しかし、その精神は我々一人一人の心に受け継がれています。そして現在人類はその生存圏を大きく広げ、木星まで到達しました。ひとえにこれは困難な中でも希望を失わなかったスペースノイド達の果敢なチャレンジ精神があったからこそ成し遂げられたことです。」

そして私が立っているここサイド3は地球史上初めてのコロニー国家として成立しました。」

「ここに来て、最早我々を妨げるものは何者も無いのです。宇宙に住むスペースノイドも地球に住むアースノイドも共に手を携え硬く結びついたからこそ今日の我々があるのです。」

「ですが、それは我々地球連邦だけの話です。今現在世界では紛争やテロ、経済発展による環境汚染が深刻化し、地球はもって後三十年を切るとされ。それ以降は母なる地球は最早人類どころかこのままでは生物そのものさえ住めない死の星と化すでしょう。かつてテラフォーミング前の火星と同じ様な状況になるという学者もいます。」

「我々は長年の協議で各国にこれ以上の開発の中止と、環境の再生保護、宇宙へのこれまで以上の移民推奨を話し合いました。しかし彼らは頑なに我々の提案を拒みあまつさえこれは連邦の陰謀であると決め付けより一層の開発と軍備増強を行いました。」

「我々はこの暴挙に対しても忍耐を重ね粘り強く協議を重ねました。ここにいたって私は世界中のみなさん（オールピーポー）に語り掛けたい。本当にこのままでいいのか？このまま何もせずいたずらに地球が死の星に近づくのを加速させてよいのでしょうか？私達は決断し実行しました今度は貴方達の番です。我々と共に手を携え共に地球を救い、宇宙へと旅立とうではありませんか。そのためには国家ではなく一人一人個人の力が重要です。そして共に歩むならば我

々は協力を惜しみません。そして終局的には全ての組織が一つに纏まり、新たな指導者のもと地球と人類の輝かしい未来を築こうではありませんか。」

「人類の輝かしい未来を願い新たな諸問題も一丸となって事に当たることをここに誓います。」

演説が終わると会場は割れんばかりの拍手が巻き起こった。

そして各メディアもこれを世界中に報道し、各国に少なからず影響を与えることになった。

第十三話・式典2・（後書き）

人を喋らせるのは難しい。（汗

演説を考えるだけで半日は懸かった。

第十四話 - 開戦 . . . - (前書き)

戦争 W W 戦争 W W

諸君私は戦争が大好きだ！。

はい、戦争です。長かったようで短いような戦争までの道のり。この後どうやって連邦とジオンが関わっていくのか、考えるだけでワクワクします。それではお楽しみ下さい。

第十四話 - 開戦 . . . -

C・E・70 2月11日 この日地球連合はプラントに対して
宣戦を布告。月面のコペルニクス基地から艦隊を出撃させた。

誰しもが思っただろう、戦力、国力に勝る連合の勝利を。しかし、
そうは思わ無いものもいた。

その中の一つ、ジオン共和国は半ば確信していた、プラントのZ A
F Tの勝利を。

L 5宙域事変で世界中に知らしめたMSの力を。

ジオン共和国とプラントは極秘裏に水面下での技術交流が行われて
いた。無論その中にはMSの存在も含まれていた。

当初MSは宇宙空間における工作機として開発が行われていた。し
かし、両者を取り巻く政治環境の悪化により軍事的なものへと変化
していった。

様々な試作機が作られ互いに交流が盛んにはなったがそれも長くは
続かなかつた。連邦の態度軟化とジオン・ズム・ダイクン首相とシ
ーゲル・クライン議長との関係悪化により交流はその回数を減らし
ていった。

そして、ニュータイプ理論を掲げるジオンと自分達を新人類とするコーディネイターとの思想対立にまで発展し、交流は断絶してしまっただ。

しかし、両者の手元には交流によって生まれた莫大なデータと数々の試作機が残った。

プラントではこれ等を基に順プラント製のMS、ZGMF-1017ジンを完成、ジオン側もMS-05ザクを発表、後にMS-06ザク?へと発展しジオン側の主力MSとして定着することになる。

ジオン共和国はMSの運用の違いからプラント側は苦戦するも連合を退けるだろうと思っていた。

しかし事実はこれと大きく異なった。

C・E・70 2月14日

くしくもセントバレンタインデーの日に両者は合間見えることになった。この日がどちらが勝利の贈り物にするのか誰にも分からなかった。

少なくとも自分達が与えるのは相手の「死」以外には何物も無かったが……。

艦隊が陣形を組互いに打ち崩さんと砲火を交える、その中を一つ目の巨人達が相手に取り付かんと迫ってくる。

運の悪いものは砲火に絡め取られ宇宙空間に命の花火を散らす。M SとM Aが互いにぶつかりもつれ合いながら死のダンスを踊る。

そして、それに勝利したものが今度は敵艦に死を振りまく。

一つ目の巨人達に取り付かれた船は次々と落されていき、宇宙空間に一際巨大な命の閃光を上げる。

まるで御伽噺に出てくる巨人と神々の戦いのような光景。

テイタノマキア、創造神によって弾圧されていた神々が奮い立ち古き神を倒しこの地上に新しい神として君臨する物語。

コーディネイター達は思った、自分達こそが新人類で人類の進化の最前線だと、そしてナチュラル、旧人類に取って代わりこの生態系の頂点に君臨するのだと。

そう思った。しかし、その慢心が取り返しのつかない事態を引き起こすことになる。

連合があまりの被害の多さに撤退の準備を開始した、しかしそれを見逃すほどZAFはお人よしではない。この機に一気に殲滅せんと艦隊に迫っていった。その報を聞くまでは。

戦場外、ユニウス市の方角に宇宙空母一隻を含む有力な部隊を発見しコロニーに向けて部隊を展開したと。

彼らは急いで引き返した、コロニーを自分達の家を守るために。

アプリウス市の防衛についていたMSや後方の防衛部隊が全力を挙げて敵の迎撃に向かった、そのかいあってか敵MAは比較的短時間で殲滅できた。

「間に合った」と誰しもがそう思った。そのコロニーを指す一機のMAを見るまでは。

そのMAは出撃した他のMAに紛れコロニーへと一路目指した。極秘裏に作られたミラーージュコロイドを身に纏い、誰にも気付かれぬままコロニーへとまんまと近づくことができたのだ。

彼は自機に一発だけ搭載されているミサイルのトリガーを引いた。本来なら一発のミサイル攻撃ではコロニーは完全に破壊出来ない筈だった。そう、唯のミサイルなら。

ミサイルは真つ直ぐに愚直に定められた目標に向かって飛んでいった。そして目標に当たるとその義務を果たした。

突然コロニーのほうで巨大な火の玉が上がった、そしてその炎は余すところ無くコロニーを包みそしてコロニーは崩壊して言った。

誰しもが唾然とした。この日人類史上初のコロニーに対して核攻撃が行われた。そう、「最後の核」以後の人類の禁忌が再び目覚めたのだ。

後に「血のバレンタイン」と呼ばれるこの惨劇はこの戦争を大きく左右することになる。

閑話 あるMA乗りの記憶(前書き)

ちよつと息抜きにーっ

閑話 あるMA乗りの記憶

私ダグラス・D・マッケンジーは栄えある地球連合宇宙少佐軍第四艦隊所属第一防空MA大隊隊長である。

私はMA大隊隊長として日々部下達と共に訓練に勤しみ汗を流し世界の平和を守っている。

私はこの職に誇りを持っている。何故なら私は大西洋連邦市民であり又軍人でもあるからだ。そして今日の地球圏の平和と安全を守りひいては民間人を、家族を守るために私は進んで軍人となったのだ。

口で言うほどこのこれは優しくはない。だが、だからこそ私は自身の職に誇りと責任を持ち部隊と共に任務に当たっているのだ。

そして今日も今日とて私は昨今の世界情勢を鑑み部下と共に今日も訓練に勤しんでいる。

- 周囲には何も無い暗い宇宙空間を幾すじもの光芒がまたたいていた。 -

その光輪は美しく星々の煌きと共に宇宙空間に光のすじを作りその幾すじもの煌きが暗黒の宇宙空間に光の芸術を映し出していた。

しかいよく目を凝らすとそのすじの一つ一つは複雑な機動を描きつつも一つの線に集まっていった。

「スカイリーダーより各機状況を報告しろ」

「スカイツーこちら感度良好」

「スカイファイブ、ちゃんとして来てますよ」

「こちらスカイエイト、すみません若干遅れています」

「おいおい頼むぜスカイエイト。こちらスカイフォー全員ついて来てますよ」

「こちらスカイリーダー了解だ、全員ついて来ているな。スカイエイトのフォローにはスカイセブンが回れ、これより所定の行動に入る全機逸れずについてこいよ。」

そついうと先頭にいた隊長機はバーニアの出力を上げ宇宙空間をそ

のバーニアからもれる光のすじで切り裂いていく。

彼らが操るのは従来の航空機や宇宙船ではない。

船外作業船より発展したミストラルは近年旧式化が著しく最新鋭機が開発されていた。そして数々のコンペティションを勝ち抜き正式採用され時期主力機として現在各艦隊に配備が進んでいる最新鋭機。

「戦車並みの重装甲、戦艦並みの火力、そして戦闘機並みの機動性と空戦能力、接近戦での戦闘能力を持つ理想の機動兵器」

そういったコンセプトで作られたのが今彼らが乗るMA・メビウスだ。

メビウスに乗る彼らは一系乱れぬ機動で編隊を組み、時に急旋回を行い、宙返りをした後に左右に隊を分け互いに反転して擦れ違ったりとパイロットの技量もあるがこのような機動が行えるメビウスが以下に優秀な存在か見て取れる。

「スカイリーダーより各機。全機よくやった、各機は今後の課題と今日の訓練についてのレポートを訓練終了後明日までに提出、以後は管制官の指示に従い全機帰等せよ。」

無線機から「了解！！」と生きの良い返事が返ってくると俺はバイザーを上げ息を吐くと管制官の指示に従いながら機体を帰艦コースに乗せていった。

そして今日の訓練のことを思いつつメビウスの事について考えていた。

今だ各艦隊ではミストラルが主力だが何れ全機がメビウスに変わることは間違いない。が、これの初期型であるメビウス・ゼロは特殊なパイロットでしか操縦できず、一部のものにしか渡っていなかった。

しかし、このメビウスは一般のパイロットでも扱えるよう改良されそして任務に応じて搭載兵器が変えられる汎用性、そしてMAの名に恥じない軽快な機動性。正にメビウスこそ最強の機動兵器だ。

メビウスは量産が始まったばかりであり各艦隊のエース部隊に優先的に配備されている。そして我らがスカイチームにもメビウスが配備されている。

私はこの機体があれば決して決して先のL5宙域事変のような事は起きなかつただろう。しかし名将と名高いハルバートン提督はプラントなどという一コロニー群が開発したMSに御執心のようだ。

何故ザフトのような民兵が開発したMSなどMAをもつ我々連合が開発しなければいけないのだろう。確かに先の事変ではMSにしている様にされたがしかし実際の戦いでは我々が勝つ。

なぜならMSは軍事的常識的から見てもその巨大さが目に付く。そして確かに宇宙服から発展したようなその姿は汎用性とパワーという面で見れば確かに優秀なのかもしれない。

しかしそれだけ巨大であれば動かすたびに大量の推進剤を必要とし、また人型であるためにMA以上に細かい機動で余計に推進剤を消費し、実際の戦闘での活動時間はMAに較べて劣っているだろう。

つまり先の戦いは不意打ちとプラントというザフトの庭で戦ったがために負けたのであってもしあの時メビウスがあればザフトに後れを取るなどなかつただろう。

何れ開戦の暁にはザフトにメビウスの力をみせ誰が戦場の主役なのか教育してやるう。そうすればハルバートン提督も目を覚ましてくれるはずだ。

私は何れ合間見えるであろうMSに対して闘士を滾らせながら旗艦へと戻っていった。

この後ダグラス・D・マツケンジー少佐率いる部隊は開戦直後の会戦に参加。MSによって次々と味方が崩れていく中少佐の部隊は次々と戦果を挙げるも味方は敗退。撤退する艦隊の殿につき戦線を支えるも補給も整備も受けられず部隊は壊滅。少佐自身も戦死し二階級特進して大佐となり英雄として戦死後勲章が授与された。その後、故マツケンジー大佐の家族はエイプリルフルクライシスにより家族全員が死亡している。

地球連合軍戦死者報告書による記録 -

閑話 あるMA乗りの記憶（後書き）

うーん戦闘描写というよりも人を動かすのが苦手です。

やっぱり精進しなければ。

第十五話・崩落の宇宙樹・

銃口から放たれる曳光弾の軌跡が戦場を彩る。

「マーガス！マーガス！そっちのほうに行ったぞー！！」

「二時の方から新たな敵機。チツ、いったい奴らこの戦場にどれだけの戦力を集めてるんだ！」

「無駄口叩いてる暇があったら目の前の敵を落せ。クソツエイドリーが落された。」

戦場は混迷としていた、プラントと連合はL1の「世界樹」を巡り互いに凌ぎを削っていた。

「そうだ、第三艦隊はMA隊とそのまま敵を足止めしろ！第二艦隊は中央の第一艦隊と共に敵を半包围そのまま殲滅しろ。」艦橋で司令官が怒鳴る。その間にも戦場では幾多の命が散っていった。

C・E70 二月二十二日

「世界樹」には連合艦隊の内第一〜第三艦隊までが集結しまた世界中に駐留していた国連艦隊も合わせりM Aは艦隊及び「世界樹」駐留戦力も合わせ800機が待ち構えていた。

対するザフトはユニウスセブンの敵討ちとローラシア級三十八隻、改装空母六隻、武装商船十隻、補給艦八隻を伴い総MS300機以上もの戦力が一路「世界樹」を目指し進んでいった。

「血のバレンタイン」の後「黒衣の独立宣言」を全世界に放送し徹底抗戦の構えを見せると同時にプラント政府はまず駐留大使館を通じて非連合国に対し中立もしくはプラントとの通商協定締結を目指し各国と連絡を取り『クライン議長による積極的中立勧告』を宣言。

これを受け非連合国であるスカンジナビア王国、オーブ首長国連邦、赤道連合は中立を表明、北アフリカ共同体、そして最大の非連合勢力である地球連邦はこの勧告を受諾した。

また各コロニーでも今回の連合のコロニーに対する核攻撃という暴挙に対して批判が高まりコロニー世論ではプラントに対して同情的な意見が多数占めた。

コロニー最大勢力であるジオン共和国は直ぐにプラント支持を表明、軍事同盟締結とまでは行かないが物資援助を確約した。

この動きにあせったのが連合である、特に連合の盟主である大西洋連邦は自分達の足元である南米に拠点を置く地球圏最大勢力である地球連邦がプラントに対する支援行つとの情報を得てこれに抗議し一部連合部隊が暴発し南米パナマのマスドライバーを占拠するといふ暴挙に出た。

この南米事変と呼ばれる事件は非連合国や中立国からの非難を呼び大西洋連邦に浸透するブルーコスモスの影も囁かれたが連合内でも波紋を呼び特にユーラシア、東アジアは今回の行動に難色を示した。

当事者である連邦も早速部隊を派遣しパナマ運河を向こうに置き両軍が睨み合い一触即発の事態となった。

がこれを好機と見たプラントは月への橋頭堡確保のため「世界樹」に向け侵攻しL1宙域にて両軍が激突した。

これに慌てたのが何を隠そう連邦自身である。L1には連邦のコロニーサイド5があり今だ市民の避難が完了していなかったからだ。いまさら攻撃を中止させることなどできずプラント、連合両両者に対してコロニーに対する攻撃を留意するよう求めるのが精一杯であった。

さらに連邦は万が一の事態に備えて付近を航行中のパトロール艦隊及び各任務部隊と軌道衛星艦隊、月艦隊を派遣し救助活動を行うよう命令、またコロニー駐留艦隊は既に厳戒体制下でありサイド5前

に展開し両軍を牽制していた。

・コロニー駐留艦隊旗艦エンリケ

「艦長、ザフトと連合の動きはどうだ？」白髪が混じった髭を蓄えた初老にさしかかる男が聞いた。

「はっ両軍共に後一時間ほどで展開を終え戦闘を始めるものと思われます。」男の問いに答えて四十台を過ぎたノーマルスーツ越しでも分かる肥満体系の男マゼラン級エンリケ艦長フォブフト大佐が答えた。

「そうか、では本国からはなんと？」

「先ほど度変わらず駐留艦隊は援軍が到着するまでコロニーの安全確保を最優先とし市民の非難活動を終えるまで現宙域に留まれとのことです。」

「それはそれは、一番近い艦隊でもここから十一時間はかかる、それに付近のパトロール艦や任務部隊が来ても焼け石に水だろう。まったく貧乏くじを引かされたものだ。」

「司令．．．。」そういつて船長が嗜める様に言った。軍隊において上官が弱気であると言うことはそれだけで部下にやる気を失わせたり不安を持たせ作戦の成功率に大きく左右する。それが唯の一兵士だったら周りがフォローすればいい、しかし今この男の目の前にいる初老の少し疲れた顔をした男はこの艦隊の司令なのだ。艦橋のスタッフだけでなく全駐留艦隊将兵が彼を見ているのだ。その男が作戦開始前に弱気なことを言うなどあってはならないのだ。

「いや、すまん。指揮官である私が弱音を吐くなど、まあジャブローの政治家に期待することでしょう。」そういつてサイド5駐留艦隊司令ディッケンバー中将はノーマルスーツの襟元を正しながら今回の会戦にいやなものを感じ不快な汗を背中に垂らしていた。

しかし幸か不幸か今回会戦先立ちザフトはN_Jを試験的に散布しそれによりL₁帯の通信状態が悪化、連合及び連邦はコロニーとの連絡が途絶え戦況が全く伝わらない状況になってしまった。

そしてプラント政府から攻撃は「世界樹」のみに限定すると言う命令が伝わる前に散布してしまったためにザフトは勝手に戦線を拡大してしまった。

会戦から数時間が経過し精強を誇った^{ニートロンジャマー}連合艦隊はその数を著しく減らした。ザフトも試験的に運用したN_Jの影響で部隊間との通信が取れず結局個々の戦場に終始し双方の戦力が拮抗することになりいたずらに放火を交えた結果「世界樹」以下各コロニーに重大な損害を与えてしまうことになる。

サイド5も例外ではなく直接攻撃こそされないものN_Jの影響で地球との連絡が取れずまた索敵や部隊間の連絡にも支障を来たし満足な防衛ラインを築けずにいた、そして撃破された戦艦やMSの破片が猛烈な速度でコロニーに降り注ぐ。

本来なら結成以来宇宙をその職場とした連邦宇宙軍は万全の状態ならばこれしきのデブリを迎撃することは容易かった。しかし、いま部隊間の連携もネットワークも間々ならぬいまデブリは迎撃される事も無くその脅威をコロニーにぶつけようとした。

連邦も目視での射撃やレーザー回線を通じて一応の事態の収縮を達成したがしかしデブリ全てを迎撃することは適わず、いくつもの破片がコロニーや艦隊に降り注ぎコロニーや船を傷つけていった。

しかしこれはまだ序章にしか過ぎなかった。

会戦から八時間が経過し、連合は終にL1の「世界樹」の放棄を決定、追撃を避けるため「世界樹」コロニーを爆破崩壊させ巨大なデブリを発生させた。

ザフトは自艦隊に降り注ぐデブリをMSやビーム砲をもって迎撃し破片の影響圏内から退避していった。

しかし連邦は悲劇であった。既に幾つものデブリの破片を受け艦隊はその迎撃能力を五十パーセントにまで減らしていた。そんな彼らに「世界樹」が崩壊したことにより巨大なデブリが戦場全体に広がり彼らに襲い掛かった。パトロール艦隊や任務部隊が必死の救助活動を行うも全コロニー市民の避難まで後二時間以上かかった。

彼らはザフトや連合と違い背後に守るべきコロニー市民がいた。そしてそのためにはその身すらも盾としてデブリにぶつけていった。

「全艦砲火を集中してデブリを砕け。小型のデブリはいい、コロニーに被害を与えそうな大型のものだけを狙え。」

「損傷艦を下がらせる！！手の空いてるものは艦の応急処置に向かえ。」

既に旗艦はボロボロであった。いかに宇宙戦艦といえども度重なるデブリとの接触により装甲は捲れ上がり砲身は曲がり、対空砲火やミサイルはその数を減らしていった。

だがまだこの船はいい、装甲の薄いパトロール艦やサラミス級宇宙巡洋艦はデブリの衝突に耐え切れずあるものは融合炉に直撃を受け自身が新たなデブリとなる始末だった。

既にザフト側はNGの散布を止めていたが残留粒子の影響がまだ残りいまだ地球との中心が取れない状況にあった。

そしてようやくL1にたどり着いた艦隊が見たものは既に宇宙の塵と化した世界樹の残骸と壊滅して既にデブリと見分けがつかなくなった駐留艦隊の残骸、そしてL1中に広がる救難信号の光だった。

次回

コロニーの思わぬ損害を受け連邦は揺れ動く。

そしてこの隙を突くようにザフトの影が地球に迫る。

次回第十六話「ビクトリアの陽炎」。

君は生き残る事が出来るか・・・。

第十五話・崩落の宇宙樹・（後書き）

長らく更新がご無沙汰でした。

やっと本格的な戦争に入りました。

次回は第一次ビクトリア攻略戦です。おそらく史実とはまた違った展開になるでしょう。それでは次回またお会いする事があるまで。

第十六話・ビクトリアの陽炎 -

C・E70 三月八日

「世界樹」攻防戦の結果、L1は世界樹崩壊によりデブリベルトと化しプラント側の戦略を大きく狂わせることになる。

当初プラントではL1を確保することによって月への橋頭堡とそして地球からの食糧輸送の中継地として運用するつもりであった。

しかし、世界樹コロニー崩壊によりL1宙域は航行不可能になり、地球からの食糧輸送も困難になっていた。

さらに折角確保した橋頭堡も、補給の困難さと大規模戦力の展開が困難な状態で、結局なんら成果の無い結果に終わったのだ。

これに焦ったプラント評議会はすぐさま食糧確保のため地球侵攻決定、アフリカ共同体からの支援があるとの情報も得て、ビクトリア湖にあるマスドライバー「バビリス」攻略を目指した。

連合、及び連邦はザフトの動きを直ぐに察知したが、前者は戦力的

な理由で、後者は政治的な理由で手を打てずにいた。

地球連合宇宙艦隊はプラント、及び世界樹攻防戦で戦力をすり減らし、連邦もL1崩壊によりサイド5が甚大な被害を受け救助活動に艦隊を派遣して身動きが出来なかった。

だが、ビクトリア湖にはユーラシア連邦を主力とした部隊が防衛任務に就き、また地中海にも艦隊を派遣し、アフリカ共同体に圧力を掛けていた。

この為、当初連合の軍関係者達は地上支援の得られないザフトは、如何にMSが優れているともマルタ島宜しく、戦力を消耗するだけに終わると見ていた。

しかし、この予想は大きく裏切られることになる。

・地球軌道上 地球降下部隊旗艦ムラコフ・

壮年の艦長がじっと、目の前のモニターを睨みながら、顎に手を当てて何やら考え込んでいた。

「連合の動きはどつだ。」

「はい、偵察部隊と衛星からの情報によりますと艦隊はコペルニクス基地に潜っていて出てこないようです。」オペレーターが情報を整理統合しながら答えた。

「地球連邦は。」

「此方も軌道衛星艦隊は現在厳戒態勢下にあり軌道衛星に留まっています。その他の艦隊は各コロニーでも同じ様に厳戒態勢を取っていますが、艦隊が出撃する様子はありません。」

オペレーターはそう答えると、また自らの業務に戻った。

「艦長は心配性だな。」そう言って艦長席の隣に座る白服の男が笑いながら言った。

「連合は我らの力を恐れて穴倉から出てくれず、連邦もなんら動きを見せない。一体なにが心配なんだ？」

「艦長としてクルーを守る為に職務に励んでいるだけであります。私としてはこんな状況で笑ってなんか出来ませんがね。」

そう言われると白服の男は肩を上げ、ヤレヤレといった風に首を振った。

そうしてふと艦橋のモニターから目を離し、艦橋の外に見える無数の艦隊の煌きに目を奪われていた。

地球軌道上に展開したザフト艦隊はローラシア級二十八隻、武装商船十隻、仮装空母八隻の艦隊。

降下部隊はローラシア級四隻、大型輸送艦二隻、輸送艦十隻になり、総勢六十二隻もの艦隊が軌道上に展開していた。

無論これだけの戦力を派遣したのには訳がある。

プラント政府は最初地球侵攻の拠点として、地球連邦からオーストラリアにあるカーペンタリア湾一帯を、租借する手筈になっていた。
しかし、先の世界樹攻防戦でサイド5は多大な被害を受け、地球連邦はプラント、地球連合に対して不信感を募らせていた。

その結果、租借の話は有耶無耶になりザフトとしては何としても「

「バビリス」を落し、地上拠点を確保するしかなかった。

その為、本来カーペンタリアに降下するための資材も使い、これだけの戦力を整えることが出来たのだ。

三月八日 六時 降下作戦は開始された。

H L V ユニットだけで六十以上、総 M S 数二百機を越える部隊が大気圏の摩擦熱に揺られながら、地上へと降下していった。

迎え撃つ地球連合軍は戦車五百両、戦闘車両千台以上、航空機六百機にもなる大部隊が展開していた。

本来ならこれ等部隊が有機的に連動し、無防備な H L V のその半数以上が撃ち落される筈だった。

しかし、降下に先立ち、秘密裏に降下した特殊部隊が、アフリカ共同体の支援を受け、降下にあわせて N J を発生させた。

地球連合地上部隊は突然部隊間との通信が妨害され、その際に次々とザフト降下部隊が地上に降り立った。

・マスドライバー　バビリス　・

「一体どうなっている!！」

管制室で司令官が怒鳴る。

「分かりません、突然全通信索敵システムに障害が発生し全部隊との通信が途絶、レーダーもさっきから反応しません。」

「敵のハッキングやジャミングの可能性は、復旧はどれ位かかる。」

「駄目です。全システムに障害が発生していて復旧は困難です。恐らくこのジャミングを発生させている基を叩かない限り復旧は難しいと思われます。」

「くうく、このままでは防衛どころか戦う事すら間々ならん。電波でもレーザー通信でもいい、部隊との連絡を取れ!！」

「司令、外を!！」

管制塔の窓の外を指差して参謀の一人が叫んだ。

何事かと司令官は参謀の傍まで向かい徐に差し出された双眼鏡を手
て取って指差された空を見た。

最大倍率で覗き込んだ先には、大気圏突破の熱の尾を引いた幾つもの
流星が流れてきた。

「デブリか、いや、違う。」彼はすぐさま振り返って命令した。

「敵の降下部隊だ。すぐに航空部隊を全機出撃させる！全地上部隊
に通達対空戦闘用意、索敵が困難なため射撃は目視で行え！なお本
部との通信が困難なため以後の迎撃作戦は現場の指揮官に一任する。」

そう言うや否や管制塔は俄に忙しくなった。

彼方此方で怒号が響き渡り、オペレーターが悲鳴をあげ、参謀が忙
しなく動き回った。

そんな中司令は一人無然として椅子に座り、今後の方策を考えてい
た。

ザフト降下部隊は敵の混乱を他所に次々に展開し、部隊と合流して
一路バビリスを目指した。

中には敵の目の前に降下してしまい、あえなく連合に撃破されてしま
ったものもいた。

しかし、これ等の部隊は全て陽動で本命はバビリスに直接降下した
部隊であった。

降下部隊には精鋭が選ばれ、司令部の混乱をより更に助長させた。

バビリス周辺に降り立った部隊は、直ぐさま分かれて重要拠点確保
に動き出した。

これはスピード勝負だった。前線に降り立った部隊が敵の戦線を突
破し合流するまでの間、彼らは重要施設を全て押さえ、尚且つ敵の
敵のど真ん中、限られた戦力で守らねばならなかった。

- 第一防衛ライン -

「ハリス、ハリス、前に出すぎだ！一旦後ろに下がって体勢を

立て直せ。」

「クソツ、右腕をやられた。奴ら通信が出来ないくせに連携しやがる。」

「雑魚には構うな、一旦後退して部隊を立て直す。ジヨーブル隊が援護してくれる、引けえ。」

「敵が後退していきます、追撃しますか？」

「いや、通信が回復今の状況で打って出れば逆にこっちがやられる。このままこの場所を守りきるぞ。」

「伝令、伝令。」

「如何した。」

「第六十六中隊が突破されました、急ぎ部隊を後退させ戦線を立て直せとのことです。」

「了解した、陣地を放棄する。他の部隊にも伝える、奴等が気付く前にこの場を離れる。」

「一体奴ら如何したんだ、急にいなくなりやがって？」

「いま連絡があった。他の戦線が突破されたから奴らも交代したらしい。オレ達も急ぐぞ、このままじゃ他の部隊に置いて行かれる。」

・バビリス 管制室・

「第二防衛ライン突破されました！！」

「各所で部隊が敵に分断されつつあります。それに航空支援もバイマール空軍基地が敵に占拠され思うように動けません。」

「第三機甲師団、第三機甲師団、応答せよ。ダメです、第三機甲師団応答しません。」

「此方中央管制塔南側通路、現在敵コマンド部隊と交戦中、救援を求む。」

「施設内をMSが暴れまわっています。航空支援を。」

「馬鹿者、マストドライバーに当たったら如何する。現有戦力で何とかしろ。」

状況は悪化し、刻一刻と陥落の音が近づいていた。

そんな中司令官は唯黙って椅子に座っていた、そして一言呟いた。

「司令部を放棄する、全軍に撤退命令を。」

そう呟くや否や、管制室は水をうったように静まり返った。

「司令、今何と？」参謀の一人が恐る恐る、代表して聞いた。

オペレーターさえも黙って司令官の様子を伺っていた。

「聞こえなかったのか？司令部を放棄する、全軍撤退だ！！」

司令官は怒鳴りながら肘掛を拳で叩いた。

「司令部から人員を引き上げた後ここをマストドライバー事爆破する。」

その後各部隊の判断で戦線を離脱、再集結ポイントは……。」

言われるや否や司令部は先までの慌しさとはまた違った喧騒に包まれた。

早くしなければこの自爆に巻き込まれる。そんな彼らの焦りが撤退の準備を急がせた。

しかし、古今兵法で撤退戦ほど難しいものは無い。そしてこの戦場でもそれは例外ではなく様々な困難に見舞われた。

「司令、ここを爆破するのは良いとして、実際問題爆薬が足りません、いえ万一の事態を想定して相当数確保していたのですが、それもこの混乱の中で上手く機能するかどうか……。ここは爆破をより徹底すべきでは。」

「分かった、たしかまだ戦略飛行団が残っていたな。あれにここを爆撃させる。」

ここで言う戦略飛行団とは、各地にある地球連邦の重要都市への爆撃目論見、整備された戦略爆撃部隊である。
はタカール
アフリカで

彼はビクトリア防衛だけでなく、キリマンジャロ基地への抑えとし

て、彼に指揮権が与えられていたのだ。

一度命令が下されれば、戦略爆撃機の群は、定められた目標に向かいその都市が灰燼に帰すまで執拗に爆撃を行うだろう。

例えそれが味方の都市であってもだ。

参謀は事の重大さに少し顔が蒼くなりながらも、命令を遂行するため撤退作業に戻っていった。

- 前線 -

ザフトはマストドライバーまで後四十キロの地点まで迫っていた。

「隊長、何だか妙じゃありませんか。」

「そうだな、さっきから敵が散発敵に攻撃を仕掛けて前のように組織だった抵抗をしてこない。」

事実彼らはここに来るまで激しい抵抗にあっただが、しかしそれ

がピタリと止まっていた。

しかもここだけではなく、全戦線において似たような現象が起きていた。

「何か罫があるんじゃないですか？」

そういつてモノアイのカメラを動かすが、戦場は先程までとは打って違って、静まり返っていた。

「ここまで奥に来てしまうと、本部との通信も出来ないしな。」

「如何します？」

「ここまで来て引き返すことも出来ん。各機警戒を厳に慎重に進め。」

「了解!!」

彼らは疑念を抱きつつも、確実に

・ザフト攻略部隊司令部・

「敵の抵抗が無くなりつつあります。」

オペレーターが各部隊から挙げられてくる情報を後ろに立つ、口ひげが目立ち目を細めている男に言った。

「敵の司令部を落したのか？」

男はマーク・トゥエインは口ひげを指先で撫でながら聞いた。

「いえ、降下部隊からは重要施設は粗方抑えましたが、司令部近辺は抵抗が激しく今だ制圧できたとの報告はありません。」

「では、如何したんだ？まさか魔法を使って連合が消えた訳ではあるまい。」

「しかし、こうもNJが強いと索敵にも支障が出て、一々中継地点を立てなければ部隊間の通信も間々なりません。」

「そうか分かった、出来る限り情報を集める。全部隊にはそのまま前進を続けると言え。」

「宜しいのですか。」

作戦スタッフの一人が聞いた。つまりこれは罨ではないのかと、或いは何らかの作戦の一部ではと、そう考えているのだ。

「いや、この状況で罨も何も無かるう。そうだったらもつとはやく手を打つ筈だ。いまさら戦況の巻き返しなど出来ないだろう。それよりも私だったら全軍をマスドライバーに集結させ籠城を決め込むか。」

「若しくは自軍を巻き込んでの自爆、ですか。」

スタッフが言葉を引き継ぐ。

「まあ、そうなる前に早く落せばいいんだがな。」

そう言いながらも彼の目は先程までと違い、地図上のマスドライバーに険しい視線を送っていた。

この時、ザフト全軍は余りにも戦力を広く展開しすぎたために、部隊間の隙間が広まり、そこを縫うようにして連合の部隊は次々と撤

退していった。

無論、幾つかの部隊は悟られぬよう抵抗を繰り返したが、いざとなつたら撤退してもよいと現場からの命令を受けていたため、危なくなつたら後退していった。結果ザフト軍を奥地へと引きずり込んでいくことになった。

最後まで抵抗すると見られた司令部は、あっさりと陥落。コマンド部隊が突入したが、司令部は既に無人の空だった。

ザフトは直ぐに工兵部隊に派遣し、爆薬の撤去作業に移った。

無論全部隊には引き続きマスドライバー周辺の残敵掃討と、警戒強化を言い渡し、ザフトは重苦しい緊張感のなか、任務に当たった。

コマンド部隊は司令部で情報の吸出し作業を行っていた。

しかし、殆どの情報は破棄され、残っていたものの中には目ぼしい物は無かった。ならばブラックボックスはと探したが、既に待ち去られたか或いは破壊されたりしてなんら成果を上げる事が出来なかった。

工兵部隊もまた、困難にぶつかっていた。

MSの支援の下、工兵が慎重に爆薬の撤去作業を行っていた。目立つ場所に場所にあったものは殆ど処理が完了したが、問題なのは重要な施設に設置されたものだ。

時限式か遠隔操作か分からない状況の中、工兵は時間と戦いながら、困難な場所に設置された爆薬の無力化に励んだ。

しかし、そんな彼らの作業をあざ笑うが如く、基地に電力を供給していた施設の一部で爆発が起こった。

それに連動するかのように基地やマスドライバーの彼方此方で爆発が連鎖し、一部解体作業に入っていた部隊を巻き込んで基地の彼方此方で煙が上がった。

その為作業は一時中断され、負傷者の救助と手当てに向かうことにより、いまだ撤去されていない爆弾はまだであると予測させた。

「上手くいったようだな。」

防衛部隊の司令官が丘の上でマスドライバーの各所で轟音と火の手が上がるのを見てしたり顔をした。

「司令そろそろ時間です。」

ジープに乗っていた副官がそう告げると、指揮官はジープに飛び乗り彼らはビクトリアを後にした。

・ビクトリア上空一万二千メートル・

「コマンダーよりB1（バビリス）到達まで30分、各機爆撃進路を取れ。以後B1作戦完了まで無線封鎖とする。」

アフリカの空を扁平状の三角形を思わせる黒塗りの機体が音も立てずに飛んでいた。

上から見るとVの字にも見えなくも無いその機体は、この世のありとあらゆる破壊兵器を搭載可能で、一度命令が下れば世界中の各都市に八時間以内に到達し、半日もあれば世界を灰に出来る恐るべき

兵器であった。

完璧なステルス性と縮音性、飛行速度、航続距離、限界高度、全てにおいて完璧なこの爆撃機が、マストドライバーに迫っていた。

破滅の翼が、音も立てずにザフトへと迫ろうとしていた。

それは最初、小さな点だった。しかし、段々と近づいてきて点が大きくなるにつれそれらが無数に地上へと降り注ぐ爆弾だと分かった。

基地中の彼方此方で火災が発生し、阿鼻叫喚の地獄のようだった。

基地はまるで月面の用にクレーターだらけになり、マストドライバーもその巨体を爆撃の轟音が日々渡るにつれ、大きく揺らしていった。

MSは見えない敵に向かって銃を撃ち、逆に近くに落ちてきた爆弾の直撃を受けて、この地上から姿を消した。

ザフトマストドライバー攻略司令部では、通信から送られてくる悲鳴と怒号とが響き渡り、混乱の真っ只中にあった。

やっと自体が収集出来た時には、既に爆撃機は遠くに飛び去り、基地は完全に破壊され、マストドライバーもまた甚大な被害を蒙った。

展開していた部隊はその多くが撃破、よくて大破判定を受け、奇的に生き残った者達にも、爆撃の恐怖で精神に異常をきたした者が大勢でた。

ザフトは念願のマストドライバーこそ手に入れたものの、部隊は甚大な損害を蒙り、またマストドライバーも崩壊はしなかったものの、復旧には半年以上かかる見通しだった。

第十六話・ビクトリアの陽炎 - (後書き)

ザフト涙目。

でもきつと大丈夫。いざと成ったらN.J落して連邦のソーラ・レイに焼かれればいいだけだから(笑)

第十七話・苦渋の決断・（前書き）

やっと更新。

でも、短い。

第十七話 - 苦渋の決断 -

- 地球連邦 大統領官邸 -

窓から日の光が差し込み、部屋の中を明るく照らしていたが、中にいる彼らの顔は皆暗い表情をしていた。

大統領執務室、現在この史上最大にして地球圏最高の権力を持つ男がいる部屋、その部屋には、大統領が座る椅子に向かい合うように、官僚スタッフ達が立っていた。

「大統領閣下・・・ご決断を。」

きつちりとスーツを着こなし自信と誇りに満ちた男がしかし、今は何処か悲痛そうな声で言った。

大統領は何も答えず、暫し執務室には沈黙の帳が下りた。

「もう一度申し上げます、先の「ロニー」もういい!!」「・・・。」

「諸君は・・・諸君は私にもう一度旧世紀の愚行を起こせと言いた

いのか!！」

「閣下……。」

別の男が何か言いたそう仕草を見せるが、大統領は構わず続ける。

「何のために、先人達が苦勞してつみあげてきた偉業を!!今更、
全て無に帰せと言うのか。」

そこまで言い切ると、大統領は机の上で白くなるまで握り締めた拳
が戦慄していた。

彼は今ほど自身の立場を後悔したことは無い。今までここまで来る
までに散々煮え湯を飲まされたし政治や権力の魔の手に襲われたこ
とも少なくない。

しかし、彼はそれでも連邦を、人類を導く立場にあると自覚してい
た。

幾多の苦難を乗り越え、今この椅子に座っているのは偶然ではない。

いま彼を途惑わせているのは、地位でも、名誉でもなく、恐怖であ

った。

自分が史上最悪の人間として歴史に記され、嘗て旧世紀の冷戦でさえ起こさなかった愚を行った者として永久に記憶されるのは覚悟している。

では、何を彼が恐怖しているのか？

それは、創世記に始まり宇宙に上がりここまで四半世紀以上積み上げてきた、人類の歴史、偉業、英知、理想、全てを失うことを恐れたのだ。

「大統領閣下、お気持ちは察します。しかし、いま我々が断固たる決意を示さねば、事はコロニーだけではすみません。」

「いや、寧ろ、ここで決断を引き伸ばすことこそ、連邦市民に対する冒瀆です。」

決断を促した男が、しかし先程の悲痛さは収め、心を尽くして大統領を説得した。

「統合参謀としても、その意見に賛成です。現在の状況では軍としては安全を保障しかねますな。」

軍服の多数の勲章を誇示するように身に纏った肥満体型の男が、額に浮かび上がる脂ぎった汗を拭いながら、国防長官の言葉を支持した。

「ここにいる、全員がそうか。」

そう言つて大統領は執務室に集まつた者達一人一人の顔を見ながら言つた。

そして、徐に差し出され、机に放置された書面を引き寄せ、震える手を何とか押さえ、署名していく。

そして、書類を秘書に渡しながら言つた。

「これで、私も諸君らも、人類を三度目の大戦に陥れた共犯者というわけか。」

大統領はそれつきり言葉を瞑り、手で一人にしてくれと合図した。

第十八話・エイプリルクライシス・（前書き）

前回の補足的な。

あれ、南極条約忘れてる。

どっかに挿話としてはさむか。

第十八話・エイプリルクライシス・

バビリスを攻略することに一応成功したザフトだったが、しかし、払った犠牲は大きく、投入戦力の実に五割以上の損害を受けてしまい、また、敵の司令官に逃げられるという失態も演じている。

さらに、航空戦力を持たないザフトは、戦略爆撃に対応できず、マストライバーとその周辺施設共々大きな被害を蒙ってしまった。

現在はアフリカ共同体の支援を受けつつも復旧作業に取り掛かっているが、マストライバーを最低限復旧するには三ヶ月以上もかかった。

今回の事態を憂慮したプラント評議会は、更なる地球への援軍派遣とこれまで以上の攻勢を求められた。

さらに、今回の戦訓からMSは現代戦よりもNJ影響下での目視戦闘こそ最大の威力を発揮する事が改めて認識され以後ザフトでは戦闘前にNJを散布する事が鉄則となった。

当初、クライン議長は当初の目的が達成できない以上地球上からの撤退を行おうとしたが、パトリック・ザラ率いる国防委員会からはあくまで地球上での戦闘継続を主張した。

だが、プラントは地球全土を支配下におけるほどの戦力を持っていない、あるとすれば連邦だけだ。

その為必要最小限の攻撃で最大限の成果を上げられる方法が模索された。

その中には廃棄された世界樹コロニーを地球に落とすなど物騒極まりない意見も合ったが何とかまとまり、「オペレーション・ウロボロス」が発動された。

プラントは作戦の機密性を保つまで親プラント国家にさえ作戦の内容を説明せず、作戦を強行した。

地球連邦軍はプラントが大規模な地球増援艦隊を察知していたが、関係部署に連絡するも連邦は今非常に微妙な立場にあり、ザフト艦隊に対して手が打てない状態だった。

そして、悲劇は起きてしまった。

地球降下のその直前にプラントは地球全土に向けN.J.キャンセラーを無差別に散布、核の無力化と近代戦の破壊を行った。

そして、地球に飛来する数えるのも馬鹿らしい数のミサイルが降り注ぐのを見てある連合仕官はこう記した。

『空が落ちる』

残された日記にそう記してあった。

NJの被害は核兵器や近代戦の破綻だけでなく、今回の大戦に無関係な一般市民にもその牙を突き立てた。

エネルギーの枯渇した地球では、消費電力の大半を原子力に頼っていた、しかし、今回散布されたNJにより全ての原子力発電が不可能になり、エネルギー不足によるインフラ破壊、食料、燃料不足による被害は二次被害、三次被害も含めると、地球上の総人口の二割にも及んだ。

この暴拳の結果、プラントは地球上の国家全てを敵に回すことになるが、その結果彼らがどうなったのかは押してしるべしであろう。

地球連邦も被害を受けたが幸いにしてジャブローをはじめ各拠点の直接的な被害はそれほどでもなかった。

これは、ジャブローに代表される宇宙までも視野に入れた堅牢な防

空体制と事前に発動されたデフコン1の結果であり、多くの突入ミサイルが撃墜された。

また、懸念されたエネルギー不足も、各コロニーから送られてくるエネルギーで不足分を補える事が出来、緊急事態のため隠匿されていた核融合炉発電にも火が入り連邦は他国ほど深刻なエネルギー不足に陥ることは無かった。

しかし、NJにより従来の通信全てに支障が発生し、情報という面では地球連邦は各所で寸断された形になった。

ジャブローでもまた、突入してきたミサイルの、内九割は堅牢な対空砲火によって迎撃されたが、僅か数発の本命のミサイルにより、地球全土で通信が取れなくなり、連邦軍の組織的ネットワークはここに破綻した。

だが、地球連邦はまだまじだった、いや、寧ろ世界的に見れば僅かな混乱と被害ですんだだけで奇跡だった。

しかし、核融合炉技術も、エネルギーを送電してくれるコロニーも持たない国家は悲惨であった。

地球軌道から見ると、連合を始めとした北半球の国家は文明の火が

消え、その下で何億という市民が苦しんでいった。

北の大地では、飢えと寒さで四肢が凍り、エネルギーを絶たれインフラが崩壊した都市では世紀末さながらの混乱と暴力とが踊り狂い、人々は神に祈り、己が無力を嘆いた。

病院では担ぎ込まれる患者を治療できず、野晒しにされた死体が疫病を運び、水も食料も住むとこさえ無くしたもの達は思った。

何故、何故、自分たちがこんな目に合わなくちゃならないのか。いったい自分たちが何をしたんだ、と。

そんな時、彼らの耳に何処とも知れずにこんな噂が入った。

『今の状況はコーデイネイターが地球に住むナチュラルを全滅させるために起こしたのだと』

あながち間違っていないこの噂は一気に膨れ上がり、各地で過激なコーデイネイター狩りが行われることになる。

この噂の陰には、連合内に浸透したブルーコスモスと民衆の不満の矛先を逸らしたい政府との思惑が結託して起こしたことだと言われているが、真相は不明である。

世界中で火が消えた直後に、ザフトは地球に大規模な増援と新型M
Sを送り込み、以後地上で泥沼の殲滅戦を行うことになる。

第十八話・エイプリルクライシス - (後書き)

補足として。

連邦は被害こそ少ないものの情報化された社会では通信の途絶こそもっとも恐るべきことであると思います。また、少数ですが連邦市民の中にもブルーコスモスの思想を植えつけられた者達が、各地で反コーディネイター運動を起こし社会不安が増大しています。

連邦議会は今回の暴挙でプラントに同情的であった世論が一気に反コーディネイターへと傾きます。

そして、次回止めの一撃が起こって十七話へとつながります。

第十九話 - 間隙の戦火 - (前書き)

今回かなり無理やりです、ご都合主義です、グダグダです。宣戦布告の理由付けなんて某春香閣下の冷戦のように、「お宅の油田が欲しいから攻めます」みたいな感じで出来たら良いんですけどねえ。

十七話の補足ですので読み飛ばしてもいいです。

第十九話 - 間隙の戦火 -

地球にN.Jが打ち込まれた頃、ジオン共和国では国家総動員令を発令。

各サイドと共に連邦、中立国など地球国家の救助支援を表明、これによりジオン共和国宇宙軍の一部は地球に降下し治安の回復と物資投下の援助を行った。

また、エネルギー不足の国家に対して無償でエネルギーの供給を開始し以後、中立国と連邦、ジオン共和国は極めて友好的な関係を築くことになる。

連邦も、N.Jでエネルギー不足に喘ぐ連合を敢て「人道的支援のため」と称してエネルギー、及び救援活動をする準備があると表明。

变りに、パナマからの撤退とL1での被害の謝罪を求めた。

しかし、連合はこれを無視、逆に地球連邦が独占する核融合炉技術の開示を求める始末だ。

流石にこれには連邦外交官もあきれ果て、その間にも世界中で大勢の市民が死んでいった。

連合としても、戦後を見据え核融合炉技術は何としても手にしなければならなかった。

もしそれが出来なければ、エネルギーを握られた各国は、戦わずして連邦のに膝を屈することになる。

プラントでもまた、地球連邦並びにジオン共和国の行動に危機感を覚えた。

仮にもし、連合が地球連邦の援助を受けたら、折角NJによって核兵器を無力化しても連邦からのエネルギー供給によって何れは国力を回復し自分達に復讐戦を挑んでくるだろう。

そうなったら目も当てられない。

プラントは外交の総力を挙げ地球連邦に連合のエネルギー支援中止の圧力を掛けたが芳しくなく、もはや座して滅亡を待つか、史上最大の組織に戦いを挑むのかを強いられた。

両勢力は知らず知らずのうちに追い詰められていた、そして、最も愚かな選択をすることになる。

連合は「中立でありながらプラントと共謀して地球にN」を打ち込むのを容認したばかりか、戦後には地球全土の掌握を図った、人類の裏切り者である。よって連合は連邦に対し以下のことを要求する。一 全てのコロニーの管理権を連合に譲り渡すこと、一 連邦軍の解体、一 核融合炉技術の無償譲渡、一 現政権の即時解散、以下の事が受け入れられない場合武力を持って制裁を課す」と宣言、突如としてL2のジオン共和国に向け艦隊を出撃させ連邦を恫喝した。

プラントでも、「地球連邦は我が国の『積極的中立勧告』を受けながら、対戦国である連合を支援した。明らかにこれはプラントに対する裏切りである。ゆえにプラント政府は連邦に対してサイド1のかつ譲渡、十年間食料の無償供給、対連合戦の参加を要求する。」と大使館経由でこのことを連邦に伝えた。

事実、プラントはL5にある連邦コロニーサイド1にザフト艦隊が展開し、レビル將軍率いる第一宇宙艦隊とコロニー駐留艦隊との間で睨み合いが続いていた。

連邦は両国の要求を拒否し国民に対し戦時体制に移行したことを告げた。

両国は要求を拒否されるとすぐさま行動を起こし、L2に展開していた連合艦隊はジオン共和国を目指しソロモンへ。

ザフトは疎開作業の始まっているサイド1に向けMS隊を出撃させレビル將軍率いる宇宙艦隊と激戦を繰り広げた。

- L2宙域 宇宙要塞ソロモン -

司令室のスクリーン一杯に広がる三角の光点の一つ一つが、真っ直ぐソロモン要塞を目指し進んでいく。

ジオン共和国宇宙艦隊総司令官ドズル・ザビ中將はソロモン要塞の司令室で腕を組みながら戦術モニターを睨んでいた。

連合の布陣を見る限り、NJを散布せずレーザー兵器使用可での決戦を望んでいる。恐らくソロモンを抜き、ジオン本土での決戦を見越して戦力を温存するつもりだろう。

此方にMSが無いと思っているのだろう、だがこれしきの戦力でソロモンが落せる筈がない。

「準備は抜かりないな。ラコック大佐。」

「はっ。既に予定のポイントに部隊を伏せ後は閣下の御指示があればいつでもいけます。」

「よし、連合め、要らぬ言い掛かりをつけた事を後悔させてくれる。」

ドズル中將はその傷だらけの顔で不敵に笑いながらも、その目は獲物を駆る獅子のそれであった。

連合艦隊のクルーは何処となく釈然としない様子だった。

たしかに政府の発表を鵜呑みにすれば連邦はとんでもない裏切り者だが、だからといってジオン共和国を攻めるのはやり過ぎではないかと。

彼らはてつきり、L2を掠めてプラント本国に向かうとばかり思い込んでいた。しかし、司令部からの命令はジオン本国を強襲せよと来た。

何の脈絡も宣戦布告も無しに攻撃するなど、彼らはどうしても納得いかなかった。

しかし、司令部は命令の一点張りで艦艇司令官も唯「命令を遂行するのみ」とだけでまるつきり話にならなかった。

ジオン共和国には連合を苦しめたMSは無いと情報部から報告が入ってきているので、戦い事態は楽だろう。

だから、彼らは何処かすつきりしない気持ちを押し込んで、ソロモンへと向かっていったのだ。

要塞が確認できる位置に來ると、艦隊は部隊を展開しジオン共和国軍を挑発する仕草を見せた。

しかし、ジオン軍は要塞に引きこもって出てこず、じつとこちらの出方を伺っていた。

旗艦では、精強で知られたジオン艦隊が要塞に引きこもって出てこないのを笑い、司令官自ら楽勝だと将兵に語った。

そして、連合の宣戦布告と共に艦隊はジオン共和国の領空を侵し、ジオン艦隊をその射程に納めんと距離を詰めていった。

司令官は頭の中で、これだけ挑発して尚且つ宣戦布告したのに艦隊がでてこないところを見ると恐らく要塞は空っぽで、ここにいる歓待は本体の撤退までの時間稼ぎ。目的は本土での決戦がジオンの目的だろうと思い、コペルニクス基地から旗艦に極秘裏に運び込まれた核ミサイルも使わずにすむと思っていた。

だが、早くもその思惑は覆されることとなった。

突如として要塞から無数のミサイルが発射され、艦橋に緊張が走った。

が、直ぐに迎撃命令が出されミサイルは次々と打ち落とされ目的を遂げることは無かった。

司令官はまだ要塞の機能は生きている。制圧まで時間が懸かるだろうと思った。

だが、ミサイルの目的は敵を攻撃することではなく、ある物を戦場に散布するためであった。

互いに距離を詰め先程ミサイルが迎撃された地点まで来て砲撃戦を行おうとした連合は、突如として全てのレーダー、センサーが機能しなくなり一瞬で艦隊の機能が失われてしまったのだ。

NJは散布されていないはずのこの戦場で何故？

思い当たったのは、先程の不自然なミサイル攻撃。あれは艦隊を攻

撃するためではなくここを戦場とするためではなかったのか。

が、直ぐにオペレーターの悲痛な叫び声に一瞬で思考の海から現実へと戻った。

ジオン艦隊から何か射出され、ミサイルかと思ったがあらゆるセンサー類が機能しない今ミサイルは無用な長物だ。

其れにミサイルにしてはその機影は大きすぎた、そしてオペレーターからの報告でそれが何か悟った。

「敵艦隊から射出されたものは人型兵器の模様、我が方のMA隊を次々と蹴散らしていきます。」

「MS（モビルスーツ）」たった一会戦で従来兵器を向こうに押しやり、現代戦の頂点として君臨する兵器。

現状ではプラントしか保有していなかったはずだ。その最強の兵器をジオンも持っている。

彼の思考はそこで停止した、何故なら前方の艦隊がMSに翻弄されている隙に、ドズル・ザビ率いる宇宙艦隊本体が側面から強襲。

一気に突き崩された連合艦隊は、対空砲火を抜けた一機のMSによって旗艦を撃沈され、以後組織的抵抗が出来ないまま壊滅することになる。

この戦いによって連合は核ミサイルと二個艦隊が壊滅し、残存艦艇全てがジオン軍に拿捕され一隻も帰ってはこなかった。対してジオン共和国は撃沈艦は無く、MS数機の損害だけで済んでいた。

初めて実戦で使用されたミノフスキー粒子の有効性と、ジオン共和国のMSの威力を世に知らしめる結果になり、宇宙世紀に二系統のMSが存在することになった。

- L5 サイド1宙域 -

人類史上初めてのコロニーがここに作られ、以後各ラグランジュ・ポイントに次々とコロニーが建設されることになる。

また地球連邦以外にもコーディネイターが住むコロニー、プラントが建設されこの宙域は正に人類の英知が集結点でもあった。

しかし、世界で最初に作られたコロニーがいま崩壊の危機に瀕していた。

プラントは連邦が要求を拒否するや、本土から艦隊を差し向けサイドーに武力侵攻を行った。

これを阻止するため、名将として知られるレビル中将は旗艦アナンケと共に將軍自ら前線指揮を取る異例の事態になった。

レビル中将は今までの戦訓からMSに対して真っ向から向かうのは不利と見て、駐留艦隊と共に連合艦隊を組み、敵MSを駐留艦隊が押さえている間に第一艦隊を戦場後方から突入させ戦場にL字陣形を組、敵MSを十字砲火の中に誘い込む作戦に出た。

ザフトは宇宙と地上で連勝を重ね慢心し、無策にもMSでの突撃を繰り返すだけだった。

レビル將軍は各所にレーザー通信衛星や中継器を置きこれに対応し、レビル將軍の指揮の下強固に抵抗。また連合艦艇と違い連邦軍の艦艇は驚くべき威力と射程を持つメガ粒子砲を装備し、直撃すればMSは一瞬で蒸発し、ローラシア級を一撃で大破させる程の威力を發揮した。

ザフトは今までと違った敵に戸惑い攻めあぐね、思うように敵を攻撃できずにいた。

そして、前線にMSが拘束されたのを見計らい戦線に突入しザフトMSを見事十字砲火の中に置くことに成功したのだ。

ザフト司令部はこの戦法に苦しめられ戦力を消耗、レビル將軍は好機と見て駐留艦隊に前進を命じ一気に敵MSの撃滅を図った。

が、この危機に瀕しザフトは切札を投入。ラ・ウル・クルーゼらエースパイロット部隊を突入してきた第一艦隊にぶつけ、新型艦ナス力級高速戦艦を戦場を迂回させ連邦軍駐留艦隊の側面を突かせた。

従来艦以上の高速を誇るナス力級の動きに対応できず駐留艦隊は瞬く間に崩壊していった。

レビル將軍は敗北を悟り撤退を命じ自身は旗艦アナンケに残り艦隊の撤退完了まで殿を勤めた。

ザフト軍は殿艦に殺到し旗艦アナンケは多数被弾、それでもその砲火をはき続け味方の撤退完了まで戦場に残り続けその勇士はザフト兵に連邦軍侮りがたし、と呼ばれることと成る。

結局この戦いで連邦艦隊は敗北しレビル將軍は旗艦アナンケを自沈させザフトの捕虜となった。

しかし、ザフトもまたMSの多くを損失し機動戦力大幅に低下させ、サイド1の制圧は一時延期と成らざる終えなかった。

この戦いにより、連邦は多くの将兵と艦艇を失うもMSの威力を改めて認識し連邦の威信をかけたMS開発に取り組むことになった。

この同時期に起こった戦いは長い間戦乱とは無縁であった連邦を呼び覚ますも、その真の力の解放はまだまだ時間を有することとなる。

宇宙世紀 宇宙はこれまでに無いほどの混乱の時代を迎えようとしていた。宇宙に出ても人は争いはやめず、血みどろの闘争を続けるのは人の業か？

嘗てジオンは人の革新NTを語り、ジョージ・グレンは人の架け橋としてコーディネイターの存在を世に知らしめた。

ニュータイプは人の革新は得られるのだろうか？コーディネイターは人類の架け橋となりえるのだろうか？

そして戦いの先に何が待っているのか。

宇宙世紀の戦乱はまだ始まったばかりであった。

第十九話 - 間隙の戦火 - (後書き)

次回、連邦は最後の交渉にでます。これが成立するかどうかで連合とプラントの運命は決まります。

地球連邦は全ての戦争当事者に語りかける、「このままで良いのか。宇宙に出た人類が再び旧世紀の過ちを犯して良いのか？」人類と地球圏の未来をかけた交渉が始まる。

次回 - 南極条約 -

第二十話・最後の交渉・（前書き）

こんな時に投稿なんて・・・。一応生きているとのご報告代わりに
上げさせてもらいます。

原発や地震の被害でニュースやラジオ、ネットを伝わってくる情報
でかなり精神的に参っています。

が、気を取り直して無事なことを伝える代わりに上げます。

第二十話・最後の交渉

L2、L5方面で戦闘が収集し始めていた頃、地球連邦はこの事態に混乱していた。

まさか両者からほぼ同時に攻撃されるとは思わず、NJの影響で情報の精度は欠け情報が錯綜していた。

中にはジオン共和国が核兵器を使ったとか、サイド1が崩壊したとか、廃棄されたサイド5にフレアモーターが付けられて地球に落下コースを取っているとか、実しやかに囁かれていた。

そんな中、官僚の一人が足早に大統領執務室に入っていた。

「失礼します。大統領ご報告が。」

部屋の中には既に各議員や閣僚、など背広組みと制服組のトップがいた。

「ああ、頼む。」

大統領は気だるそうにいいながらも、その目は何かを居抜かんとら

ンランと輝いていた。

「では、現在分かっているだけで各コロニーに問い合わせた所、サイド2、4、6、7の無事を確認、月面各都市も至って平穏です。ただ．．．。」

「そこから先は軍の方で説明させていただきます。」

統合参謀本部議長が肥満気味の体を揺らしながらゆっくりとした口調で報告した。

「現在軍の方で情報を収集した結果、残念ながらサイド1に展開していた第一艦隊及びコロニー駐留艦隊は壊滅。しかしながらプラント側もかなりの損害を受けた模様で今現在確認した所コロニーの方までザフトが侵入したとの情報は入って来ていません。．．．ただ．．．未確認ですが第一艦隊司令レビル中将がプラント側の捕虜となつたとの情報も入ってきています。」

「此方も未確認ですがL2方面で戦闘光をパトロール艦が観測、位置を測定したところジオン共和国ソロン近海となっております。ただ途中から観測状況が悪化し詳しい戦況は分かかっていませんが、先日の連合軍の対応を見る限り何かしらの武力衝突が合ったと思われる。」

そこまで言うとは参謀本部議長はばつが悪そうにしてさして乱れていないネクタイを直しながら、

「軍としては今回の失態の責任を取り「報告は。」!?」

「報告はそれだけかと聞いている。」

大統領が厳しい目付きで参謀を問いたたず。

「いえ。以上で報告を終わらせていただきます・・・。」

参謀本部議長はそれ以降口をグツと締めて押し黙った。

「國務長官から報告させていただきます。先程軍からも報告がありました。が連合及びプラントは残念ながらL2、L5宙域の領域を侵犯しL5においてはプラントと連邦宇宙軍が交戦、残念ながら艦隊は壊滅し戦術的には敗北ですがコロニーが制圧されていない以上軍はその本分を守ったともいえます。無論いぜん予断は許しませんが、プラント側はこれ以上の我が方への進行はないものと思われれます。」

「また、我が国の重要な同盟国であるジオン共和国ですが、大使館筋からソロモン宙域で連合の有力な艦隊が領域を侵犯、正当防衛ゆえ交戦するもこれを撃破、壊滅したとの報告が上がっています。」

国務長官がそこまで報告すると周りの官僚がざわつき、各方面から情報の収集を指示しているものさえいた。

「また今回の戦闘によりジオン共和国はMSを使用したとの報告も上がっています。」

MS、そもそもは小惑星帯や重力下での工作機械としてジオン共和国では開発されたが、プラントでは軍事用の開発が進みMSジンとして連合軍を圧倒し国力に劣るプラントが地球まで攻める原動力にもなった。

従来の常識を覆し、既存の兵器を向こうに追いやり兵器の頂点として君臨する最強の兵器。

世界を震撼させたその兵器をジオンも開発して規模は分からないが連合の艦隊を壊滅した所を見ると相当数の機体が配備されていると思われるが、この場にはそんな事を気にするものはいなかった。いや、正確にはジオンのMS開発は連邦の知るところでありまた連邦自身もある程度だがMSの開発を極秘裏に行っており、実際何機か実用化され重要拠点に優先的に部隊に配備されている。

その為彼らが今一番聞きたいのはジオンのMSがどの程度の性能なのか、それこそ今後の方針を決める上での重要なことだった。

「それと各国の反応ですがオーブは以前中立を保ったままで赤道連合は今回の件に対し両国に遺憾の意を示していますがこれまでどおり中立を進めるようです。ただアフリカ共同体ですが此方はマストライバーに展開するザフトを支援する動きを見せまた国境線に軍を集結中との報告もあります。」

「ただスカンジナビア王国からは国王自ら大使館経由ですが此方に今回の事態で出た犠牲者に対し哀悼の意と、昨今の世界情勢を鑑みこのまま戦火が拡大するのは容認できないとし、早急な世界の安定と和平を実現するために交渉の場を用意する準備があると言っています。」

國務大臣が統合参謀本部議長と対照的に顔色一つ変えずに淡々と事実を報告していった。

大統領はその報告に満足し、一言うなずくと、

「軍は至急全力を上げて事態の沈静化と統制を取り戻すことを第一にしる。アフリカ共同体に対しては今回の対応の説明と此方から遺憾の意を伝え早急な軍の引き上げを求めろ。それとスカンジナビアの件だがフェメリー君に一任する。スカンジナビアと連携して連合とプラントを交渉の席に着かせる。」

「大統領はこの事態でもまだ彼らが交渉するとでも？」

フエメリー・ダギンス國務大臣はまだこの時になっても和平交渉をしようとする大統領に些か苛立ちながらも聞いた。

「アピールだ。我々は被害者でありながらもN.Jの被災地の救助支援と地球圏の安定と平和を守ろうとしているのだ。この事を大々的に流せ、そうすれば彼らも交渉の席に着かざる終えん。」

「ですが大統領、それでは市民は納得しません。今回の件でも犠牲者は出て我が方の威信は傷つけられました。このまま黙っているわけにはなりません。」

「無論彼らには相応の代償を支払ってもらおう。だが我々が此処で報復措置を取れば、世界は未曾有をの危機に瀕する。中世期の冷戦等目ではない、嘗ての世界大戦以上の犠牲を強いるだろう。」

「そうなつてからでは遅いのだ。」

大統領は少し疲れた様子で椅子にグッタリと座り込んだ、がその姿を非難する者はいない。今の今まで彼は情報収集の指示と、各議員との調整に奔走し連邦議会の支持を取り付けて今回の指示を出しているのだ。

硬直化して久しい地球連邦という組織の中で、大統領といえども彼らの意見を無視は出来ない。その為各派閥の意見をまとめ、その上で出したのがこの答えなのだ。

並大抵ではない努力によって彼は体力的にも精神的にもかなり堪えていた。

そんな大統領を誰が責められよう。執務室に集まったものたちは皆一様に大統領に対して今一度畏敬の念を抱いたのだ。

「分かりました大統領。ですが今一つ、もし交渉が上手く行かなかったときは・・・。」

「その時は、剣を抜かざる終えん。」

その一言は報復措置という言葉以上に重い響きを持っていた。

レビル中將はプラントの捕虜となるもその出迎えにはシーゲル・クライン議長、パトリック・ザラ国防委員長等プラント評議会のトツプ二人が態々一將官を迎えるために出向くなど異例の事態にもなった。

これはレビル將軍が地球連邦初期から在籍し地球連邦問わず名將として知られ、地球連邦軍將兵に絶大な人気もあり、また政治力にも優れこれまで彼が解決してきた紛争は数多く知られている。

クライン議長は本来は交渉によってある程度地球連邦に譲歩を引き出そうとしていたが、しかしパトリック・ザラはこの機にL1を手にせんと半ば強引に連邦に対し強攻策を取り、今日の事態を起こした張本人とも言える。

その為、クラインはパトリック・ザラに対し疑念を強め早急な和平実現の為にレビル將軍を通し連邦に和平を申し込もうと企んだ。

そして、この事が後にどれ程大きく影響を及ぼすのか、誰もわかるはずがなかった。

第二十話・最後の交渉 - (後書き)

皆様、暫く投稿の方は控えた方がよろしいでしょうか。

サーバーに負担をかけないだけでも違うといえます。

皆様の意見をお聞かせ下さい。

第二十一話・南極条約・(前書き)

空気を読まずに投稿。こつ何かしていないと不安になってしょうがない。

第二十一話 - 南極条約 -

- 地球南極 -

人類に残された最後の大陸であり、その気候地理的要因により人類の生存を阻み続けるその存在は大自然の大いなる脅威そのものであり、またその偉大さを人類の前に横たえていた。

しかし、環境破壊による熱汚染により南極の氷は溶け、黒々しい大地を晒しそれにより海面が上昇、一部地域で水没も危ぶまれたが地球連邦は宇宙に人類の生活の場を移すことにより最悪の事態は回避された。

だが地球に残った国々により再び水位が上昇、一時期は地球環境の是非を巡って連邦と世界が対立しかけたが、火星でのテラフォーミング一部完成によりその技術を持って地球環境を回復、又しても最悪の事態は回避されたのだ。

その南極で再び地球の存亡をかけた会談が行われていた。

南極に作られた観測基地に建設された空港に次々と飛行機が着陸し、その中から冷たい風に煽られながらもそれ以上に各国の代表団が降りていった。

スカンジナビア王国の呼びかけによって行われたこの会談は、一時会議場を何処に設置するかで揉めたが、永久に各国が領土権を放棄した南極で行われることに落ち着いた。

会議場に儲けられた円卓上の机に各国の代表団が着席し、端から地球連合、プラント、両者の間に入るようにジオン共和国、そして地球連邦が其々耳打ちをしながらも互いに警戒し会議が始まるまで情報収集に奔走するなか彼らの間は異様な沈黙が保たれていた。

そして、主催国であるスカンジナビア王国から議長が会議場に入ると、挨拶もそこそこに会議を開催した。

地球連合がまず発言し、「今回の事態は全てプラント側にその責任があり、我が刻はその被害者である。よってプラントは不当に占拠している」宇宙域を明け渡し、ザフトを解体、プラント評議会の停止を求める。」

これに反論しプラントは「そもそも連合がプラントに対し不当な扱いをした結果、今日の事態まで発展したのだ。故にプラントは連合からの独立承認と貿易関税の撤廃、経済の平等を求める。また連合国内で不当な拘束や迫害を受けているコーディネイターを開放し彼らの人権を保障並びに名誉回復と賠償金の支払いを求める。」

両者の間で険悪なムードが高まる中、次にジオン共和国の代表団ら

が発言を求めた。

「我がジオン共和国は不当な理由で地球連合から攻撃され、ジオン国民の生命を脅かされた。更に連合はコロニーに対して核攻撃や意図的な崩壊をさせており、宇宙に住むものとして大変遺憾の意を示すものである。」

「連合ではコロニーに対して核攻撃を行った事実はなく、またコロニーを意図的に崩壊させた事もない。全てプラント側や其れに同調した者達の出した単なる言いがかりにしか過ぎない。」

連合代表は顔を真っ赤にしながらジオン共和国に対し反論を述べるも、既に各国で事実確認が取れた現在果たしてどれだけの効果があるのか。

其れに、僅かながらも核攻撃やコロニー崩壊の辺りで握り締めた手が震えるのを、見逃さないものがいた。

「今の連合の発言に対して訂正を求める。ここにいる皆様は全員ご存知かと思うがプラントは連合によりユニウスプランに核攻撃を受け二十万人を超える死者を出している。また連合は世界樹攻防戦においてコロニーを意図的に崩壊させ「意義あり!!!」」

「プラント側のほうこそ言いがかりであり、連合そのようなことを

「静粛に、静粛に。」!?」

スカンジナビアから選出され今回の交渉の全権を任された議長は、声を若干荒げながらも連合に対し自制を求めた。

「各国の事実確認は一先ず置きまして、会議を進めさせていただきたいと思います。」

そして、地球連邦代表が手を上げて立ち上がると会議場にいる全員が目が自然とそこに集中された。

「議長、発言を求めます。」

「発言を許可します。」

「では、地球連邦は今回の紛争にさいし中立を保ち、悪戯に地球圏を混乱させぬよう努力してきました。」

「更に事前通告なしに地球に撃ち込まれたNJによって深刻な被害を受けた国や地域を別なく救助活動や支援を行ってきました。また各コロニーと共同で太陽光によって得られたエネルギーを地球に供給しエネルギー回復に努め各国から大きな評価を頂いています。」

「ですが残念なことに一部の国や組織には我が国の誠意が誤った認識を持たれ、今日の事態になったと思います。」

「よってこれ以上戦火が広まる前に以上のことを提案したい。1. 今回の被害に対し関係国は賠償金を支払わないこと 1. 領土の割譲はしない 1. 捕虜の直ぐ様の解放 1. 占領地からの早急な撤退 1. N.J.によって起きた被害に対し各国は総力を挙げて救援活動をすること 1. 連合はプラントに対し高度な自治権を与え又内政に干渉しないものとす」

「以上のことを各国に提案する。」

地球連邦の代表官が言い終わらないうちに会議場は怒号で覆われ、議長が一時中断をしても会議場の外で本国と連絡をとるものの姿が絶えなかった。

マ・クベはジオン本国から特にキシリア・ザビの意を受けてこの会議場にいる。

彼は内心連合やプラントの態度に癖癖しながらも噂どおりの連邦の

情弱な態度に人知れずほそく笑んでいた。

彼は別に交渉を成功させるためにこの場に居るのではない。ジオン本国で連合に対する報復準備が整うまでの云わば時間稼ぎと出来るだけの交渉を長引かせる為にいる。

無論この事を知っているのは彼を含め極少数で、先程のジオン共和国の代表は何も知らない。

彼はこのままの様子だと自分がいなくても交渉は長引くだろうとみて、もう一つの任務にかかることとした。

彼が地球に降りたのは何も生来の地球通と地球文化への傾倒だけでなく、キシリア・ザビの懐刀として暗躍し、事実今回も交渉以外にも地球の反連合勢力や現地の協力者との連絡も取っていた。

それ以外にもこの機会に地球各国の内情を探り、ジオンのシンパを作り何れは地球圏の主導権を握ろうと策動をしていた。

が、それもこの調子なら上手く行きそうだ。だが彼にとっては連合もプラントも文化を理解せぬ粗暴な国家でありまたザビ家の権力争いも彼には興味がなかった。

ただ地球に下りて自家に地球の文化と触れ合えるからこそ、彼はここにいるのだ。

が、皮肉なことに歴史は誰しも思いもよらない事態へと発展することとなる。

交渉は行き詰まり誰しも疲労を抱えていたその時、突然会議場の画面が切り替えられそこに一人の男が映し出された。

そう、プラントの捕虜となったレビル將軍である。

レビル言う、「地球連邦国民に私は訴えたい、プラントも連合もすでに兵は無い、私は嘗て大西洋連合そしてプラントで駐在武官としてその内情を具に見てきた。今一度捕虜の身としてプラントのを見てきた、彼らに最早これ以上戦う力は無い。にも拘らず彼らは自分達を新たな種、進化した種だと驕りその結果が此度のN Jによるエイプリルクライシスである。彼らはユニウスセブンの報復だと謳いそれを免罪符に地球に対して無差別にN Jを散布し無関係の人々をしに至らしめ今だ多くの人々が苦しんでいる。この暴挙の何処に進化したという人類という証拠があるのか。騙されてはいけない彼らは旧世紀の民族主義者と同じ過ちを繰り返そうとしているのだ。」

「もう一方の連合は旧来の因習に取り付かれ自らが行った遺伝子改良を非合法とし新たに生まれた命を不当に弾圧しプラントというコロニーに押し込め搾取している。更に自らが非道に抵抗するや否や無辜の市民に向け核を打ち込みという暴挙に出ている。にも拘らず連合は自分たちが犯した過ちが今日の事態を引き起こしたのだと思わず、無責任な正義を謳い無辜の傷ついた市民さえ戦争に駆り出そうとしている。がその真の目的はプラント理事国が自分達の利益を失いたくないために様々な有形無形の圧力を加え今日の事態を引き起こす一因にもなり、また戦争を継続することにより彼らは旧来の植民地を維持せんがために無駄な犠牲を強いようとしている。」

「このような驕り高ぶった非道を行ったにも拘らず、地球連邦の情弱な政府高官は今だ交渉を持って自体が解決すると見ている。笑止そのような情弱な発想が今日の事態を引き起こしてしまったのだと気付かない、いや気づかない振りをしている。諸君真に打つべきは連邦の情弱な政府である。」

「地球圏の平和と正義を標榜する連邦が今の今まで唯指をくわえていたのは何と情けないことだろう。だがその政府を選んだのは一人ひとりの連邦国民であることを忘れてはいけない、国民の無関心さが無責任さが今の情弱な連邦を作り出しそして今になって犠牲が出たことによりやっと気付き始めた。」

「今連邦国民は真の民主主義とは自由とは何なのか。また宇宙に出た人類が今後如何するのか。一人ひとりが今一度考えなければならぬ。立てよ国民！その為には今ここで膝を屈するわけにはいかないのだ。今こそ全ての力を連邦に結集し我々の新たな未来を切り開

くために目の前の脅威に屈することは許されないのだ!」

後に「プラントに兵なし」と呼ばれるこの演説は、連邦国民一人一人に現状を再認識させ硬直化した連邦を蘇らせる原動力となった事は間違いない。

結局会議は纏まらず和平は実現しなかったがそもそも実現する確率が低かったため連邦以外特に落胆した様子は表向き無かった。(大統領とクライン議長以外)

会議で決められたことは・NBC兵器及び大量破壊兵器、大質量兵器、の使用の全面禁止。

- ・中立の尊守及びサイド6の中立承認
- ・捕虜の取り扱いに関する項目 e t c

これ等の事が決められるだけに終わり交渉は失敗。しかし休戦期間は設けられ条約締結後二週間となった。

この期間の間に互いの陣営は戦争準備を整え地球圏を舞台に壮絶な戦いが行われようとしていた。

第二十一話・南極条約・（後書き）

切りのいいところで投稿を一時中断したいと思います。それでは。

第二十二話・グラナダ・（前書き）

史実に近づけようとするとき、あれ、これってプリント詰んでなくね。な、状態です。

第二十二話・グラナダ・

月面都市グラナダ。

月でも一二を争うほどの豊富な資源採掘量を誇り、人口及び工業生産能力も月面随一の重要な都市である。

月の裏側に建設されたこの都市はそもそもフォン・ブラウンのマスドライバーでは射出できないL2のコロニー建造のために作られた基地の跡に建設された都市である。

その為、独立以前からジオンとの関係は深く、この都市にジオンの国策会社であるジオニック社と通称キシリア機関と呼ばれるキシリア・ザビ著駆除区の諜報機関の支社がある事からその関係が伺える。

さらにグラナダとサイド3ジオン共和国とはその誕生の折から共に歩んできた歴史を持つもの同士、ルナリアン、スペースノイドの垣根を越えた絆で結ばれていた。

その為、住民の多くは親ジオン派であり各コロニーと較べてもその比率は多かった。

キシリア機関もそこを利用し各コロニー以上に工作を行っていた。

連合、プラント両国は休戦期間中を利用し何とか自国の勢力強化に努め、中立国や各月面都市、果てはコロニーにいたるまで様々な工作を行ったが、

片やコロニーに各を撃ち込む暴挙を犯し、片や自らこそ至高の種だといってはばからずナチュラルを旧人種と見下しN.J.を落した張本人。

子供でも信頼する事が出来ない両陣営、はっきり言って関わりを持ちたくないというのが本心であった。

が、彼らはそれを表面上はおくびにも出さず、慮者の中で揺れ動く振り子の役を演じていた。

- L2 サイド3 ジオン共和国 ズムシティ -

ジオン共和国議会議長兼国防大臣であるギレン・ザビは一人執務室で書類に目を通していた。

忙しく動くその目は、旗から見れば流し読みではと疑いたくなるが、しかし彼は驚くべき速さで文章を読み尚且つそれを全て理解した上で、判断を下しているのだ。

コーディネイターでさえ不可能なこの作業を、なんら遺伝操作を受けていないにも拘らず行える彼は正に天才であった。

事実非公式にだが彼のIQは240以上とも言われ、並みのコーディネイターでは歯が立たないほどの知能を有し、そのカリスマ性もあつてか三十五歳の若さで共和国議会議長と国防大臣を一手に引き受けるその手腕は、確かなものがあつた。

そして彼は今日も書類を読み終えるとそこにサインをし、決済箱の中に収めた。

コンコン、

ふと部屋の扉をノックする音が響きギレンは一言、

「入れ。」

部屋の扉を空けて「失礼します。」と頭を下げて入ってきたのは彼

の秘書であった。

名をセシリア・アイリーン、

モスグリーンのスーツを女性特有の曲線が分かるようにピッチリと着込み、ブラウンの艶やかな長い髪を業務の邪魔にならないよう頭の上で団子を作って纏めていた。

そしてその理知的な瞳は、目鼻立ちが整った顔も合い余って、彼女の美しさを引き立たせていた。

無論ギレンは唯美人というだけで彼女を抜擢したのではない。確かに職場に美人がいることは士気も上がり作業効率がよくなるが彼女はそれだけではない。

決して裕福とはいえない家柄に生まれながら、彼女はその美貌と才覚を巧みに使いのし上がり、その傑出した才能を見抜いたギレンによって彼の第一秘書としての地位を確立したのだ。

また、彼女はそれだけで満足せず、その才覚と美貌を磨き上げ彼の公私にわたってのパートナーとして秘書以外にも裏の仕事さえこなすその様は正に女傑といって差し支えなかった。

「新しい報告書をお持ちしました。」

セシリアはそれをギレンに差出、それを無言で受け取ったギレンは早速その報告書に目を通し始めた。

常人では追いつけないほどのスピードで読み進めていたギレンがある一文に目が釘付けになった。

彼は報告書を机の上に置き、何時もの癖で両肘を机に当て組んだ手の甲の上で何事か思案していた。

「何か良い事でもあったのですか？」

普段の彼女ならギレンがこのような仕草を取った時は彼の思考の邪魔をしないように静かに退出するはずだったが今日は違った。

ふと、ギレンが顔を上げると、

「その……閣下のそのような嬉しそうな御顔を拝見したことはなくて……。」

そこでようやく気付いたギレンは自分の頬に手を立てた。確かに顔

の筋肉が緩み我っているのを通して分かった。

もしここに鏡が合ったとしてもそこには普段の彼と代わりのない顔があっただろうが、しかし彼と深い付き合いであるセシリアにはギレンの微妙な表情の変化が手に取るように分かった。

ギレン自身でさせ触れなければ気付かない変化にセシリアが気付いたことにギレンは若干不機嫌になりながらもそれを表には出さず報告書にサインをしてそれを決済済みの書類が入った箱の中に放り投げた。

セシリアはギレンの普段は見せないような幼稚な態度を微笑ましく思いつつも、其れに気付いて更に不機嫌になっているだろうギレンの感情に気付き早々に話題を変えることにした。

「閣下、それと例の件の事ですが・・・。」

セシリアがそう聞くと雰囲気を感じたギレンは何時もの通り冷徹な顔に戻り指示を出した。

「うむ、その事だがキシリアに一任してある。」

「宜しいので？それですとキシリア様が独自の軍をもち、追々困っ

たことになるのでは。」

キシリア・ザビはギレンの妹でありザビ家の長女だがその中は傍目にも見て仲が良いとは言えなかった。むしろ両者が政敵として互いが互いを蹴落とそうと裏で暗躍しているのだ。

嘗て中世期以上前島国にの諺に「三本の矢」とあるがお世辞にも彼ら強大には当てはまらないものだった。

無論彼らの父デギン・ソド・ザビはこの状況を憂いており、後々ジオンに禍根を残すのではと一線を退いたわが身をわずらわしく思う日々を過ごしていた。

そのギレンがキシリアがジオン協和国軍以外に兵を持つことは、決して容認できるものではないがしかし敢てその危険な橋をギレンは渡ろうとしていた。

「無論その事も考えの内だ。だがジオンに益があるうちはキシリアの好きにさせる。」

「つまり今の所は敢て泳がすと。そしてもし万が一があったとしても閣下は既に手を打っていると・・・。」

ギレンはそこでフツと笑い、目でそれ以上のことを伝えつつ

「そうかもしれないな。」と一言呟き、

ギレンはそこで言葉を切ると椅子から立ち上がってセシリアに背を向け、執務室の机の後ろに飾ってある建国の父ジオン・ズム・ダイクンの肖像画を見上げた。

セシリアはその背に無言の退出を促す気配を感じ取り、決済済みの書類を纏めると一礼して部屋を出て行った。

・・・建国の父ダイクンは嘗て人類は宇宙に出ることによって広がった生活空間に適応するために自らを進化させるといった。果たして今の我々がそのニュータイプであるのか、亡きダイクンは今をどの様に思っただろう。

ギレンは肖像画の瞳を覗き込むようにしてみたが、ダイクンは何も語らずただ微笑みかけるばかりであった。

休戦期間が切れる前から情勢は決まっていた。

連合、プラント双方なら成果はなく、アイリーン・カナーバラの説得の甲斐なく地球の中立国は今までどおり現状維持、月面各都市は中立、サイド6も早々に中立を決め込むも内情は連邦とジオンを秤にかけていた。

サイド2はジオンより、サイド4、建設中のサイド7は連邦の勢力圏内であり戦前から連邦支援を宣言していた。

地球の中立国は大国と超大国の戦いに巻き込まれないために自己保身に走り、月及びコロニー住民は横暴な連合と鼻持ちならないプラントを嫌い両者との同盟を拒み、そも各コロニーに至っては門前払いどころか交渉の席にさえ付けなかったのだ。

この結果はある意味当然といえ、はっきり言って連合、プラントは自分達以外孤立無援の状態だった。

そして、休戦期間が過ぎると更に月面都市グラナダがジオン共和国傘下に入り以後グラナダはジオン共和国軍の支配下に置かれた。

また電撃的に侵攻したジオン共和国軍により月の裏側にある地球連合軍の月面各基地は攻略されこれにより月の裏側はジオン共和国が実効支配することとなる。

これにより連合軍は益々苦しい立場におかれ大規模な艦隊出撃は月面の地球側にのみ限られ以後戦争中期後半まで軍としての行動が出来なくなる。

プラントでも月面から採取されるレアメタルを求め軍の編成中であったが、すべて無駄になり地球上での資源確保に躍起になることとなる。

そして、休戦期間が切れると同時にアフリカ大陸中部、中央アジア、ベーリング海を巡り両軍が激突することとなる。

第二十二話・グラナダ・（後書き）

ここでアンケートです

連合のリニアタンク

連邦の61式戦車

ジオンのマゼラアタック

ザフトのザウート

次のうちあなたが考える最強の兵器は何ですか。感想の方に強さの順とその理由もお書き下さい。戦力比のバランスをとる為に以後の参考にさせていただきたいと思えます。

それと、非力なプラントを救うために皆様からオリジナル兵器のアイデアを募集しています。勿論その他の勢力の兵器案でもいいです。こちらの方も感想にお寄せ下さい。

皆様からのアイデアを待っています。

第二十三話・再開・（前書き）

たくさんのアンケートの回答ありがとうございました。今後の指針として使わせてもらいます。それとオリジナル兵器のアイデア募集は特に期限を設けずに行って生きたいと思いますので、感想の方にこれからもお寄せ下さい。

因みにこの世界での戦車の強さは・・・

リニアガン・タンク 61式>>マゼランアタック（ザウートは厳密戦車とは違うというご指摘があったので除外。）

あと連邦は新型戦車はないのか？という意見がありましたので最後の方に没にした設定を乗っけておきます。

第二十三話・再開

コズミックイラ70 五月六日

ビクトリアにあるマスドライバー基地「バビリス」を占領したザフトはまず同盟国であるアフリカ共同体から連合の勢力を排除するために北進し、スエズ運河の攻略を目指した。

そもそもスエズ運河はその帰属件をめぐり旧世紀から争いが絶えず、ここを巡り幾度となく戦争が行われた。

今日においては正式な所有者はアフリカ共同体だが、連合がもつ大量の国債と武力に屈し借金を全額返済し終えるまでスエズ運河一帯及び北アフリカ沿岸部の全域を連合が租借することを認めさせられていた。

この事からもわかるようにアフリカ共同体と連合の仲がいいはずもなく、国内では毎年の如く反連合のデモ行進が行われていた。逆にプラントは北アフリカから連合の勢力を完全に追い出す事が出来ればアフリカ共同体との同盟は強固になり、また重要拠点であるスエズ及びジブラルタルへの橋頭堡を確保する事が出来るのだ。

だからこそ連合はここを守りきる事が出来ればザフトをアフリカの大地に釘付けでき、国土を戦火に巻き込まずにすむのだ。

故に対する連合はユーラシア連邦がその自慢の陸軍の総力を挙げて防衛陣地を構築し、スエズ運河周辺は難攻不落の要塞と喧伝された。

しかし、連合は先のNJの被害から今だ脱してはおらず特に広大な

国土の大半のエネルギーを核に頼っていたユーラシア連邦の惨状は凄まじく、路傍に死体が積み上げられ病院は電気が使えず患者が衰弱死していく。さらにインフラを破壊されたことにより各都市が分断され衛生状態が悪化、疫病が蔓延しそれが又病を呼ぶ悪循環を引き起こしていた。

各都市は治安が悪化し、中には軍を出動しての鎮圧も行われたが逆に市民感情に火をつけて市民と軍とで市街戦まで発展した。

連合もこれを何とかしようと奔走したが、しかし自国でさえ危険な状態であるのに他国を支援する余裕等なく、逆に支援を欲する状態であった。

このため、連合各国は再戦において内側に大きな爆弾を抱え込みながらの戦争継続を余儀なくされた。

連合は何とか国民感情を外に向けさせようと反コーディネイターを煽りそれが事実であるがゆえに市民の怒りの矛先はプラントへと向かい、何とか自国を維持しているのが現状であった。

だが、その裏でこの戦争を引き起こす一端となったブルーコスモスの影響力が確実に連合国内に深く根付くこととなる。

それがどのような結果を招くのか、今は誰も知らない。

停戦期間が終わると同時にプラントは前もって集結していた部隊をアフリカ共同体の軍と共に一路スエズ攻略を目指した。

ザフトは広大な砂漠地帯での先頭を有利に進めるためタンク形態への変形が出来るザウートを主力とした部隊を派遣しMSの力を過信するザフト攻略司令部はアフリカ共同体が提言する狭撃策を真正面からのスエズ攻略に乗り出した。

愚直に進軍していくザフト攻略部隊と共同体軍は早く攻略作戦が頓挫することとなる。

唯真つ直ぐに突き進むザフトMS部隊を連合は戦前から構築していた野戦陣地を短い時間の中で更に強化し、ヘリ部隊と連携した戦術によって航空支援のないザフト・アフリカ連合軍を立体的十字砲火陣地にまんまとはまり込み次々とMSや車両が火を噴いていった。

MSは宇宙空間では確かに無敵だが、地上では重力によって自慢の機動力が鈍りその大きさが仇となり連合軍戦車部隊からは格好の的だった。が、MSの装甲は長距離では如何にリニアガンとはいえ撃破することは適わず、至近距離か装甲の薄い背後からしか撃破することは出来なかった。

唯一の航空兵力を持つアフリカ共同体も質量共に連合に劣り、事前の制空権争いでこの作戦に投入した航空兵力の三分の一を失う僅かな時間で失う結果となりザフトMS隊は航空支援がない状態での攻略作戦を余儀なくされた。

決してザフトが航空兵力を持っていないわけではないのだが、空戦用MSデインは航続距離の関係と新型の水中用MS部隊と共にジブラルタルを攻略中で全機で払っていた。

ザフトも状況を打開しようとザウート自慢の火力を敵防衛陣地に叩き込もうとするも、巧妙に隠蔽された陣地の割り出しは難しく、ま

た余りにもザウト部隊が前に出すぎていたためにこれを脅威と思つた連合によつて火力を集中され次々に各坐しそこをへり部隊からのミサイル攻撃で撃破されていった。

結局ザフト・アフリカ連合軍は連合の強固な防衛陣地の前にさして前進する事が出来ず戦線は膠着。消耗戦の憂いにあつた。

この事実を受けザフト司令部は作戦の変更を求められ、アフリカ共同体軍はそれ見たことかとあきれ返り、したり顔で自らが主張した挟撃作戦へと作戦を移行することになった。

ザフトが同時拠点攻略による二正面作戦という愚行を犯すなか、連邦と連合も地上で衝突を繰り返していた。

しかし、ザフトが初戦から大きく仕掛けたのに対し連合軍と連邦軍の戦争は小規模な小競り合いに終始した。

その気になれば百個師団単位でのぶつかり合いを地球各地で起こせなくもないが、しかし互いに消耗を嫌いまたそれによつて漁夫の利を狙うプラントを経過し二次大戦初期さながらファニーウオーの焼き回しであつた。

ジャブローの目と鼻の先であるパナマを巡る戦いも、連合はジャブローを占領できるほどの戦力がなくまた連邦も悪戯に戦火を広げまいと消極的な態度を取っていた。

宇宙空間でも似たり寄つたりで、互いに散発的な戦闘こそ起こるも

の積極的な行動には出ることはなく互いに拠点に引きこもって戦力の回復に努めていた。

それでも互いにプラントに対する嫌がらせとして航路に機雷を敷設したり海賊を装った襲撃をしたりそのなかでも連邦は大胆にも各宙域に展開する任部部隊をプラント航路周辺に送り込みプラント商船団と激闘を繰り広げていた。

この戦争で一番激しく戦争を行っていたのはプラントとジオン共和国であった。グラナダが出来た事によりL2宙域からL5近海へとソロモン要塞を移したジオンを最大の脅威と見たプラントは幾度となく要塞攻略に乗り出すもそのつどドズル・ザビ率いる宇宙艦隊に阻まれていた。

ジオン共和国艦隊は連邦と同盟を組むことにより背後の安全を保ち要塞防衛に対して全力を注ぐ事が出来た。

逆にプラントは宇宙、地上と戦線が広がり、宇宙だけに集中することとは出来なかった。また人口が同じコロニー国家であるジオンと較べても少ないプラントはそもその戦場に出せる人数が少なく安全な後方を持たないプラントは絶えず艦隊を本国に貼り付けておかざる終えなかった。

そもそも、プラントとジオン共和国はその成り立ちから互いに潜在的敵対関係であった。ダイクンの掲げるニュータイプ思想とプラントのコーディネイター至上主義は相容れるものではなくダイクンなど生前は「コーディネイターを紛い物の人間だ。決してニュータイプにはなれず滅び行く種でありジョージグレンの考えは間違っている人間の架け橋になるところか害悪にしかならないのだ。」といっ

て憚らなかつた。

プラントも又、ニュータイプ思想を空想の産物としダイクンを影ながら夢想家と笑い自分達こそ、その進化した種だといって譲らなかつた。

ダイクンと違って現実主義者のデギン・ソド・ザビらもプラントの技術力は信用していたがプラントそのものは信頼しておらず嘗て水面下で行われていた技術交流も状況の変化であつさりと取りやめたりと両国の関係を象徴していた。

ダイクン亡き後もそれは変ることは無く、逆に平和的独立を果たしたジオンはプラントと一応の交流を持つも互いに相手の腹を探り合うという状態が続いた。

両国ともその建国の根本の理念から対立していたので、近いうちに衝突は避けられないだろうと見られていた。

そして今現在通算で三回目のソロモン沖会戦が行われていた。

- ジオン共和国宇宙艦隊旗艦グワジン級戦艦グワラン -

船体を朱色に染め軍艦らしからぬ客船を思わせる優美な曲線美のフォルムを持つこの船は全長440mという地球圏最大の戦艦であり、見た目と反してその実力は侮れずマゼラン級以上の火力と地球と火星、木星間にあるアステロイドベルトまで無補給で航行可能な航続距離を持つこの戦艦は正に宇宙艦隊旗艦にふさわしい性能を有していた。

その艦橋に腕を組んで立つドズル・ザビは古の武士を思わせる風貌を持つこの男は、ザビ家一党のなかでも政治には関わらず専ら戦場で栄える事をこの上なく誇りに思っていた。

その恐ろしげな風貌とは裏腹に、部下には親しみを持たれ子煩悩な愛妻家としてジオン本国では知らぬものは無いほどの有名であった。

そんな彼の元には、ダイクン派、ザビ派の垣根を越えて彼を慕うものが多く集いその豊富な人材は彼自身の能力は勿論その武人然とした風貌を精神は多くのものをひきつけて止まなかった。

彼はその風貌から構成一辺倒の猛将とされているが、実際は指揮官としては機を見るに機敏でこれまで多くの会戦を行ってきたがそのつど彼の指揮は的確を極め自軍の被害を最小限に抑えつつも敵に大きな被害を与えている事から彼が攻勢一辺倒だけの将ではないことは明らかであった。

その彼が、旗艦の艦橋にノーマルスーツを着けずに戦況をじつと見守っていた。

戦場全体を写すモニターには自軍が赤、プラントが青という形で表示され大まかな戦場の流れを刻一刻と映し出していた。

両軍共に攻撃の要はMSであり互いに艦艇からMSを繰り出し制宙権を巡りドックファイトを繰り広げていた。

緑色に塗装され片にシールドとスパイクアーマーをつけた一つ目のMS-06ザク?と灰色の此方も一つ目だが頭には鳥の鶏冠のようなアンテナと背中を覆う羽根のような大型スラスタをもつZGMF-1017ジン。

ジオンのザクとプラントのジン。宇宙世紀に登場したこの二機種はその後のMS開発に大きな影響を与えるがここでは両機の特徴を説明しよう。

ジオンのMSザクはコロニー用の作業機械モビルワーカーを軍事利用したもので、全体的にズングリとした姿だが、信頼性と汎用性に重きを置いたその設計は新兵でも直ぐに使いこなせるし壊れ難いと現場から高い評価を得ていた。

対するプラントのMSジンはその設計は嘗てジョージグレンが外宇宙探索船で船外活動を行うために作られた作業用スーツを基に作られ、汎用性という点ではジオンのザクと同じだが、背中にある大きなスラスタが示すように此方はより機動力に重きを置いた設計となっていた。

ジオンのザクが誰でも使えるように設計されているが、基本プラントはコーデイネイターの国である。よってコーデイネイターの能力を生かすために機体はよりシャープにコーデイネイターの反応を活かせるよう機動性を追求したがために、使いこなすまでに時間が懸かり新兵では扱い辛いという欠点があった。

だが、連合との戦争でその性能の高さは折り紙つきで機体になれてさえいれば、連合のMAを翻弄し一気に敵艦隊に接近できる潜在能力を持っていた。

つまり誰でも使えるザクか、コーデイネイターにしか使う事が出来ないが機動力はMAを凌駕するジンということになる。

現在戦場ではMSが入り乱れ互いに有利なポジションを取ろうとス

ラスターのスジを宇宙空間に描き、死闘を行っていた。

ザフトはその組織が民兵を基本にしているため連携よりもこの実力を重視する傾向が強く、MS戦でも各々相手を決めての接近戦を挑もうとした。

対するジオンはMSの運用を部隊間で行い個人の勇よりも個々の連携を重視し互いに支援しあいながらも相手を照準に収めようと小刻みな機動を繰り返していた。

ザフトは接近戦を挑もうとし、ジオンは接近させまいと互いに支援し隙をなくして距離を置いての砲撃戦を行おうとし、このため戦場は拮抗し両者決定打を欠いたまま時間だけが過ぎていった。

ドズルは動きを見せない様子を見て、ザフトMSが実戦に慣れてきたことを感じていた。

当初要塞を攻略しようとしたザフトMS隊は個々が突出しすぎたためジオンMSの連携の前に包囲分断され全滅の憂いにあっていた。

その後、度々ちよっかいをかけてくるザフトと小競り合いを繰り返しながらも再びザフトが前回以上の艦隊を組んでの力押しを挑んできたが、逆に側面から後方に回り込み要塞砲の射程に追い込みこれを撃退。

暫く鳴りを潜めていたが、再び攻めてきて今度は要塞を迂回するよな機動を取ったために、艦隊を要塞から出撃させこうして艦隊戦を挑んでいるのだが、中々勝負が決まらない。

以前のように個々の実力の高いものが突撃することは変わらない。し

かし、それにあわせるように突っ込んだ穴を広げるようにしてMS隊が群がりそこから傷口を広げるようにして蹂躪するなど、いままで見たこともない戦法を行い一時今度は此方のMSが分断包囲の危険に晒されたのだ。

僅か二回の会戦と、数回の小競り合いで対MS戦の対策を出してくる辺りドズルはコーデイネーターの能力の高さを改めて認識し、それによく対応して耐えている部下達を誇りに思った。

が、いい加減MS隊の推進剤が切れるのは時間の問題でありその前に勝負を決めたかった。

「このままでは悪戯に損害が増えるばかりだ。MS隊は敵をそのまま拘束し本艦隊は砲撃戦へと移る。各MS隊は射線上に出てこないよう注意しろ。」

副官が命令を復唱し、それがレーザー通信を通して各艦隊に伝わり各艦距離をつめ艦隊戦へと突入した。

・ザフト艦隊ナスカ級カハマルカ・

その艦橋で今回の攻略戦を任された白服の男。カール・ケンプは戦術モニターに映るジオン艦隊の動きを見て顔をしかめていた。

MSの数は向こうが若干多いが、こちらが積極的に攻勢をかけていると”見せかけて”いる為に防衛に終始している。

だが、問題は艦隊の方だ。互いに防衛用に必要最低限しかMSを残していないために自然勝負はMS同士の決着よりも相手の艦隊を如

何に削れるかという、大昔の艦隊同士の砲撃戦に戻ることになる。

その場合、MS運用ばかりに特化したザフト艦艇は非常に不味いことになる。そもそもザフトはプラントの自衛の為に市民が自主的に志願して出来たことに表向きはなっている。

その為、戦艦のノウハウ等もなくそれだったらいつその事MSに特化すれば言いという極端な発想でザフト艦隊は整備されていったのだ。

ローラシア級を始めとする各艦は元をたどれば民間の輸送船で、有事の際に武装して仮装艦として運用する事がMS登場以前から決められていた。そしてMSがザフトの主力となる際輸送船のペイロードを使い、本格的なMS運用艦として現在に至っているのだ。

同じ頃に関発されたジオンのムサイ級巡洋艦が四機（無理をすれば六機だが）積めないのに対し、ローラシア級は六機、大型商船を改装したバルティガ級護衛空母は八機とその差は大きい。

バルティガ級は武装こそCIWS4基と非常に頼りなく、元が商船であるため装甲も申し訳程度にしかないが、改装されMS空母として生まれ変わったこの船はプラントの商船団の護衛やMSの数を減らして空いたスペースに食料を積み込みんでプラントまで輸送したり逆にプラントからの補給物資を地球軌道まで届けるなど八面六臂の活躍をしていた。

また元となった船が連合、プラント各勢力問わず使用されており補充が容易なのも大きな利点で地球コロニー間を無補給で航行できる航続性能も魅力であった。

その中で彼の乗るナスカ級はザフトが今までの運用経験を生かして満を持して完成させたのがこの船である。

航続距離はバルティガ級並み、速度は連合のドレイク級宇宙護衛艦以上、MSを最大六機まで収容でき中央に設けられたリニアカタパルトによって艦前方方向に迅速なMSの展開能力を有し更に火力も充実していて長射程のビーム砲とレールガン、多数のミサイルに船体収納式のCIWSでMSの支援から自艦の防衛まで何でもこなせる万能艦であった。

しかし悲しいかな。ザフト艦全てにいえる事なのだが致命的に装甲が薄いのである。

幾ら機動力に優れようと、多くのMSを搭載できようと、足が速かろうと長かろうと、一度砲撃戦という耐久力勝負になればザフト艦隊に勝ち目はなかった。

そして、目の前のジオン艦隊は最小サイズのムサイ級軽巡洋艦でさえローラシア級を上回る火力を有し更に、この艦隊を率いる男はジオン共和国宇宙艦隊司令長官ドズル・ザビその人であり無論彼の乗艦であるグワジン級戦艦も（遠巻きに見てもわかるその巨体を）この戦場に姿を見せていた。

彼は自分達が勝てないとそれを知るが故に如何してこうなったのかと、場違いにも今までの道のりを思い出していた。

コーディネイターだからといって奢る事無く鍛えられた肉体に精悍な顔立ちをした彼はザフトの中でも割と古参に入る分類で、その設立以前からMSに乗り来るべき独立の日に向け己の技量を磨いていた。

しかし、いざ開戦してみると彼は複数の艦が集まって作られる戦隊を任せられ自分の経験を買ってくれたのだろう。白服に任命されたことはありがたいがそのおかげで彼はめっきりMSに載る回数が減ってしまった。

一応自艦の格納庫には自分用にチューンされた新鋭機シグーが置いてあるが、配備されてから数えるほどしか手を触れてはいないため新品同然であった。

何度か任務をこなし、プラントに久しぶりに帰還すると早々に国防委員会から直々に呼び出しがあり宇宙要塞ソロモンの攻略を命じられた。

そもそも彼は今回の作戦には前々から反対だったし何度も意見書を書いた。が、命令に変更はなく彼は渋々部隊の編成に当たったがその戦力が前回作戦時よりも少ないことで上層部に直談判を行い頑なにこれ以上の戦力は出せないという上層部を見限ると彼は各方面やプラントに帰港している各部隊の間を駆けずり回ってようやく前回と同様の部隊を数だけそろえる事が出来た。

その間にも与えられた作戦期限が過ぎていくのだが、彼は諦めず各部隊との統制と調整、補給の手はずを整え艦隊の訓練スケジュールを組み日夜送り届けられる山のような書類に目を通してサインをしようとしているところを訂正して書き直させたりと「72時間働けますか!」を素で行っていたりする。

艦隊がプラントを出撃する頃には、彼の精悍な顔は疲労と不眠で痩せこけ目の下には隈が浮かびまわりに心配されながらも艦隊の指揮官として彼は作戦開始日まで出来る限りの事をやった。

この戦力を掻き集めるために可也の無茶をやり、その強引な方法に各部隊長や艦長が不満を抱いていた。

中には、出撃するまで自分達の作戦内容さえ知らないものもいたのだ。

そういったものたちを納得させるためにも彼は無理を押し通して、自らの責任を果たし作戦の成功率を少しでもいいから上げるために奔走した。

が、終に疲労の限界に達し彼は各艦の無理解な部隊長たちと対MS戦の新戦術のミーティングを行っている最中に倒れ、そのまま医務室まで運ばれて以後二日間意識不明の重態だった。

彼は目を覚ますと軍医の言葉も聞かずに直ぐに遅れた業務を取り戻す作業に入った。その超人的な姿に作戦に参加したザフト兵全員が感動し心を一つにして以後彼の指示は今まで以上にスムーズに通っていた。

だが、だからこそ彼の心は晴れなかった。皆の心が一つになり訓練にも熱心に取り組んでくれて彼の仕事も前ほど忙しくなくなると、一人でいる時など彼は皆に対して申し訳ない気持ちで一杯になった。

今現在ザフトは宇宙に多くの敵を抱えている、更に地球にまで侵攻したことによりかなり無茶をしている。

その為、薄くなった哨戒ラインを掻い潜って連邦、連合の通商破壊部隊が船団を遅いプラントの食糧事情を圧迫していた。

そんな中、地球で作戦を開始している中宇宙でも大規模な攻略戦を行うなど無謀でしかなかった。

何でも、プラント上層部は連邦は腰抜けだからジオンさえ何とかすれば直ぐにでも停戦するだろうと踏んでいるらしい。

確かに、あんな状況になってもまだ和平を行おうな度という平和ボケした態度には彼も若干拍子抜けであったが、だからといって連邦が軟弱かというところでもない。

あのレビルとか言う将軍が言うようにオレ達にはこれ以上無茶をやる余裕もないし、連合だって本当はNJの影響でボロボロのところを無理しているんだ。その中で連邦だけが何事もなかったかのように平然と戦い続けている姿を見ると、ザフトとの地力の差を見せ付けられたような気分になった。

連邦はまだまだ余裕があるんだ。万が一ジオンをプラントが下したとしても連邦まで屈するとは限らない。いや、最悪そのまま戦争が継続されて結局プラントが根負けするに決まってる。

それに精強で知られるジオンがそう簡単に負けるはずが無い。戦前から連邦との合同演習や観艦式などでその実力は知られているが、実際彼らはプラントと同じ様にMSを開発し更にプラントでさえ知らない秘密兵器を使って連合艦隊を殲滅しているのだ。

決してナチュラルの国だからといって楽に勝てる相手ではないして、侮ってもいけないのだ。

だから今プラントがやらなくちゃいけないことは、早々にオペレーションウロボロスを完成させ、その成果を持って連合を交渉の席に

つけさせるとこだ。

断じてこれ以上の戦線を拡大せずに、力を温存して地球での作戦に掛けるしかないほど俺達は追い詰められていると上層部は理解していないらしい。

それなのにこんな無謀な作戦につき込まれて、いらぬ犠牲を出すなど言語道断であった。

．．．やめよう。いまさら言っても不毛だ。少なくとも俺が今すべきことは目の前の作戦を如何に成功させるかだ。

周りが慌しく敵艦隊の突入を知らせる声と、オペレーターが各艦艦長が支持を求めているとの声で、彼は「ハッ」として意識を再び戦場へと戻した。

皆不安そうに彼の顔を見ていた。彼はそこで気付いた。無謀だと思っっているのは自分だけではないと、彼らもまた自分と同じ様に不安なのだ。

だが彼は指揮官だ。指揮官の同様はすぐさま艦隊に伝わり作戦の成功率を著しく下げるのだ。

自分は何のためにこの場に居るのか。今時分が出来ることは少しでも多くの味方を生きてプラントに再び戻れるようにすることなのだ。そのためには自分が迷っただけではダメなのだ。

彼はそれを思い出し、心の中で活を入れると矢継ぎ早に艦隊へと指示を出していった。

第二十三話・再開・（後書き）

没アイディア77式戦車

速度は同じで61式戦車を一回り横に大きくした形で車高を抑えつつも砲身を従来の二門から一門に減らし砲身長を延長した新型のレールキャノンを搭載し威力射程共に連合の戦車を上回る。この戦車の主目的は対戦車戦ではなく連合が開発した地上戦艦に対抗する為という無茶苦茶な考えで生まれた。61式や航空機部隊に支援されつつ敵戦艦に肉薄し至近距離から必殺の一撃を叩き込むという旧世紀の突撃砲の運用とほぼ同じである。

はい、はつきり言つて無茶苦茶です。ガンダムの世界に合いません。こいつが装備する主砲は元々宇宙艦用に開発されたレールキャノンスケールダウンして乗っただけという滅茶苦茶な代物です。一両のお値段が61式戦車一個中隊とほぼ同じというふざけた価格。自慢の主砲の一撃はジオンのドムは愚か至近距離ならガンダムの装甲を貫通するという壊れ性能。MSがいらなくなります。

今回一瞬だけ名前が出てきたバルティガ級護衛空母はソロモン守備隊様のアイディアを採用させていただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

第二十四話・赤い彗星・（前書き）

更新が滞ってすみません。活動報告のほうでも書きましたが、学業のほうが始まりましたので以前のようにな（それでも鈍足ですが・・・）更新する事が出来なくなりました。

この物語の完結はもう決まっているので後はそれに向けて地道に進んでいくだけです、皆様には御不便をおかけしますが何卒お付き合ひ宜しくお願いします。

第二十四話 - 赤い彗星 -

- ソロモン沖宙域 -

ドズル・ザビ大将揮下の艦隊は紡錘陣形を取り敵艦隊中央を突破せんと突撃をかけた。

艦隊の規模はほぼ同等であるが、しかし艦隊の砲数火力共にこちらが圧倒している。

ドズルは自らが推し進めたMSよりも旧世紀の砲撃戦が勝敗を決するであろう戦場を見て内心複雑な思いを抱いたが、それを表には出さず自らも前に行くべく指示を出していた。

戦場をかける赤に塗装されたザクに乗るパイロットは、ふとその目を今正に砲火を交えんとする艦隊に向けた。

「ふっ、ドズル閣下は艦隊戦をお望みのようだな。ならばその零れに私も与るとしよう。」

コックピットの中でノーマルスーツも着けず不適に笑う仮面の男。

シャア・アズナブル

初陣で連合の戦艦五隻とMAを三十機以上を一人で落とし、その功績により一気に少佐まで上り詰めた男。

常にその顔を仮面で隠し、彼の素顔は親友のガルマでさえ知らない

謎の男。

だが、その招待はジオン共和国の祖にして宇宙世紀に新たな光明を示した男、ジオン・ズム・ダイクンが遺児キャスバル・レム・ダイクンその人であった。

彼は身分を隠し、これまでジオン共和国軍に身をおきながら現在のジオンを内側から見ていた。また、父が掲げたニュータイプ思想とその父の本当に姿を知るためにも敢てザビ家と接近し父のことを知ろうとしたのだ。

そんな彼は今ではジオン共和国の押しも押されぬエースとして戦場を駆け僅か二ヶ月も経たないうちにドズル閣下直々に与えられた戦艦「ファメル」と多くの部下を率いる立場にいるのだ。

「ドレン聴こえるか、私はこれからドズル閣下支援の為に一度戦列を離れる。後のことを任せるぞ。」

高濃度のミノフスキー粒子下でも通信が出来るよう強化されたブレードアンテナは、N.Jしか散布されていない。現状で艦隊から遠く離れていてもなんら支障はなかった。

これは、予てよりジオン共和国はミノフスキー粒子下での戦闘を主目的とし開発されたザクはプラントのジンよりも電子装備が充実していた為に起こった事だ。

また、シャアの乗るザク？S型と呼ばれるこの機体は量産機より出力が三十パーセントアップしており各種通信索敵能力もアップしているため指揮官機として運用されていた。

更にシヤアが乗る機体は外見の塗装だけでなく、内装面でも彼の合わせたチューニングが施されており既存のザクを上回る性能を持ち赤い彗星の謂れである通常の三倍の速度をシヤアの技量もありスベック以上の戦果を示していた。

「分かりました。ですがシヤア少佐一人だけで大丈夫なのですか？」
通信モニターに映ったドレンが上官の指示を苦笑と共に受け取りながら彼を試すような口調で言った。

「無論だ。此れしきの事出来てからこそ部下も付いて来るといふものだ。」

相変わらずの上官の答えにドレンは又苦笑を浮かべつつも内心彼のことを心強く思っていた。

シヤアはその戦果から独断専行を好むパイロットかと思われているがそうではない。戦術に明るく上層部との折衝や戦場の機を見るに長け独自の情報網を持つこの男を最初は快く思わないものは多かった。

しかし、戦場で示した彼個人の抜きん出た実力と指揮の的確さ。更に仮面の男というミステリアスな雰囲気とそこから醸し出される高貴なもの特有の身に纏う空気と生来のカリスマ性とが彼の軍人として一人の人間として大きな魅力を伴っていた。

僅か一二度の戦闘で彼に心酔する者も多く、ドレン自身もそんな身替りの早い部下達に呆れながらも彼自身も強くシヤアに引かれていることを感じていたため自分も同類かと思わずにいられたかった。

彼は殊勝にも敬礼しながら「了解しました。」とだけ言いシヤアもまたそんな部下の態度を気にする様子もなく通信を切り戦場へと向かっていった。

「デニム、スレンダー、ジーンに通信をつなげ。シヤア少佐の代わりに私が以後の指揮を取ると。あとジーンは今回が初陣だ、デニムにはカバーしてやれと伝える。」

ドレンは上官と同じ様にノーマルスーツを着けずに艦橋に立つて腕を組み、自らに与えられた役目をこなしていった。

その傍らにも、オペレーターに近くの友軍にシヤア少佐が前に出ることをそれとなく伝えるよう指示を出し上官のサポートも忘れない。

艦橋が慌しくなる中ドレンはシヤアが居るであろう宙域に目を向け人知れず上官の無事を祈るのだった。

シヤアが戦場を駆けていく中MS同士の戦場から離れた宙域でジオン共和国軍艦隊とザフト艦隊とが真っ向からの砲撃戦を演じていた。ザフト艦隊はアンチビーム爆雷を戦場に散布しながらもジオン艦隊の火線に捕らわれない様必死の艦隊運動を行い今のところ戦局は五分といった所だった。

しかし、ドズル・ザビは早くもそれに対応しミサイルでの攻撃と護衛のMSさえも振り分けて距離を詰めての接近戦を行おうと喰らいついでいった。

逃げるザフトに追いつくがジオン。この姿は両国の艦隊運用の差を

如実に表すと共に、ザフト司令官のカール・ケンプが如何に優秀な指揮官であるのかを証明していた。

カハマルカの艦橋で艦隊に次々と指示を出す司令官を見ながら、何時自艦が敵に落されないかとその恐怖を必死に堪えながらもザフト艦隊は粘り強く敵の攻撃に耐えていた。

ジオン共和国MS隊に攻撃を仕掛けているザフトMS隊も、内心艦隊の援護に行きたい気持ちを抑えながらもこれに乗じて一気に攻めかかるうとするジオンを抑えるために突撃を繰り返していた。

しかし、そんな彼らをあざ笑うが如く戦場に一筋の彗星が流れた。

赤く塗装されたその機体は次々と味方の部隊を突破して行き味方艦隊に迫ろうとしていた。

それをとめようと三機ものジンが複数方向から迫り敵に銃撃を浴びせかけた。

ジンの装備する76mm重突撃銃はジオンのザクが標準装備する通称ザクマシンガンよりは威力は低いが、ザクマシンガンよりも小型な機銃は取り回しがよくまた戦車の装甲さえも貫く高初速は近距離ではザクの装甲さえも貫いた。

赤い機体を取り囲むよう前と左右に展開したジンはほぼ同時に引き金を引き、その銃口から紡ぎだされる砲弾により赤い機体は逃れられない火線に引き裂かれる筈であった。

しかし、彼らはその光景に目を疑うことになる。

コーディネイターでさえ反応できない速さで、一瞬にして敵が射線から消えたのだ。

彼らは起こった出来事に対しパニックに陥りそうになるのを抑えながら、索敵範囲を最大にし敵が何処に言ったのかを探した。

だが、どうしても隙問うものは出来てしまうものだ。優れた反射能力を持つコーディネイターといえども所詮は人間。それ故あり得ない出来事に対して彼らの優れた頭脳をもってしても処理できず、それが逆に通常の兵士以上に隙を見せることになってしまったのだ。

戦場で隙を見せる、それがどれほどの事か彼らは身をもって直ぐに知る事となる。

センサーが敵を探し終える前に無慈悲な一撃が一機のジンに当たり、一瞬にして火球となって消えたのだ。

彼らはそれで漸く敵の位置を悟り、落された味方の敵討ちだと謂わんばかりにありったけの火力をたたきつけた。

一瞬にして消えたザクは、驚くべき反応とスピードでジンの上に回りこみそこから三期の内一機を狙撃したのだ。

そして、此方に気づいたジンに対し赤いザクを駆るパイロットは人知れずその頬を歪めた。

確かに反応は悪くない。だが、今回はその反応のよさが逆に仇となったのだ。

一瞬の出来事に反応しそれに捉われるばかりに、敵を見失い更にあ

せった末動きを止めるといふ戦場で最も犯してはならない愚を行ったジンのパイロット達を誰も攻めることは出来ないだろう。

何故ならば今回は相手が悪すぎたのだから。

ザクのパイロットはまるで此方の動きが全て分かっているかのよう
に全ての攻撃を紙一重で避け、擦れ違いざまの一撃でもう一機のジ
ンを宇宙の塵へと変えた。

会敵から僅か三分で起こったこの出来事は容易にジンのパイロット
の精神を折、ジンのパイロットは通信機に味方の援護を叫びながら
背後に直撃した砲弾によりこの世から姿を消した。

一瞬で三機ものジンを落した赤いMS。一人のパイロットが呟いた。

「赤い彗星が来た．．．。」と

その声は瞬く間に戦場に伝わり、ザフトは恐怖で顔を青く染め逆に
ジオンはその名に士気を挙げ各所で反撃へと移った。

ザフトは必死の抵抗を行い、残された僅かなバッテリーの中で味方
を立て直そうと奮闘するも、一度広がってしまった恐怖は容易には
抜けずカメラを横切るザクの姿に一々怯える様であった。

戦場を駆ける一筋の閃光。その登場と彼の放つプレッシャーは味方
には勇気を敵には威圧感を与え戦場のMSの動きを支配する。

人はそれをこういう。エースと．．．。

赤い彗星の登場により予想より早く戦線が崩れてしまったのを見ながらカール・ケンプは如何することもできない現状にただ耐えることしかできなかつた。

本来彼の作戦では、現有戦力では要塞を攻略することは出来ずまた要塞砲の援護を受けられるジオンとまともに戦うのは馬鹿としかいえなかつた。

それを避ける為、わざと要塞を迂回しジオン本国を突くような機動を取れば闘将といわれるドズル・ザビは出てこなざる終えない。

そして、予め選定しておいた戦場に引きずり込みそこでの決戦を行わざる得ないようにしたのだ。

まずセオリー道理に戦場にNJを発生させ順次MS隊を発進、手練を先頭に部隊を牽引させ敵MSを抑える。

敵の氣勢を制するため真っ先に攻撃をかけることでイニシアチブを握り膠着状態を演出し、我慢できなくなったジオン艦隊をいなしながら敵MSの稼動限界まで時間を稼ぎそこを狙って部隊を引き上げるつもりであつた。

その為、戦闘に参加させるMSには予備のバッテリーを持たせ活動時間を延長し、更に予め戦域外にジャンク屋を雇うことにより艦隊が敗走しても本国に戻る手はずを整えていた。

だが、現状は彼の予想を上回り最悪の事態の更に上を行っていた。

「赤い彗星」

たった一つの名と一瞬の出来事により戦場を支配し、味方を崩壊へと追い込んだ元凶。

今まで戦場に出てこなかったのが不思議でならないが、しかし現にこうして現れた彼の活躍により戦局は一気にジオンへと傾いていった。

味方が崩れていく中、艦隊も撃沈された船こそないものの船体に重大なダメージを負い戦闘が不可能なもの、機関に支障をきたし回避運動できない艦を後方に下げその穴を埋めるべく数少ないナス力級が割り当てられ戦場を何とか持ちこたえさせていた。

が、距離を詰めたジオン艦隊からの砲撃はアンチビーム爆雷によって作られた防壁を突破し艦隊に着実にダメージを与えていつていた。

無論此方もやらねばなしでは無いが、直衛機は全て敵MSの迎撃に裂かれそこを狙うようにしてシオンのガトルやジッコといった戦闘艇が抱えるミサイルを次々と艦隊に向け放っていた。

これ等の兵器はプラントでは二線級以下の扱いを受けており、MS至上主義の一種の弊害ともいえた。

ジオンでもこれ等の兵器はMSに較べその重要度は低いが、限られた人的資源を有効活用しまたMSの操縦適正の無い者達でも扱える兵器としてジオンでは貴重な戦力であった。

この考えの違いが後々プラントに大きく押し掛かることとなる。

突撃を繰り返す宇宙戦闘艇を火線を集ませることにより何とか撃退しようとするが、それに気を取られていると正面からジオン艦隊

の砲撃をもろに受け一撃で大破判定される艦も出た。

足が落ちた船に群がるように突撃艇が攻撃を行い、味方を救おうと艦を密集させればそれを穿つ様にメガ粒子ビームの束が叩きつけられる。

それでもまだ持っているザフト艦隊のしぶとさは賞賛に値するだろう。

が、このままでは遅かれ早かれザフトは壊滅の憂いにあつだろう。

カール・ケンプは潮時かと見て最後の策を行うことにした。

そもそも彼が戦場に指定したの二度の攻略戦で出来たジャンクの山であつた。

無論艦隊が身動きできないほどではないが、それでも回収するのは骨が折れる。

このお宝の山を狙って度々ジャンク屋ギルドが足を伸ばすが、大抵はジャンクを回収する前にジオンのパトロール部隊に見付かり慌て逃げ出すものや、折角見つけたジャンクを見逃す代わりに二束三文で買い叩かれて損をするものなど散々な目に合っていた。

だが、それらを上手く掻い潜った者にはお宝の分け前に与る権利が与えられる。

この戦場は貴重のMS同士の戦闘記録が詰まったMSや船の残骸がありそれだけでデータだけでも各国が喉から手が出るほど欲しいものなのだ。

更に実機を回収したとあらば、その価値は一気に釣り上がり一夜で巨万の富を稼ぎ出すことも不可能ではなかった。

故にこの宙域は毎日各地からジャンク屋が集まりジオンと互いにしのぎを削っているのだ。

そのジャンクの中に潜み秘匿回線で指示を受けた者達が戦場を目指し動き出したのだ。

それを最初に発見したのは誰であろう。戦場のはずれで何か光ったと思うと突然ジオン艦隊に向けビームの閃光が走った。

突然の奇襲に一瞬ジオン艦隊は揺らぐが生憎とこの艦隊を指揮しているのはドズル・ザビその人であり突然の事態に対しても彼は冷静に対処し的確な指示を飛ばしていた。

そして、下手人を最大望遠カメラで捉えた時流石の彼も面を食らった。

そこに映し出されていたのは雑多な艦種で構成された艦隊であった。

連合、ザフト、中立国の戦闘艦や中には何処から手に入れたのか連邦のサラミスやジオンのパプワの姿もあった。

この何の統一性のない艦隊が突如としてジオン艦隊に攻撃を加え、戦域の端からミサイルやビームを放ってきたのだ。

恐らくコーディネイターの傭兵であろうか、ジンの姿もありその戦

力は無視できないものがあつた。

ドズル・ザビは揮下の艦隊の一部を差し向け襲撃してきた艦隊に対応させたが内心は彼の心は怒り狂っていた。

恐らくあの艦隊の大部分は近頃跋扈し始めたジャンク屋ギルドが関わっているだろう事は艦種の雑多さと見るからに継接ぎな船体を見れば分かる。更に小癩な事にギルドのマークを消し傭兵さえも雇い彼の艦隊に襲い掛かるなど持っていた他であつた。

もしこの場に自由が利く戦力があればすぐさま殲滅するであろうが、しかし主力のMS隊はザフトMSにかかりつきりとなっており戦場を突破するにはいまま少しの時間がいったのだ。

更に直衛を攻撃に振り向けてしまったため彼らを守るものは自艦に装備された砲以外には無かつたのだ。

カール・ケンプはこの機を逃すはずも無く損傷艦を守りながらも徐々にだが後退をはじめ、各部隊に予め決められた逃走ルートを示し終えると彼は後の指揮を艦長に任せ自身はMSデッキへと足を運んだ。

第二十四話・赤い彗星・（後書き）

如何しても、如何しても人物描写が何回やっても上手く行かない（涙

本当はケンブさんは実戦肌の指揮官でザフトの兄貴的存在として書くつもりが唯の苦勞人のおっさんになってしまった……。しかも最後の策が他人頼みというお粗末さ。

でも、これで一応SEEDの主な勢力が出てきたので由とします。

まだまだ至らぬ点がございますが、これからも宜しくお願いします。

超！外！伝？（前書き）

むしゃくしゃしてやった。ネタが思い浮かばないので自棄になって
やった。今では反省をしている。

．．．でも、多分又やるかも。

超！外！伝？

0079

史実と違いジオン公国、地球連邦共に火星圏へと進出を果たし新たなフロンティア獲得へと精を出していた。

しかし旧世紀のフレンチ・インディアン戦争、帝国主義時代のように人類は広大な宇宙空間に出ても互いに争い合う事を止める事が出来ずにいた。

地球連邦から半ば強引に独立を果たしたジオン公国は、しかし当初から対立関係にあった。

それもそうだろう。地球連邦という全人類を統合し管理運用するシステムを機能するためにはそれを存続させるだけでも莫大な労力と資金が必要になる。

そして、人類の過半数が宇宙に住む今各コロニーにかかる税収入が地球連邦を支えていると行って過言ではなかった。

だが、宇宙に住む者たち、スペースノイドたちはそれに納得しなかった。その急先鋒だったのがジオン公国の前進ジオン・ズム・ダイクンが建国したジオン共和国であった。

ジオン共和国は地球から最も離れたコロニー月の裏側にあるサイド3に建国されダイクンが提唱した全人類の宇宙への移民と新たな人類の進化の可能性を示したことにより彼の考えに多くのスペースノイドたちが共感しジオン共和国で独立の気運が高まることとなっ

た。

これに危機感を覚えたのが地球連邦である。

もし仮にジオン共和国が独立を果たせば、それに続いて各コロニーも黙っては居ないだろう。

最悪地球連邦というシステムを離れ地球圏を取り囲むように独立国家がうごめく時代が来るかもしれない。

そうなれば地球連邦自体が崩壊しかねなかった。

それを回避するために連邦は当初から外交、経済、軍事面での制裁と圧力を掛けジオンの独立運動を弾圧した。

更に宇宙軍の増強しジオンを恫喝。これに対し終にジオン共和国も連邦から離れ独自の軍備を持つにいたった。

これがそもそもの発端であった。

その後のダイクンの急逝と公国体制への移行。

ギレンが推し進めるアステロイドベルトを開発する百年計画を経て互いに緊張感が増していった。

しかし、この状況を一変する事態が起きた。

ミノフスキー粒子である。

宇宙世紀において核融合炉に欠かせない技術となっていたこの粒子

は、その特性上レーザー通信以外の通信、索敵を全て無効化してしまふ能力を持っていた。

更にこれを応用したのがミノフスキークラフトである。

ミノフスキー粒子の格子状に整列させる特性による反発力を利用し、擬似的に反重力を発生させて物体を浮遊させ今まで以上に安全に効率よく大気圏を可能にした。

そもそもこの技術は連邦が先んじていたが、しかしジオン諜報部が軍全これを入手し最初にこれを完成するに至ったのだ。

ジオンはこの技術を早速艦船に応用し、出来上がった艦をすぐさま火星圏に向け出発させた。

ジオン共和国はたいして資源の残っていない地球よりも、手付かすの間々残っている火星を手中に収めんと行動を開始した。

この動きはすぐに連邦に知られることなり、連邦の期待の新鋭艦ペガサスが同じ年に完成し自慢の積載量を生かして大量の物資を積み込みこれもまた火星圏に向け出発した。

ここにジオン、連邦による宇宙を舞台とした大航海時代が幕を開けることとなった。

次々と発見される新航路。火星やアステロイドベルトで見付けた新資源。続々と火星を目指し宇宙港に集まってくる船と、積荷を狙った海賊。

この宇宙世紀に到来した宇宙開発バブルは、停滞した地球圏を活性

化させ地球連邦の閉塞感を打破するきっかけにもなった。

連邦は宇宙開発を進めていくために維持費に莫大な資金がかかるコロニー管理を各サイドに一任しそれにあわせ各コロニーの自治権を増大させた。

既に宇宙開発によって莫大な収益を上げている連邦は、逆に各コロニー管理によって要らぬ出費を強いられる現状を憂慮し、連邦に対する支持を集めるためもあってコロニーの自治権を拡大させ新たな経済圏へと組み込んでいった。

地球連邦とジオン公国との競争が結果として、人類に新たな風を呼び込む結果となったのだ。

だが、この時でも何れ訪れるであろう戦乱の気配が忍び寄っていた。ジオン公国と地球連邦。互いに相容れぬ両者は近いうちに激突することは必死であろう。その時どのような結果となるのかはまだ分からない。

しかし、民衆は明日を信じ短絡的なこの平和が永遠のものだと疑いもせず日々を謳歌していった。

だが、この平和が思わぬものの存在によって破られることとなる。

銀河の中心からやってきたそれらはやがて地球圏に混乱と動乱の時代へと叩き落すその存在は

Beings of the
Extra
Terrestrial origin which is
Adversary of human race

”BETA”と呼ばれるものたちの足音は直ぐ近くまで人類の元に
迫っていた。

超！外！伝？（後書き）

やった．．．やったよ。

マブラヴとガンダムのクロス．．．。

今までマブラヴ世界にガンダム勢やMSが来てもガンダムの世界にBETAが来た事はなかったのでやってみた。

多分続かないかも。

好評でもそうでなくても続かないかも。

でも、趣味でまたやるかも。

どっちにしるネタが補充できたら本編を書きます。

第二十五話・V作戦・（前書き）

今回は一旦戦場を離れて我等がゴツプ大将閣下にご登場いただきませう。

ゴツプはいいですよゴツプは。なんたってあのでっぷりと膨れたお腹から想像できる耐久性正に官僚系軍人の鑑です。

戦争は戦争屋だけではできないということを証明してらっしゃるお方です。でも、決して前線には出さないように。だって大将で指揮が7しかなんですよwwww

第二十五話 - V 作戦 -

ゴツプ大将の朝は早い。

毎朝六時に起床しシャワーを浴び、モーニングコーヒーにキリマンジャロ直産のコーヒー豆を炒った物を使い朝の優雅なひと時を過ごす。

ジャブローに儲けられた高級将官専用の官舎のテラスから降り注ぐ朝日を浴びながらゴツプ大将は複数のニュースペーパーに目を通していく。

コーヒーを飲み終え、あらかたニュースに目を通し終わるとゴツプ大将はクリーニングしたての制服に着替え胸にはピカピカに磨かれた勲章と階級章、更に頭には軍帽を被り、ワックスをかけ黒光りする高級革を使用した靴を履き官舎を出て行く。

九時きっかりにジャブロー本部執務室に入ったゴツプ大将はまず机の上に乗せられた最新情報と各国の動き、更に軍部内の広報と連邦議会での議題やその内容などに目を通し、それが終わる頃になると扉をノックして隣の部屋から秘書が今日中に決済する必要がある書類を持ってくる。

ゴツプ大将は机に広がる書類の山を午前十時から十三時まで完全に目を通し、サインをしなければ関係部署に問い合わせ調整を行い、更に間違いがあれば訂正をしてから書類を送りなおすなど細かな作業もそつなくこなした。

そして、十三時きっかりに秘書が決済の住んだ書類をもって行き、

ゴッブ大將は遅めの昼食を執務室に運ばせ三十分ほどの休憩が済むと、又午後の決済待ちの書類へと取り掛かった。

「ふむ、しかしこう毎日毎日書類が増えるとなると少し手が足りんな。何人が引き抜くか。」

ゴッブ大將は減る事はなくても増え続ける書類の山を見ながら手を休めることはなくそう呟き、頭の中で事務処理能力の高い者を何人かリストアップしていた。

彼の超人的な決済能力と事務処理能力をもつてしても、未曾有の大戦を円滑に進めるために必要な書類の数は天文学的な数までに膨れ上がっていた。

それでも書類を溜めずに、その日のうちにきつちりと決裁し今まで組織運営が滞ることが無かったのは一重にゴッブ大將の奮闘のおかげといえよう・・・ただ。

「早くしないとこのままでは六時に帰れなくなってしまふな、残業は能率と財政に悪いし。そうだ！大將権限を使って明日からでも働かせられるよう人員を引き抜いてこよう、まあ断りはしないだろうしな。ははは」

ゴッブ大將は名案だといわんばかりに手をたたいて喜び、そのまま書類の決済作業へと戻っていった。

ゴッブ大將は官僚の鏡であり残業は決して許さなかった。その為彼の元で働く部下達は日々殺人的量の書類に追われることとなるのだ。

ゴッブ大將の権力の乱用によって引き抜かれていった者達により栄

養ドリンクと育毛剤の需要が増えているのは公然の秘密であった。

午後三時を過ぎる頃になると、ゴツプ大將は粗方書類の決裁を済ませそれを秘書に渡すと、執務室を出てジャブロー内にある会議室へと赴いていった。

・ジャブロー第三会議室・

ゴツプ大將は南米地下深くに建設されたジャブローの長い廊下を歩き会議室の扉を通り過ぎてその隣に設けられた小部屋に入っていた。

部屋の中に入り、既に椅子に座ってまっていた相手に敬礼をし相手も答礼をするとゴツプ大將は相手と向かい合うようにして椅子に座った。

「お久しぶりですな、統合参謀本部議長閣下。態々ジャブローまで足を運んでいただきあり、ああ世事はいい。それよりも分かっているな？」・・・はい。」

ゴツプ大將の言葉を遮る用にして参謀本部議長は話を進めた。

「いま隣の部屋には連邦議会主要議員が集まっている。何かしら粗相があれば我々の首が飛ぶだけの力を持っている。」

「はい、存じております。与野党の重鎮に各派閥の代表や大統領の信任の厚い者達が十名ほど来ていると耳にしています。」

ゴッブ大將は神妙な顔つきで答えながらも内心その程度のことなど今更言われなくても分かつていると思いなながらも表情には出さず、表向き殊勝な態度で議長と接していた。

「分かつていればそれでいい。」

参謀本部議長はその答えに満足しながらも一言付け足した。

「そうそう、今回の件については大統領も高い関心を寄せられているからその点も留意するようにしてくれたまえ。」

そう言うと参謀本部議長はデップリと膨れた腹をゆすりながら部屋を出て行った。

ゴッブはその背中を見送りながらも内心毒づいていた。

- 全くそのようなことで一々呼び出すなど時間の浪費以外の何者でもない。御蔭で書類の決裁が全て出来なかったではないか、あの男は誰が連邦軍を動かしているのかわかっているのか？ -

- まああの男も今まで大統領に罷免されていない所を見るとそこそこ使えるが、しかし宮仕えというものはつくづく面倒なことだ -

ゴッブ大將は頭の一部でそういいながらも大部分では短い会談の中で分かったことを考えていた。

- 恐らく議員たちは加盟国からの突き上げもあるのだろう、今まで連邦は後手に回っているし連邦軍に対して不満を持ってもいたし方あるまい。それに今の大統領はどちらかと言えば穏健派だ。 -

・レビルのような戦争屋に仕切られるのが黙ってられないのだろうし、外交面での失敗を指導力で挽回したいとも考えているはずだ。そこまで考えていると自ずと彼らの何を求めてここに来ているのか分かる。

ゴツプはそこまで考えてから部屋を出て、時間きっかりに会議室へと入っていった。

「では時間も余りないことですので早速会議を始めさせていただきます。」

集まった議員達が無言で肯定を示すとゴツプは話を続けた。

「遅れましたが本日はレビル”大将”は軍務が忙しいため会議にはこれないとの事です。代わりに私のほうでご説明させていただきます。」

すると”大将”という単語に何人かの議員達が反応してなにやら難しい表情を作った。

統合参謀本部議長閣下はそれを見て汗をたらしながらゴツプ大将に目でなにやら訴えかけていた。

ゴツプはそれに気付かない様子をして話を進めた。

「レビル大将は敗戦の将ではありませんが、彼の能力は今の連邦を支える上で必要不可欠と判断いたしました。更に彼は宇宙地上軍問わ

ず将兵に支持されており今更責任を追及すれば、それだけで前線の士気を下げ戦争遂行に大きな支障をきたすでしょう。」

ゴツプはそこで言葉を切ると周りの反応をざっと見回した。

多くの議員は渋々ながら納得している様子であったが、しかし未だに納得していない議員達もあり、その様子にハラハラしながら汗を拭いている参謀本部議長の姿がイヤに目に付いた。

「話を続けます。軍の方針としては此方からは積極的に仕掛けず敵の侵入を阻止するだけに留まっています。これは今だ持つて前線に必要な物資が届いていないのと、N.Jの影響で支援を必要とする各国支援の為に必要物資やエネルギーがまわされているためであります。」

「更に我が軍は、欧州、アフリカ、アジア、大西洋、太平洋、そしてここ南米と更に宇宙で多方面にわたり敵軍と対峙しているため思うように身動きが出来ないと、全軍の掌握まで今少し時間が必要なのです。」

連邦という組織は人類が長年の英知を結集して作り上げた人類史上は初の全人類を統治する組織であった。

しかし、宇宙世紀初期の戦乱により連邦はその意義を大きく揺らぐこととなる。

連邦は初期の混乱期と激動の時代を潜り抜け、そして現在遠く火星、木星までも手中に収める史上最大の組織にまで成りおおせたのだ。

が、連邦はあまりに巨大すぎた。

全人類のうち凡そ七割以上の人口を占め、宇宙地上と広大な領土を持ちそれだけでも管理運用するのに莫大な労力を必要とした。

そして、連邦の盾であり剣である連邦軍は連邦を支えるために肥大化せざる終えなかった。

巨大な組織を支えざる為に肥大化せざる終えなかった連邦は正に巨人であった。

一つ一つの動作は遅くともその力は凄まじく、事実連邦が今日まで存続できたのは一重に人類を始めて統合した組織という名と全国家を敵に回してもそれでもなお圧倒する連邦の力に誰も逆らえなかったというのが本音であった。

しかし、巨大な質量を動かすには莫大なエネルギーが必要であり連邦は次第に硬直化し結成当初の柔軟さと活力を失っていったのだ。

その結果が今の愚鈍な連邦と腐敗の象徴である連邦議会を育てる温床となったのだ。

いざ有事というさいにも、連邦は硬直化した組織を動かすだけでも長い時間を要したのだ。

その弊害が今現在連邦を守る軍に現れているというのは皮肉としかいいようがなかった。

「ゴツプ君、一体どれ位の期間が必要なのだね？」

部屋の中央に陣取っていた議員グループの一人が尋ねた。

「現在ジャブロー及び各生産拠点をフル稼働し前線に必要物資を供給しています。更に先の会戦で失われた宇宙艦隊の再建と全軍の増強、それに人員の育成や予備役の再訓練などで遅くとも今年度後半から来年度にかけて反攻の準備が整うでしょう。」

前々から戦争準備を行っていた連合やプラントとは違い、連邦は大統領が穏健派ということもあり軍備の増強をしてこなかった。

これを連邦の怠慢というのは酷であろう。当初は連邦は事態に積極的に介入はせず静観の構えを見せ機を見て仲裁にはいるはずであった。

しかし、世界の流れは連邦を巻き込み終に地球上で再び人類同士の争いが行われることと成る。

連邦はなんら準備の出来ていない中での戦争を余儀なくされたのだ。

「それでは遅すぎる。大統領閣下は早期の講和を望んでおられるし、いたずらに戦乱を長引かせるような事があつてはならないと大統領は心配されている。」

大統領に近い与党グループらがゴツプの答えに不満を漏らした。

「無論、軍部としては大統領の意向を最大限反映させていただく所存であります。しかし、準備不足ないま此方から打って出ればいたずらに戦力を消耗しひいては構成国の安全に支障を来たすでしょうな。」

ゴツプの答えに発言した議員らは渋々ながら矛を収め、もう一度ゴ

ツプは会議室を見渡し話を続けた。

「ですが、今後の状況しだいでは上手くすれば今年度中に講和なし戦争終結が出来るかやも知れません。」

ゴツプの意味ありな発言に何人かの議員等が食いついてきた。

「軍部では何かしらの秘策があるということか？」

ゴツプは満面の笑みで答えながら話を続けた。

「これは本来レベル大將が極秘裏に進めていることですが私が替わりに説明します。それとここにお集まりの皆様には今からご覧になることは他言無用に願います。」

ゴツプはそういうと部屋の隅に控えていた士官らが手に持つ書類を議員らに手渡していた。

書類の表紙には厳重な封がしてあり、そこに書かれている『特第一級機密事項』と『V作戦』という単語がここに書かれていることの重要さを物語っていた。

ゴツプは書類が全員に行渡るのを見計らい、手元の端末を操作し背後の巨大なモニターに人型の設計図が映し出された。

そして映像が切り替わり、撮影された戦場の光景とそこで縦横無尽にうごめく人型兵器、MSの図が次々と映し出されていった。

「ご存知の方も多いと思われませんが、プラントが連合との国力差を覆す要因となったMSジンについてはここでは多くは語りません。」

しかし、それが上げる戦果と更に連邦の同盟国であるジオン共和国が保有するMSザクの性能は従来兵器を圧倒し戦場を覆しました。」

モニターの背後ではプラントのジンやジオンのザクがMAを追い回し、戦艦を沈める姿が映し出されていった。

「この今までにない全く新しい兵器は、今後連邦軍が戦争を継続する為に大きな障害となるでしょう。」

議員達は全員その意見に賛成し、無言で頷きながら続きを促した。

「連邦も戦前からジオン共和国経由でこの兵器の存在を認知していましたが、しかし当時の軍首脳部はこの兵器の有用性を見抜けず結局開発されたのは、」

そこでモニターが切り替わり二種類の機体が映し出された。

「お手元の資料にあるとおり、RX-75ガンタンクとRX-77ガンキャノン両二機種でありました。」

「この機体はお世辞にもMSとは言えず、火力はあるものの従来兵器を凌駕するものではなく結果としてMSモドキといわざる終えないものになりました。」

モニターにはガンタンク、ガンキャノンの詳しいスペックと、情報部が入手したジン及びザクとのスペックの比較とが映し出された。

「当時の情勢ではMSの有効性が見抜けなかったのは致し方ありませんが、しかし当時の軍部首脳の怠慢の結果であるとは言わざる終えませんでした。」

その言葉に少し気分を害した統合参謀本部議長はワザとらしく咳をして話を打ち切らせた。

「つまり我々連邦は何らかの形でMSに対抗する手段が必要だといいたいのだな。」

議員の一人が助け舟を出すのと同時に話の内容を先取りした。

「はい、話が早くて助かります。現在我が軍ではMSの技術取得のためジオンのザクをライセンス生産したザニーをルナツーに配備し現在MSパイロットの育成に専念させています。」

背後にモニターにはR P f - 06と表示されたザニーが映りその演習風景が流れていった。

そこで議員の一人が自身の疑問をいった。

「それでは連邦は今後ジオンのザクを使ってMSに対抗するという事なのか？」

確かに手元の資料にあるようにザクの性能は現状でも満足できるものであり、また機動性、汎用性、共に連邦のMSを勝っていた。

「いいえ、あくまでこれらは技術習得のためであり一部実戦部隊にまわし実戦でのMSの有効性を試すテストベットでもありません。」

「ではこれとは別の物があるというのだね。」

「ええ、では本題に入りましょう。お手元の資料の六ページ目をい

覧下さい。」

そういつて暫く会議室の中に紙をめくる音が響いたが、そこで目にしたものに誰しもが釘付けになった。

「ご覧になりましたかな。これが現在連邦軍が総力を挙げて開発をしている新兵器の姿です。」

そこにはRX-78ガンダムと銘打たれた今までにないMSの姿が載っていた。

第二十五話・V作戦・（後書き）

連邦は遂にV作戦が本格的に始動します。さらに前線に現れるゼニ
ーや地上でその真価を発揮するガンタンク、ガンキャノンが火を噴
き戦場は新たな局面を迎えようとしています。

果たして、連合は史実どおりにMSを開発する事が出来るのか、ま
たザフトは予定よりも早い連邦のMSの登場にどう対処するのか。

君は生き残る事が出来るか。

第二十六話・希望と野望・（前書き）

ちよつと今回はゴツプ大将のキャラが変わってしまう部分もありますが、いまだキャラを魅力的に書く方法を習得していない作者なので至らぬ点がございますが如何か生暖かい目で流していたださい。

第二十六話・希望と野望・

RX-78 コードネーム GUNDAM

モニターに映し出されるそのMSは今までにない姿をしていた。

人間の顔を思い浮かべる顔に二本の角を思わせるアンテナ。

トリコロールカラーに塗装された機体は、ジオンのザクやザフトのジンと比べると全体的にシャープに纏められており、しかし芯の弱さは感じず逆に今までにはない可能性と力に満ち溢れているように見て取れた。

「RX-78 ガンダム テム・レイ博士が主導となって現在開発が進んでいる機体です。」

「まあ、この機体の特徴はMSにして始めてメガ粒子砲を装備したビームライフル、ビームサーベル、ハイパーバズーカ、後付武装にシヨルダーキャノンなどその威力は既存のMSを一撃で撃破できるほど強力なものです。」

会議室に集まっていた議員達にどよめきが走った。

現在のMSの主装備は実弾が主流である。これはMS用の兵器が歩兵の携帯兵器をスケールアップした物を使っているからであり、携帯用ビーム兵器は各陣営が心血注いで開発に取り組んでいるものであった。

そもそもビーム兵器の携帯化は大きな問題をはらんでいた。まず戦

艦用に開発されたビーム砲をそのままスケールダウンして使うのは無理がある。

これはMS程度のジェネレーターでは現在のビーム兵器を運用できずまたそもそもそのビーム砲を小型化する技術に研究者たちが頭を悩ませ続けていたのだ。

各種技術に定評があるプラントでさえ今だもってビーム兵器の開発は成功しておらずジオンもまた開発が難航しているのが如何にビーム兵器の小型化が困難だったかを知らしめていた。

そんな中、今までMS開発の後塵を拝していた連邦が初のMS用ビーム兵器を実用化させたその事実が、集まった議員達が改めて連邦の力を再認識させられたのだ。

「説明を続けます。」

会議室の彼方此方でヒソヒソと隣同士で囁く中、ゴツプ大将はまるでこの程度のものたいした物ではないと言わんばかりに話を続けた。

「この機体は装備する兵器だけではなく、ジンの重突撃銃を跳ね返す装甲、千巻の主砲にさえ耐える強靱なシールド、新開発のフィールドモーター駆動により従来機以上の機動性と運動性を実現するに至りました。」

「更に上記の兵装以外にも各種支援兵器及び運用母艦を建造中であり完成のあかつきには歴史に残るものとなるでしょう。」

だが、ゴツプ自身も一兵器に過度な期待を寄せては居ないながらも説明を続けるうちに興奮を抑えきれず最後に思わず言葉を付け足す

など彼をよく知るものが見ればこのときのゴツプの姿に驚いただろう。

が、この場にいる者達は彼よりもモニターに映し出される世紀のMSに目が釘付けになっており彼の様子に気づいたものは居なかった。

興奮冷めやらぬ会議室の中で説明が終わりモニターの画面が消えると同時に各議員からの質問の嵐が起こった。

ゴツプはそれを一人ひとり丁寧に対応し、予め予想されていた質問の範疇を超えるものでは無かったにしろスラスラと言葉を紡ぎ議員達の質問に答えていった。

そんな中一人の議員が手を上げて発言した。

「確かにこのMSは素晴らしい。完成すれば正に連邦の象徴となるだろう。しかし、実際にこのカタログスペックどつりに性能を発揮するか甚だ疑問だと云わざる終えない。何故ならこの報告書には現在機体は70%までは完成しているが肝心のビーム兵器と駆動関連に手間取っていると書いてある。本当に実現できるのかねこの機体は？」

その議員の発言により会議室は先程の熱狂が何処えやら、水をうつたように静まり返った。

しかし、この質問さえもゴツプの予想の範疇であるとは神ならざるこの場にいる者達には分かるはずもなかった。

「確かに今だ技術的に困難な部分があると云わざる終えません。ま

た縦しんば完成しても実戦での性能が未知数である以上過度な期待で足元をすくわれるかもしれせん。」

そこまで言い切るとゴツプはこの日何度目になるのか会議室を見渡した。

そして、

「しかし我々連邦の力を見くびっては困ります。必ずやガンダムは完成し連邦を勝利に導くはずですの皆様方にはいま少しのお時間をいただきたく存じます。」

そこでゴツプは言葉を切り、改めて言葉を紡ぎだした。

「必ずや、必ずや我々はガンダムを完成させ連邦を勝利に導いてごらんに入れましょう。そのあかつきには、連邦は名実共に人類の頂点に擁くことになるのです。」

ゴツプの熱のこもった答えに触発されるかのように議員達も体の奥底から滲み出す熱によって会議室の温度が若干上がっていった。

彼らはいま改めて自分たちが所属する組織連邦の意義と人類の未来を切り開く力とを各々思い浮かべるだろう。

この日この時こそ、後に伝説となるガンダム誕生の礎となる記念すべき日であった。

- ソロモン宙域 -

ジオン艦隊とザフト艦隊との会戦はザフト艦隊が撤退したことにより終結した。

結果的に目標を達成できなかったザフトとソロモンを守り通す事が出来たジオン。

結果を見ればザフトの三度目の敗北でジオンの三度目の勝利であるがしかし戦場から帰還する将兵の顔には喜びの表情は無かった。

逆に何処と無く釈然としないような或いは今回の結果に憤りを感じるものも居るだろう。しかし勝利には変わりないことは確かだった。

ジオン艦隊がザフト艦隊の中央突破を図ろうとした時に戦場の端から突如として所属不明の混線艦隊が出現。ジオン艦隊へと攻撃を仕掛けてきたのだ。

混戦艦隊は傭兵を雇ったのかMSを保有しジオン艦隊を攻撃しあわやルウムの再現かという危機的状况に瀕したが、主戦場を突破したシャア少佐率いるMS隊が間に入り何とか艦隊の損失という危機は去ったのであった。

が、その隙にザフト艦隊は撤退、一部追撃に入る部隊も居たが敵旗艦から出撃したMSと直衛機によって防がれ成果を上げる事が適わなかった。

混戦艦隊もザフト艦隊が後退すると同時に戦場を離れ結果として敵

に痛打を与える事無く先頭は終了したのだ。

もし、あの時邪魔が入らなければ今回もまたジオンの圧倒的勝利は
確実であった筈だ。

艦隊を分断されたザフトは戦場を突破したシャア少佐以下MS隊に
よって蹂躪され、帰るところを失ったザフトMSは戦わずして無力
化することも出来たはずだ。

だが過去のことを振り返っても仕方が無い。現実にはジオンとザフト
の引き分けで終わった。

ドズル・ザビ大將は旗艦艦橋で明らかに不機嫌な様子で腕を組みザ
フト艦隊が撤退して行った宙域を睨み続けていた。

彼が発するオーラに余人は近寄りがたつたが彼らは軍人である。報
告の義務を怠ったとして処罰されるよりかはまだましであった。

「ど、ドズル・ザビ閣下……。今回の会戦により我が方の被害と
戦果ですが……。」

「貴様。」

「は、はい。」

突如として報告に来た兵の言葉をさえぎるようにしてドズルが唸る
様に言った。

「今回の会戦は我々の勝利か否か。」

「そ、それは・・・。」

それは今誰しもが触れたくは無い話題に一つであった。それは艦橋にいるクルーたちばかりか参加した将兵全員に共通する思いでもあった。

「ザフトは、プラントの連中は日に日に手強くなっていく。今回はこの程度で済んだが次はどうなるか分かん。」

ドズルは顔を向けず真っ直ぐにザフト艦隊が撤退して行った宙域を見据えて誰にも聞こえぬよう呟くように言った。

・プラント アプリリウスコロニー・

評議会議員達が一同に介し今回の攻略戦の結果の報告を聞いていた。戦場から帰還して纏められたレポートを読み上げる声が響く中、評議会のメンバー達は苦虫を噛み潰したような顔になっていた。

三度に渡るソロモン要塞攻略の失敗。さらに今回の攻略戦で被害こそ少ないものの現場の指揮官が勝手に評議会の承認も得ずにジャンク屋ギルドを動かしたことで現在プラント大使館には各国からの非難の声が集まっていた。

そもそも今回の作戦は二度に渡る攻略戦によって墮ちたザフト宇宙軍の名誉を回復する為に評議会を通さずにザフト内部で内々に決め

られたことであつた。

そして艦隊が出撃した後でザフト司令部は評議会に今回の作戦を持ち込み事後承諾という形で今回の作戦は決行されたのだ。

この話を持ち込まれた時に見せたクライン議長の苦々しい顔と、それ以上怒りを露にしたパトリック・ザラがこの作戦がザフト上層部による独断だということ象徴していた。

そして、今回もまた負けたのだ。

これにより今回の作戦を指導したザフト上層部は更迭され改めてザフトの抜本的改革の必要性を痛感したのであつた。

「やってくれたな、これで残つたザフト宇宙艦隊の三割が失われた事になる。如何責任を取るつもりなんだ。」

クライン派議員の突き上げに対しパトリックは、

「そもそもこの件は私の知らないことで行われたことでありまた作戦自体を承認したのはここにいる評議会メンバーであることは誰も否定はしないでしよう。にも関わらず、その責任を押し付けようなどどまるで自分には非がないと思つているのか!!」

パトリックの怒声が部屋に響き渡り、それと同時に沈痛な空気が辺りに満ち始めた。

「だがパトリック、今回の件もそうだが最近のザフトは徒に戦火を広げすぎている。ここで何かしらの処罰が無いことには彼らは益々付け上がるだろう、そうなつてからでは遅いのだ。」

クラインの議長の諭すようなそれで居て鋭い目線で暗に何かしらの責任を取るよう目で刺す様に訴えた。

「勝てばいいのです、勝てば。幸い此方の被害は少なく戦力を回復すればまだ我々は十分に戦える。それにジオンも連戦で消耗し暫くは要塞に引き籠るだろう、その隙に今以上の防衛体制を整える容易と時間もある。」

パトリックの意味ありな発言に何人かの議員が食いついた。

「国防委員長は何か秘策をお持ちなのか？」

パトリックは手元の端末を操作し円卓上の議事堂中央モニターに彼の計画を映し出した。

「現在主戦場は地球に移り宇宙は小康状態と言えよう。連合はジオンにグラナダを占領されて以来身動きがとれず戦力の移動も間々なるまい。連邦もコロニー移送に艦隊戦力の大半をつぎ込んでいる。我々の邪魔をするものは何も無い。そこでお集まりの諸君に提案したい、開戦以来戦力低下がいちじるしい新星の攻略を。」

資源用小惑星新星。

東アジア共和国が独自のコロニー開発の為に地球圏までもってきた小惑星のことである。

長らく東アジアの管理下に置かれたが連邦が採掘する鉱物資源に押され、連合に加盟してからは専ら軍事拠点として使用されていた。

現在でも拠点化工事と平行して採掘が行われており少なくない数が連合に送られていた。

この拠点を手に入れられれば防衛だけでなく貴重な資源という面でもプラントにメリットがあった。

が、問題もあつた。

「君の言いたい事は分かる。しかしこれは些か無謀ではないのか？ 縦しんば攻略が成功しても余りにも新星とプラントとの距離は遠い。態々そこまで危険を冒す必要があるのか。」

プラントと新星までの距離は凡そ二十日間、がその間にはL1のデブリ地帯と連合のプトレマイオス基地、そして一番の脅威であるジオン共和国の独立戦部隊と連邦の任務部隊が大きな障害として立ちはだかつていた。

「それについては今からご説明します。連合、ジオンは現在の状況からこの際無視していいでしょう。まず新星に展開する連合軍を排除しその上で新星事態を曳航しプラント防宇宙域まで運びそこで改めて拠点化を行います。問題の連邦の任務部隊ですがこれはMSをもっていない軍など我ら優れた種であるコーディネイターにかかれば物の数ではありません。」

つまりパトリックは遠いならばもってくればいい。そして新たな防壁として改装する案も出ているところを見るとこの作戦に大きな期待をかけている事が見て取れた。

と、同時に彼がここまでこだわるところを見るからに最近のザフトの暴走に彼自身の影響力の低下を懸念して事も含まれているだろう。

そうして、パトリック発案の新星攻略は議論を重ね結果としてザフトに対する指導力を示すというパトリックの声にクライン議長が折れる形でこの作戦は承認された。

第二十六話・希望と野望・（後書き）

う〜ん遅くに更新した影響下文章のグダグダ加減がかなりきてますね。

そうそう、感想の方をなるべくチェックしているのですがこんな遅い時間でも感想を書いてくださる方が居て本当に感謝感激です。皆様の素晴らしいアイデアに触発された最後にちよこつとしたもんを乗っけておきます。

グレートフォート級

全長400mにもなる巨大な陸上戦艦。連邦地上軍の新たな旗艦として建造されビックトレー以上の威力と射程を誇る主砲を三連装砲を前部に二基、後部に二基更に三胴船の様に艦中央部から突き出た船体に主砲を一基ずつ配置しこれは海上航行の際にフロートユニットとしても使われる設計がされ計六基十八門もの主砲を装備している。船体中央に各種ミサイル発射管二十以上、全身に施された無数の対空砲火と共に鉄壁の対空防御能力を持つ。更に艦橋後部に飛行甲板が設けられておりVTOL機能を持つミデアが着陸できる程の大きさと強度を誇りそれ以外にも別途二つの飛行甲板を持ちドラゴン・フライや制空用のコアファイターが八機搭載されている。完成の暁には連邦軍の地上の象徴として君臨する筈であった。

しかし余りにも巨大な船体とそれを支えるホバーユニットには限界がありキャタピラ機構では渡航が出来ないなどと大きな制限があるため長らく開発は難航していた。これを解決するために陸上戦艦では初めてミノフスキークラフトを装備したが初期のミノフスキークラフトでは出力が足りず逆に装置を取り付けたために重量が増すという事態を引き起こしコスト的にもビックトレー級三隻の建造費は高すぎたため結局二隻だけ建造されジャブロー内のドッグで埃を被

り解体を待つ羽目になる。しかしその設計は戦中に開発されたヘビイフォーク級に生かされ本艦の設計の正しさが証明されたといえよう。

まあ、あれです。久しぶりに中二病が出現してこんなもん出してしまいました。連邦軍は長らく地上を支配していたのでこんな船があっても可笑しくは無いと思ひましてビッグトレーとヘビイフォークとの間を繋ぐ感じで書いてみました。ま、縦しんば戦場に出てもあんまり使い道はありそうもありませんがwwww

ちよこつと質問。上記のこれ作中で使っているいいですか？その場合今以上に魔改造されること必至なので連邦無双大好きな人、或いは大艦巨砲主義こそ漢のロマンな方、戦場の神は火力！！な人意外はお勧めしませんので皆様のご意見を感想の方にお寄せ下さい。

第二十七話・エル・アラメイン・（前書き）

前回で宇宙での話は大体終わったのでこれからは地上が中心になるでしょう。といっても連合がザフトに泣かされそのザフトも連邦に押されるといふ奇妙な感じに為りますが・・・。

連邦と連合のガチの殴り合いはもうちょっとお待ちを。あと今回は短いです。

PS：ジャンク屋ギルドの結成話を入れるのを忘れていました。公式年表でも何時結成されたのか詳しく書かれていないのでウツカリをしてしまいました。何れ外伝という形で話を乗っけたと思います。

取り合えず現在のジャンク屋組合ギルドの各組織との関係ですが、

連合・プラント 取り合えず承認。

中立国 同じく承認。一部友好国も。

連邦 非承認。連邦領への立ち入り禁止及びジャンク屋の全ての権利を認めない。

ジオン 同じく非承認。勝手なジャンク回収に対して無警告の攻撃を容認。

火星（マーシャ等）連邦の属国状態の為表向きは判断を保留。しかし裏では技術や資源の取引をしており反連邦、独立運動に備えている。

かねがね原作と同じ状態です。連邦は自分達で非常に高度な組織化されたコロニー公社のデブリ回収業社がありますし秘密主義のジオンが自分達のを勝手にジャンクとして回収されるのは堪らないでしょう。（戦闘後のデブリ回収はジオンの貴重な資源再利用と戦訓の確保及びその流出を防ぐためでもある。）

ま、その内連邦、ジオンでジャンク屋ギルドは海賊認定されるでしょう。

ASTRAY好きの人には申し訳ありませんが、無慈悲な神である連邦は決して自分達の管理下に置かれていないものを容認できるはずもありません。

第二十七話・エル・アラメイン・

- C・E・70 五月三十日 -

先の二十に行われたカサブランカ沖海戦においてザフトは水中用MSグーンを初の実戦投入を行いユーラシア連邦地中海艦隊を壊滅させジブラルタルへと上陸。二十五日には基地の建設を開始しザフトのアフリカでの優位が確立されることとなる。

地中海艦隊を喪失し地中海の制海権を失った連合はアフリカ最後の砦スエズ運河防衛に全力を尽くしモーガン・シュバリエ大尉率いる戦車軍団を派遣。

アレクサンドリア西方100kmの地点にあるエル・アラメイン港にてザフトと一進一退の攻防を繰り返すこととなる。

- エル・アラメイン -

旧世紀においてアフリカを我が物とせんとこの地でアフリカの所有者を決める戦いが行われた。

この地は北アフリカの主要な港のひとつでありここに集積された石油によって北アフリカのエネルギーが賄われているといっても過言ではない。

更にここから東にはアレクサンドリアがその無防備な姿を晒し果てはスエズ運河まで続くその道はこの場所がどれだけ重要化を物語っていた……。

市内に設けられた指揮所でモーガン・シュバリエ大尉は机の上に広げられた地図を睨み考えにふけていた。

ジブラルタルが陥落し地中海艦隊を壊滅した今、欧州からの補給に滞りが出始めている。

これはジブラルタルから侵入したマルコ・モラシム率いるザフト潜水艦隊により少くない数の輸送船が拿捕ないし撃沈され地中海はザフトが手中に収めようとしていた。

そんな中彼の部隊はよく戦っているといえよう。日に日にジブラルタルから送られてくる部隊によって戦力を増強したザフトに対し、補給不足で車両の移動でさえ間々ならない中彼の部隊は数と地の利を生かした戦法でここまでザフトの進撃を阻んでいた。

しかし、それも限界がある。

事実幾つかの戦線で綻びが生まれそこを突破したザフトにより後方を蹂躪されたり、その救援に向かって居る隙を突かれザフトが浸透戦術を行い戦場全体が危機に瀕したりと既に防衛自体が不可能なレベルにまで落ち込んでいる。

それにも拘らず、連合軍上層部は援軍を送らず逆に各戦線から優秀な将兵を引き上げ替わりに新兵を送るなどその対応に前線の兵士達の間では不満が溜まっていった。

彼自身も再三軍司令部からの出頭命令が来ているが、その度に彼是と理由を付けてこれを拒み続け士気の下がった兵士達を鼓舞しながらここまで戦い続けてきた。

だからこそ彼はこれ以上の防衛は絶望的だと悟っていた。

日々のザフトの侵攻で兵は疲弊し彼らが駆る戦車自体も補給と整備が間々ならない状況ではその性能を十分に発揮できずにいた。

これでは恨み言の一つも言いたくなるが部下の手前それを表情には出さず黙々と防衛体制の再構築といざという時の撤退準備を行うことしか出来なかった。

- ザフト軍 -

エル・アラメイン南西五十キロの地点に築かれた野戦陣地にて一人の男が戦場だというのに優雅にコーヒーマシンの香りを楽しんでいた。

「うん、少しブレンドの比率を変えてみたが矢張り前の方がいいな。」

呑気にそんなことを考えつつも彼はジット機の上に広がる地図の一点を見つめていた。

エル・アラメイン

本来ならばとくにアレクサンドリアまで制圧してスエズ攻略に取り掛かっているはずであったが、初期の攻勢の失敗とアフリカ共同体軍との合同作戦も上手く行かず結局ここまでかかってしまった。

そんな中彼事アンドリユー・バルトフェルド率いる部隊は北アフリカ沿岸を電撃的に制圧しつつスエズ運河を目指していた。

だが、そんな彼らにエル・アラメインが立ちはだかった。

エル・アラメインを守る部隊は頑強な抵抗を続け此方に少なくない出血を強いていた。

各戦線で補給が滞っている中、指揮官がよほど優秀なのだろう彼の部隊をして二週間もこの地に釘付けになっているいじょうこの地を守る部隊がどれだけ精強なのかを物語っていた。

「やっかいだねえ。できればこんな手合いとはやり合いたくはなかつたんだが。」

ふとおちやられた風に装いつつもバルトフェルドは体の奥底から漲る闘志を感じていた。

そんな中野戦指揮所ないに赤毛の男が入ってきた。

「失礼します。バルトフェルド隊長。」

だが入ってきて早々彼は部屋中に充満するコーヒーの匂いに思わず鼻を押さえてしまったのは仕方ないだろう。

「隊長。何度言ったら分かるんですか。指揮所に私物を持ち込など兵の士気に関わると。」

生真面目にそういつつも彼自身は内心これで何度目になるかの注意に頭を抱えていた。

「まあまあダコスタ君、そう気張らずどれ君も一杯どうだね？」

そう言つてバルトフェルドは火にかけていたコーヒーポッドからコップにコーヒーを注ぎマーチン・ダコスタに差し出した。

コップから香るコーヒーの芳しい匂いに渋々ながらコップを受け取り内心誤魔化されたと感じつつも、この味は確かだと口を付けながら思っていた。

「どうだね？中々の出来じゃないか。」

そう聞いてくるバルトフェルドに彼は思ったことを告げた。

「そうですね、ちょっと配合を換えたんじゃないですか。私としてはこの前の方が味はよかったですけどこれも香りは良い方じゃないですか。」

バルトフェルドはこの副官も段々分かってきたなと嬉しそうに笑いながら話を現場へと移した。

「で、君が来たということは準備が出来たんだね。」

突然話題を振られたダコスタは慌てて自分がここに来た理由を思い出し、自分の義務を果たした。

「失礼しました。バルトフェルド隊は全機補給を終え何時でも出撃できる状態です。更に我々の侵攻と合わせて各戦線でも大規模な攻勢に出て一気に戦線をスエズまで押し進めるとの事です。」

その報告を聞いて安心した彼はかねてからの作戦通り自身もまた前線に立つため指揮所を後にした。

その彼の後を慌てて副官がついて行くのは御愛嬌だろう。

第二十七話・エル・アラメイン・（後書き）

うーん大体この後はMSVと同じ展開になるんで飛ばしてもいい気がしますが、知らない方もいらっしゃると思うと何だか難しいです。

この戦いが終わってから連邦との戦争が本格化します。今は連邦地上軍前線はフアニーウォー状態でしょうがザフトの攻勢が一通り終わってから本格的に動きます。

実は既にジオン軍は降下済みだったりします。何時降下したか？それは大体次回の話で書こうかと思えます。

第二十八話・重力戦線・（前書き）

今回も説明回です。次こそはザフト地上軍が連合とは比較にならない連邦の地上軍に蹂躪される姿を書きたいです。

今回ギレン様の野望が垣間見えます。やっぱり閣下はどの世界でも閣下であるべきです。

パトリックさんやシーゲルさんギルバートの色男には圧倒的な「悪」が足りませんからね。この作品でも「悪役」としてギレン閣下には色々と動いていただきたいと思います。

第二十八話 - 重力戦線 -

時を少し戻してジオ共和国首都ズムシティにてある重大な極秘会談が行われていた。

U・C・0079 四月八日

「では、連邦は地上でのジオン軍の派遣を望んでいる。ということ
で宜しいですね、兄上。」

キシリア・ザビが探るような目つきで長兄ギレン・ザビに言った。

「うむ。その点は心配いらん。連邦との密約で既に地上での拠点も
手配した。」

ギレン・ザビは事も無げにそう言い放ったが聞くものが聞けば卒倒
するような内容であった。

あの自軍に絶大な信頼を置く連邦が、しかも自分達の最重要拠点で
ある地上に態々他国の拠点を用意するなど、本来ならばありえない
話であった。

しかし連邦議会の議員の中には連邦軍の不甲斐無い結果と政府の初
動の遅さに危機感を覚え、地上に降りたマ・クベらのロビー活動も
ありジオン共和国軍の派兵已む無しという機運が高まっていた。

この情報を見逃さなかったギレン・ザビは早速連邦大使館と連絡を
取り地球連邦議会議員の何名かと接触を持つことに成功した。

そして幾度かの極秘会談の結果ジオン共和国軍は建国以来初の地上軍を持つ事にいったのだ。

これ等の活動は最初はキシリア・ザビー派が行っていたのだが、ギレン・ザビは更に独自ルートを使いキシリアの目がグラナダに向いている隙にまんまと出し抜き連邦との協定を結ぶことに成功した。

そういったことからキシリア・ザビの見る目がきつくなっているのも仕方がないことと言えた。

「しかし兄貴、今の軍に地上に送れる戦力はそう多くはないぞ。本国の防衛を疎かに出来ん以上逆に戦力の分散に繋がるんじゃないか？」

ドズル・ザビが軍の指揮官の立場として派遣される部下の心配と暗に地上軍の指揮権は誰が取るのかと聞いてきた。

「心配はいらん。送るといっても教導団と本国防衛隊から抽出した部隊だけだ。専ら地上での活動は連邦軍MSの教導と地上での運用データ、それに何よりこれは政治的な判断でもある。我が軍の力を地上に示し戦後の主導権を握る。お前も承知しているはずだ。」

そう、別にギレンは善意から地上に軍を派遣しようとしているのではない。

寧ろ連邦を地上に釘付けにし、長期化した戦争によって疲弊した連邦に代わり戦後の地球圏を支配するためにギレンは策を練っていた。

今は同盟関係を結んでいるがもしかしたら連邦と戦っているのはジオン共和国だったかもしれないのだ。

史実においてはハマーン・カーン率いるネオジオンがグリプス戦役で疲弊した連邦に潰け込みダカールを占拠。

更にはブリテン島ダブリンにコロニーを落下させその恐怖を地上の民に植え付け一時期は連邦そのものを支配した。

その彼女と同じ様にギレンもまた、今次大戦を利用し連邦を疲弊させ真の意味でのジオンの覇権確立を狙っていた。

たとえ世界が変わり、ダイクンの教えに疑問を抱こうとも若き野心は変わらない。

ギレン・ザビは自らの強い使命感を持って地球連邦を自分の前に跪かせようと画策していた。

「だが兄貴。連邦はそう簡単には此方の思い道理には動かんど。それに連邦にはあのレベルがいる。あいつが軍の主導を握っている今事を急ぎすぎているんじゃないか。」

ドズルが珍しく理知的なことを言っているように見えるが、彼は外見からは想像できないが一国の軍を率いる見である彼は当然それに見合う洞察力と何よりも政治的思考を兼ね備えていた。

彼本人は否定するが、こうしてジオン共和国がザビ家の私兵集団と言われていない所を見る限り唯の武人という評価はあまりに低いといわざる終えない。

「私もそう思います。兄上は少し急ぎすぎています。今は戦局を様子見しその上で今後の策を練るべきだと思います。」

キシリアもまた地上軍の派遣には難色を示しているように見えるが、内心地上軍の主権をこちら側に引き込もうという魂胆が見え隠れしていた。

「お前達の言いたいことも分かる。だが如何に強大な連邦とて連合とプラントを相手にすれば無理もする。ただ手をこまねいて見ていては折角の機会を棒に振ることになるやも知れん。」

ギレンはそう言ってドズルとキシリアの意見を退けた風に見えるが、家族である彼らには自分達の長兄が連邦の動きさえ折込済みで敢て危険な橋を渡ろうとしているのが見て取れた。

「分かりました。情報部のほうでも人員の選定と各部署との調整に参ります。」

「兄貴がそこまで言うのなら俺は反対せん。一軍人としてジオンの為に戦うのみだ。」

話は終わったばかりに部屋を出て行く二人の後姿を見てギレンは暫し自身の思考へと没頭した。

休戦期間を利用して複数のルートで極秘裏に地球に降り立ったジオン軍は地上軍の指揮権及び連邦軍との折衝を地球通で知られる、マ・

クベ中将に一任した。

並びにジオンの御曹司であるガルマ・ザビ大佐を地上に派遣することにより連邦にたいしてジオンの本気を示していた。

ジオン軍の地球降下の半月前から連邦軍はジオン地上軍の活動拠点としてカーペンタリアを用意した。

これはプラントと開戦によって既に基礎工事が完了していたカーペンタリアを再利用するためという形で連邦が再整備を行ったのだ。

また地球連邦議会の中でもコロニー国家であるジオンは如何にMSをもつていても地上戦では足手まといでありそれよりも後方においてのMSの教練のみに限定すべきだという声があつたためだ。

しかしザフトが投入する様々な環境に適応したMSが上げる戦果とその脅威に晒される前線との間で軋みが生まれ、結局ジオン軍は連邦軍と共同で地上で戦うこととなる。

また地球に降下したことによるジオン本国の戦力低下を補うため連邦に対しジオンのザクをライセンス生産する事が認められ以後連邦でザニーの愛称で知られるこのMSは多くのMSパイロットを育てることとなる。

コロニー国家と地球上の国家。方々連合とプラント、方々連邦とジオン。

互いに似た立場である彼らは、しかし互いに異なる立場において其々が戦いまた同盟して戦乱の時代を駆け巡る。

第二十八話・重力戦線・（後書き）

ジオンと連邦の共闘！！キタコレ。

やっと、やっとこの小説でやりたかったことのひとつが出来ました。

いや〜長かったようなそうでもなかったような。取り合えず連合、ザフト合唱。

この世界では地上の主力は専らデザート・ザクになるのではないかと妄想しています。

ああ早く砂漠の英雄ロンメルとゲリラ屋のランバ・ラル、ノイエビッター少将とかの夢のドリーム軍団がアフリカの大地で戦う姿を書きたいです。

各勢力別国力 ネタ（前書き）

ちよつと地上戦の描写で手間取っているので（あんまり一方的過ぎるとザフトが消耗しすぎるので）息抜きに乗せておきます。

完全にネタです。没です。適当です。作中の軍事力がこの通りとは限りません。

某ギレン風に書いてはいますが、作者は戦略ゲーは苦手です。

各勢力別国力 ネタ

某ギレンの野望風各勢力パラメーター（C・U・0079二月現在）

地球連邦軍 180 / 400（現在配備ユニット数と最高配備ユニット数）

収入 20000
生産 31000

基礎技術 LV 8 / 30 MS 15 MA 0
MS 技術 LV 2 / 30 車両 35 航空 50
MA 技術 LV 1 / 30 航宙 30 艦船 50
敵性技術 LV 2 / 30

特性：大統領補正により開戦より20ターンは兵器生産禁止&全部隊の指揮 - 20。エイプリル・フル・クライシス発生後中立国支援のために毎ターン総収入、総生産の5%を払う。（中立国との友好度が毎ターン上昇）

ジオン共和国軍 118 / 250

収入 6400
生産 5670

基礎技術 LV 3 / 30 MS 48 MA 0
MS 技術 LV 3 / 30 車両 10 航空 8
MA 技術 LV 2 / 30 航宙 22 艦船 30

敵性技術LV2/30

特性：連邦とのレンドリースで10ターン毎に資源+5000（友好度によって増減）MSのライセンス生産を認めることにより20ターン毎に資金+5000。

地球連合軍 220/300

収入12000

生産11050

基礎技術LV5/20

MS0

MA60

MS技術LV1/20

車両40

航空50

MA技術LV3/20

航空20

艦船40

敵性技術LV1/20

特性：ブルーコスモスを浸透させることによって前線の士気+25、疲労度40%アップ、拠点での回復効果半減。連続生産でのボーナス資金、資源共に5%補正。モルゲンレーテとの極秘技術提携によって各種技術LV+1。イベントで核装備メビウス15機配備。

ザフト 100/200

収入5400

生産3200

基礎技術LV3/20

MS60

MA0

MS技術LV4/20

車両0

航空0

MA 技術 LV 1 / 2 0 航宙 5 艦船 3 5
敵性技術 LV 2 / 2 0

特性：部隊の士気毎ターン5% up。速攻効果で疲労、耐久の90%回復、損傷部隊の補充資金資源5% up。撤退及び敗北すると士気-50%効果。コーデイネイター補正によりユニットの限界値、運動性能に+補正、指揮効果を受けられない。攻略作戦プラン無しで拠点攻略可能（本拠地攻略は攻略作戦発動が必須。）侵入での攻略可能。

あと、適当

オーブ連合首長国 4 5 / 1 0 0

収入 2 8 0 0
生産 1 0 0 0

基礎技術 LV 3 / 2 0	MS 0	MA 0
MS 技術 LV 2 / 2 0	車両 8	航空 2 2
MA 技術 LV 0 / 2 0	航宙 0	艦船 1 5
敵性技術 LV 1 / 2 0		

特性：モルゲンレーテ社により各技術投資20% OFF及び開発期間縮小と資金5% OFF（オーブ製兵器に限る）

その他中立国 e t c

各勢力別国力 ネタ（後書き）

適当にゲームにはない各陣営の特性みたいなのを乗っけました。連邦は耐久ゲー、序盤を如何に凌ぐかが重要。ジオンはユルゲー、連邦との関係をわざと悪化させての縛りプレイが基本かも。連合は核待ちの原作基準。ザフトは速攻、でもイベント関係で侵攻が後れる可能性大。AAイベントで選択によってはパイロットの大量離脱 or 戦死が発生。オーブは外交頑張って下さい。

早くガンダムSEEDを舞台にしたTBSがやりたいです。

第二十九話 - 侵略準備 - (前書き)

今回は準備話です。でもってジオンチートです。連邦も微チートかも。

情報戦は技術と蓄積年数、人員と装備の優劣。あとスネークさえ居れば完璧です。

第二十九話 - 侵略準備 -

C・E・70 六月五日

エル・アラメインの戦いに勝利したザフトはその勢いを駆り防衛線を突破しスエズ運河をその掌中に収めた。

アフリカ共同体は長年の悲願であったスエズ奪回と国土から連合の勢力を排除したことにより歓喜に震え、ザフトもまた地上に来て負け無しの進軍は振るわぬザフト宇宙軍とは対照的に隊員たちは皆樂觀的な笑みを浮かべていた。

- このまま行けば自分たちの圧倒的勝利に終ると。 -

スエズ奪還を目指した紅海艦隊はマルコ・モラシム率いるザフト潜水艦隊により海中に没し、事地球においては地上、空、海中において連合相手にザフトに敵は居なかったことは事実であった。

しかし彼らのトップ、プラント評議会議員等は事態をそう樂觀視する事が出来ずにいた。

そもそもザフトの地球降下作戦の主要目的は、

1. 地球連合のマスドライバー施設を奪取又は破壊することによって親プラント国家との通商路の確立と地球連合の疲弊を誘う。
2. 破壊されたユニウスセブンに代わり必要になった食料を地球から賄う。
3. 地球で”迫害され” 虐げられている”同胞を” 救うため” 地球に住むコーディネイターをプラントに”移住させ” もって地球と宇宙との棲み分けを図る。

コーディネイター

3. 地球で”迫害され” 虐げられている”同胞を” 救うため” 地球に住むコーディネイターをプラントに”移住させ” もって地球と宇宙との棲み分けを図る。

当初の予定通りアフリカのマスドライバー、バビリスを奪取し新プラント国家であるアフリカ共同体との連携も確保した。

しかし、地球から宇宙に、宇宙から地球にへと重要な物資人員の運搬施設であるバビリスが連合により徹底的に破壊されアフリカ共同体からの食料輸出が滞っていること。

地上の宇宙空港が破壊されたため十分な補給物資が集積できず、危険な地球軌道上に補給物資投下艦隊が足止めを食らっていること。

更には当初優勢であったザフト宇宙軍がジオン共和国との戦闘で疲弊し思うように制宙権の安全性が図れないこと。

大きく分けて現在プラントは上の三つの問題を抱えていた。

もし仮に連合だけが相手であれば、中立国や連邦ジオンなど複数の輸入ルートを使ってプラントの食糧事情を解決し、後背の安全性が図られていれば予定よりも早くオペレーション・ウロボロスを完遂できジオンに続いて二番目の独立コロニー国家が誕生しただろう。

当面のプラントは一刻も早く地球間航路を復旧させ、プラントの食料事情改善と地上部隊との連絡確保に心血注ぐこととなる。

しかし、史上まれに見る巨大建造物であるマスドライバーの復旧作業は技術に優れたプラントといえども困難を極め、アフリカ共同体との支援も受けてはいるがそれとて余裕が無い前線から掻き集めた物資だけではとても間に合うものではなかった。

せめてもの救いは連合が仕掛けた自爆装置全ての解体が完了し復旧

作業員が安全に作業が出来、自爆の被害を受けなかった航空基地と周辺基地施設が使えることであった。

こんな中、ザフト前線将兵の間にはある作戦が真剣に議論されることとなる。

それは - 地球連邦軍の打ち上げ施設を奪取する - というものであった。

地球連邦は連合やオーブのような大規模なマスドライバー施設を余り保有せず、各地に分散した打ち上げ施設で地球と宇宙との交通を行っていた。

その為、各地に分散した打ち上げ施設の警備は薄く少数のMSでも制圧出来るのでは？と前線の部隊は考えていた。

奇しくも連合との地上戦はザフト優位に進み前線には余裕が生まれており、南アフリカに送り込める十分な量の部隊が確保できていた。

ザフト地上軍司令部は前線から上げられてきたこの作戦を吟味し、マスドライバーが復旧するまでという期間制限とアフリカ共同体と共同で作戦を行うことで許可した。

アフリカ共同体は成立期から絶えず連邦領への進出を狙っていた。

連邦領南アフリカは北アフリカと違い、火星で培ったテラフォーミング技術により旧世紀以来警告されていたアフリカの自然破壊を食い止め地球有数の自然資源豊かな土地へと生まれ変わった。

更に、地球連邦は母なる守るべき地球のシンボルとして連邦の重要

施設をアフリカに建設し、特にダカールは戦争が無ければ地球連邦議事堂の移転地候補にさえ上がっていた。

自分達よりも豊かな土地、暮らし、ゲリラに怯える事の無い日々、それらの誘惑から世界中からは連邦領への移民者が増加し隣国であるアフリカ共同体にとっても無視できない現象であった。

事実国内の優秀な人材は国を出て皆連合か多くは連邦へと職を求めていった。

豊富な資源、優秀な人材、地球圏経済の一角、これほどの土地をアフリカ共同体が欲しくない筈がなかった。

ザフトとしてはアフリカ共同体軍を動かせればそれだけで作戦の成功率は上がり、占領地の維持など後方任務に当てることでアフリカ共同体との分業を図ったのだ。

この話を持ち込まれたアフリカ共同体はザフトが思った以上に話に食いついた。いや食いつきすぎた。

アフリカ共同体は作戦に国内に残った軍を全て総動員してザフトの支援に当たるといつてきたのだ。

流星のザフトもこれには面食らい、協議の結果アフリカ共同体の顔を立てるといふ形で予定よりも多くの部隊を作戦に投入する事となった。

思わぬ形で大規模な作戦を行うことになったザフト地上軍は本国に追加の増援と軌道衛星上からの支援を要請。

プラント評議会は地上軍の指揮を現地指揮官に一任しており要求どおり追加のMSとパイロット及び必要物資等の補充を行った。

だが、ここで問題が発生した。

連日の作戦会議で何時に無く乗りきのアフリカ共同体軍と旧連合軍出身のザフト指揮官とで大まかな作戦プランは決まり後はどこが主導を握るかという問題であったが・・・

これが大いにもめた。

と言うのも、降下したザフト地上軍は所詮は民兵、モラルや統制と言ったものから程遠い存在であった。

その為占領地での略奪行為や捕虜の虐殺など後を断たなかった。

友軍でさえ眉を顰めるその蛮行は、プラント特有のコーディネイター至上主義の弊害と言えた。

事実彼らは友軍であるアフリカ共同体と度々衝突し現地軍人や市民の間に不満が溜まっていた。

無論良識あるザフト部隊長や指揮官などは率先して隊の規律や軍の統制を図り一応の事態の収縮を見ていたが、しかしザフトと市民との間に大きな溝ができたことは事実であった。

軍としての機能に問題があるザフトの指揮に従いたくないアフリカ共同体軍。虎の子のMSを素人の下手で失いたくないという意見とザフト地上軍の一部部隊のナチュラルの指示に従いたくないと言う本音とが混ざり合い結局のところ指揮権はそれぞれの軍が保

有するということで一応の決着を見た。

ザフト地上軍、アフリカ共同体両軍は一見すると共同で作戦に当たる格好を示してはいるが内面は其々の部隊がなんら統一性や連携を考慮されておらず更に会議の一軒とあるザフト指揮官が不用意に発した一言で両軍の関係は好ましいと言えず互いに互いを「後ろから撃たれないだけの存在。」と揶揄し作戦開始前から部隊内で不協和音を奏でていた。

ザフト侵攻準備という情報を入手した地球連邦情報部及びジオン情報部は其々の観点から情報を収集整理し敵の目的が連邦領にある複数個所の打ち上げ施設であること。更には参加する人員と装備、軍の規模と侵攻予想ルート、大まかな日時までも割り出しザフトの作戦は連邦とジオンに筒抜けであった。

地球連邦は長年培われてきた諜報技術、人材、装備によって情報体制の甘いプラントを圧倒しジオンもまた女傑キシリア・ザビ直属の特別顧問団通称キシリア機関と連携更にマ・クベ中將が地球降下当初より築いた情報網は時に連邦よりも先んずる事もあった。

本格的な地上戦に連邦ジオンは悟られぬ様防衛の準備をはじめジャブローから送られてきた貴重なMSや戦訓獲得を目的としたガルマ・ザビ大佐やノイエン・ビッター大佐等が率いるジオン地上軍も参加し強固な防衛ラインを築いた。

両者の機密は徹底しており、連合にも気付かれないよう補給は極秘裏にジャブローを出発した潜水艦隊やミデアによる危険な夜間飛行

等で戦力の増強を行った。

更にマ・クベ中將はザフト、アフリカ共同体との不和を見抜きアフリカに潜伏する反体制派やゲリラを煽り時にブルーコスモスにさえ極秘裏に武器の支援をして後方攪乱とザフトとアフリカ共同体との分断を図った。

無論それと平行してジオンシンパを増やすというキシリア・ザビから仰せつかった指示も忘れないあたり彼の強かさが垣間見える。

着実に防衛体制を整える連邦、ジオンに対し溝を埋められずにいた。

果たしてザフト・アフリカ共同体連合軍は連邦の強固な防衛ラインを突破し宇宙への活路を掴み取れるのか？

プラントの明日はどっちだ！！

第三十話・アフリカ侵攻作戦1 - (前書き)

ザフトとアフリカ共同体が初めて連邦に対して大規模攻勢に出ます。迎え撃つ連邦、ジオンは準備万端防衛体制を整え今か今かと手薬煉引いています。

果たしてザフトは連邦の強固な防衛網を突破できるのか？ザフトの運命を決める戦いが始まるうとしていた・・・。

第三十話・アフリカ侵攻作戦1 -

C・E・70 六月十九日 5:00

太陽がまだ昇りきらない時間に国境から五十キロの地点に集結したザフト、アフリカ共同体連合は時間と同時にアフリカ中部旧コンゴ国境へ向け侵攻を開始した。

上空ではアフリカ共同体空軍機が幾筋もの尾を空に引きながら連邦の領空へと侵入していく。

まず口火を切ったのは後方に控えていた火力支援部隊であった。

アフリカ共同体が保有する重砲、野戦砲、自走砲大隊、MLRS大隊と足の遅いザウト更にスエズ攻略戦で鹵獲した連合軍自走砲などありとあらゆる火力が国境に降り注ぎ暫し舞い上がる砂埃で戦場が見えなくなるほどであった。

国境を一番最初に突破したのはザフトが誇る地上戦最強のMSバクウであった。

四速歩行による高い地形走破性、機動性、安定性を持ちふくらはぎの部分に装備された無限軌道とで本機は連合の機甲兵力を圧倒した。今回もまた、高い機動性と各種ミサイルポッド、レールガンの圧倒的火力により一気に連邦の戦線を突破し蹂躪するはずであった。

が、バクウが国境線を越え姿を見せた途端連邦からの盛大な歓迎を全身に受けることとなった。

巧妙に隠蔽され強固な防衛陣地に寄ってひたすら砲撃に耐えていた連邦は今までの鬱憤を晴らす如く圧倒的火力をザフト侵攻部隊に浴びせかけた。

この時活躍したのがエイガー少尉率いる第三十三特殊重駆逐大隊であった。

エイガー少尉は連邦屈指の砲術のエキスパートであり自身が開発に携わった砲撃MSガンキャノン四機に加えジャブローから送られてきたガンタンク初期型三機、量産型が七機、これに自走砲二十両、各種大小の野砲と護衛の六一式戦車十二両を加え部隊間の通信を行う通信車両と砲撃の支援をするための観測車両等を加え総勢二千五百名ばかりの兵が彼に与えられていた。

一介の少尉にしてはこれ以上はないと言うほどの装備と人員を与えられており上層部の彼にかかる期待の大きさが見て取れると同時に連邦においても今だMSの集中投入におけるノウハウの蓄積がなされておらず砲術の専門家であると同時にMS開発も任されているエイガー少尉に臨時に部隊を編成その指揮を任せ実戦での連邦MSの戦訓獲得を目論んでもいた。

兎に角エイガー少尉は上層部の期待に十分答え今までその進撃を止めることさえ出来なかったバクウの足を止める処か火力の集中運用と高度な索敵射撃観測による高い命中率は実際の戦果以上にザフト軍に心理的圧迫感を与えていた。

味方のMSが撃破されずとも自分達の周囲に次々と打ち込まれる砲弾はそれだけでもどんな屈強なパイロットであっても精神を疲労させ、更に苛烈な砲撃で前進出来なく動かなければ撃破されてしまう

と言つジレンマが益々彼らの精神を疲弊させた。

ザフト地上軍司令部は前線に突出した形になつた友軍を救うため援軍のMSを派遣し別働隊を編成戦場を迂回させる指示を与えつつもアフリカ共同軍に敵火点にたいして徹底的な砲撃と爆撃を要請し要請を受けてから三十分後攻撃により判明した敵火点に対してザウート隊と共にアフリカ共同軍の砲撃が降り注ぐ。

それと同時にアフリカ共同空軍の攻撃機部隊が戦場後方の連邦野戦砲陣地に向け飛び立っていった。

同じ頃アフリカ中部上空では熾烈な制空権争いが続いていた。

質、数に劣るアフリカ共同空軍はザフトのデインの援護のおかげで何とか五分の戦いに持ち込めていたが、それは逆に今次作戦における貴重なMSを長時間拘束されることを意味していた。

連合との戦争で消耗していた空軍であつたが、今次作戦にあわせ各航空基地からなけなしの戦力を集めそれでも足りない戦力をザフトの支援を受けることで何とか帳尻を合わせているのが現状であつた。逆に連邦空軍はアフリカ中部だけでも五百機を越える航空部隊を配置しており一回の出撃のたびに部隊を交替させ部隊の消耗抑制と制空権の維持に当っていた。

更に、戦場後方には常時空中管制機二機が展開し戦場全体を見張り航空管制や航空部隊の指揮を行っていた。それ以外にもジオン軍のガウ攻撃空母が少数だが後方に展開し出撃のその時を待っていた。

デイン対策に対しては現状で量産が始まつたばかりのセイバーフィ

ツシュしか対抗手段がなく専ら連合と同じ様に遠距離からのミサイル攻撃による一撃離脱を行うしかなかった。

ザフト軍も連合との戦いを潜り抜けた猛者達はそうそうミサイルに当たる事はなかったが、中々距離を詰めてこない連邦軍に対して打つ手がなくそれだけ見れば千日手状態であった。

しかしこの戦場にいるのは彼らだけではなく本来友軍である筈のアフリカ共同体空軍は度重なる出撃で早くもその戦力をすり減らしつつあった。

ザフトはディンを前に出すことにより少しでも被害を減らそうと努力したが、指揮系統が分けられていた為如何しても指示の遅れが生じてしまい余り効果を示す事が出来なかったのだ。

- ザフト地上軍司令部 -

攻略戦にあわせ本国から送られてきた地上侵攻用兵器大型陸上戦艦レセップス級で指揮を取る「砂漠の虎」ことアンドリユー・バルトフェルドは地図上の戦力配置と味方から送られてくる通信とで自軍の不利を悟っていた。

「ダコスタ君、艦を二十キロばかり前進させるぞ。」

「はい？隊長何を言っているんです！！危険ですよ。それに本艦は後方での待機を命じられていますし……。」

バルトフェルドの副官であるマーチン・ダコスタは素っ頓狂な声を

上げながら上官を思いとどまらせようと言葉を口にしているが。

「といつても、このままじゃ幾らたつても前線を突破できない。空の連中も苦戦しているようだし今は少しでも戦力が欲しい。なぐに、心配は要らないよ、ちょっと前に出て味方を支援するだけだから。」

なんでもない風に陽気な口調で指示を出すバルトフェルドに渋々ながらダコスタは同意せざる終えなかった。

三十分ほど前からアフリカ共同体と自軍のザウート部隊とが連邦軍火点に攻撃を集中しているが強固な野戦陣地に阻まれ思うように効果が望めず、逆にこっちの位置を割られて反撃を受けて被害を出す始末だ。

このままでは悪戯に消耗するばかりで目的を達成することは不可能に近かった。

「分かりましたよ。これより当艦は前進し味方の支援に向かいます。僚艦にも通達、機関の最大戦速！！それと各部隊にも支援に向かうとの連絡を入れる。」

ダコスタは結局折れることになるがそれでも一応副官と言う立場上、上官に釘を刺すことを忘れない。

「言つときますけど危なくなったら直後退させますからね。また何時もみたいな無茶はしないでくださいよ。」

と、若干呆れ半分に言われたバルトフェルドは肩を竦め

「ヤレヤレ、まだまだ硬いねえ。」

と首を横に振って言った。

・地球連邦軍ミニトレー・

連邦軍が誇る陸上戦艦ビッグ・トレー級を二回りほど小さくしたそれでも大型と言える陸上車両が前線から僅かばかり離れた後方で戦場を見守っていた。

無論艦橋の中では忙しく動く艦橋スタッフと刻一刻と変化する状況に対応するために矢継ぎ早に司令官が指示を出し戦場特有の熱気に包まれていた。

「司令、現在ザフト及びアフリカ共同体軍は前線から凡そ二十キロの地点で侵攻を停止し目下我が軍の十字砲火の中にあります。」

「うむ、予定通りだな。しかし凄まじいなMSの威力は。」

艦橋の椅子に座る司令官は目を細めながら渋々といった。

「はい、特にエイガー少尉率いる重駆逐大隊は凄まじい戦果を上げています。特に彼らのおかげで厄介なMSの動きを封じる事が出来たのが一番大きいでしょう。」

副官は司令官の言葉を自軍のそれに向けたものだと思い、エイガー少尉らの事を言った。

「無論彼らの活躍は聞き及んでいる。しかしそれは従来兵器の延長

線上ではない。寧ろ私はザフトMSの方を評価すべきだと思う。」
司令官の意外な一言に副官は暫し面食らったが次の言葉を聞いて納得した。

「報告によるとザフトMSは重砲の一撃に耐えあれだけ熾烈な砲撃の中でも十分な戦闘力を維持している。加えてあれだけの巨体にも関わらず優れた機動性を発揮している。実際幾つか防備の薄い所を突破されかかったしな。」

確かにエイガー少尉率いる大隊は別として、ザフトMSは連邦軍が保有する通常兵器では撃破が難しく良くて行動を不能にする程度しかなく一見すると連邦軍が有利に見えるがザフトMSはまだ十分な戦闘力を保有していると言えた。

「まあ、だからといって負けてやるわけには行かないからな。頃合だろうと予定通り部隊を後退させる。それと本艦も移動す、車掌指揮を頼む。」

司令官は部隊に指示を出した後ジツト戦術モニターを見つめていたが頭の中では想像以上のMSの性能に如何に対抗するか方策を練っていた。

第三十話・アフリカ侵攻作戦1 - (後書き)

次回当たり個別の戦場の兵士達や指揮官に焦点を当てて会話を増やしたいと思います。

どうも私の書き方は説明が中心で人物を動かすのが苦手です(涙

第三十一話・アフリカ侵攻作戦2 - (前書き)

今回はジオン側を中心に書いてみました。でもやっぱり会話は少ない(涙)

第三十一話・アフリカ侵攻作戦2 -

アフリカ中央部での戦闘が激化する中、戦場を遠く離れた渓谷に数機のMSが互いに警戒しながら進んでいった。

「隊長、本当にここを通れば連邦の裏側に出れるんですか？」

MSの大地を踏締める振動の影響で若干モニターのノイズが激しくなる中、部下の一人がそう疑問を示した。

「情報通りなら、ここを突破すれば連邦の裏側に出れる。あともう少しの辛抱だ、我慢しろ。」

そういいながらも彼らは彼是30分以上の間、戦場を離れ味方が戦っている中ここだけがまるで何事も無い道無き道を通っているのだ。

彼らが不満に思ったり暇を持て余すのも無理は無い。

「ですが隊長、私にはその情報もどうも信用なら無いんですわ。だってそうでしょう、反連邦ゲリラなんてそうそう信用していいもんじゃあない。」

彼らが今渓谷を進んでいるのは、作戦計画のさい現地民を使えないかということに幾つかのゲリラ集団と接触を持ったのだが、彼らに見れば連邦も、連合も、プラントも関係なく自分達の敵という訳で手荒い歓迎を受ける事となった。

そんな中、マブリブ解放戦線と名乗る武装集団がザフトに協力して

この溪谷の情報を流したのだ。

情報分析の結果、極めて高い精度の情報である事が確認されたが地上に来て手荒い歓迎を受け続けたザフトは中々信用したからなかった。

無論、アフリカ共同体と情報の真偽を図るなど出来るはずがない。何故なら彼らにとってもゲリラは敵なのだから。

だが、現に彼らは少数とはいえこうしてそのゲリラの情報に従って溪谷を進んでいた。

そんな彼らを荒涼たる風景と見上げた蒼い空と太陽だけが彼らを見ていたわけではない。

ジオン軍が使用するジープの上で立ちながら、スコープを覗くノイエン・ビッター大佐は情報通りザフトのMS隊が溪谷を進んでいるのを確認した。

その後ろでは数機のザクが片膝を付いた状態で待機しており、ザフトMS隊がここに来ることを分かっていたようだ。

何故彼らがザフトMS隊の情報を掴めたかという点、そもそもジオン共和国地上軍最高司令官マ・クベ中將は南極条約の折から地球各地に点在するゲリラや反連合勢力と接触を行っていた。

そして、今回もまたザフトの戦力を削るため敢て反連邦ゲリラに近

づき武器や一部物資を融通する代わりにザフトMS隊を誘き寄せ、
為のニセ情報を流させたのだ。

この他にも、アフリカ共同体内の現地ゲリラの手引きを受け、ラン
バ・ラル隊や複数の部隊が潜入しザフト、共同体の侵攻と同時にゲ
リラ活動を行うこととなっていた。

ジオン地上軍はザフト地上軍と比べMSの質こそ同等であるが、数
では大きく遅れを取っていた。

これは地球連邦軍に対する配慮と政治的理由であり、事実ザフトは
MSを二百機ほど地上に降ろしているにも関わらず、ジオンは八十
機とごく少数であった。

それでも貴重な戦力であるMSを温存する訳にはいかず、連邦軍と
共に防衛線を守るMS以外は、熟練の指揮官らに率いられてのゲリ
ラ戦や奇襲などでザフトに対抗しようとしていた。

「数は五機、いや六機か。思った以上に少ないな。」

ノイエン・ビッター大佐はかかった獲物が予想よりも少ない事に少
しだけ残念そうに呟きながらも通信機を片手に持って部下たちへ指
示を出した。

「敵はジン六機だ。数は少ないがだからと言って油断はするな。作
戦通りに遣ればいい。後の事は現地の指揮官に一任する、以上。」

と、短く指示を出し終える合間に起動準備を終えたザク達が緑色の
巨体を揺るがし、バーニアを吹かしながら渓谷へと飛び上がった。
った。

一方、アフリカ共同体領内では無事潜入を果たしたジオン軍ゲリラ部隊が活動を開始していた。

「ラル大尉、情報通り共同体軍のコンボイを発見しました。数は凡そ三十、結構大規模ですな。」

クランプが連邦製のスコープを覗きながら、砂塵を巻き上げ猛然と進むコンボイを視界に納めながらいった。

「よし、久しぶりの地上だからな。皆腕は鈍っていないだろうな。」

「任せてください、ラル大尉。みな再び貴方の元で戦えるのを待っていたのですから。」

ラル大尉は部下からの頼もしい返事を聞きながら自身の愛機へと乗り込んでいく。

彼らは砂漠の中にある中規模のクレーターにキャンプを張り、その他にも幾つかの拠点を設置しゲリラ活動に従事していた。

クランプが偵察を終え、砂丘を滑り降りて来るのを確認しながらその下でランバ・ラル隊のMSが

トレーラーに乗せられた、仰向けに寝かされたMS-06J陸戦型ザク?は彼のパーソナルカラーである青色に塗装され彼専用にはユニングが施された機体に取り込み部下たちと共にコンボイへと強

襲を掛けていった。

アフリカ共同体にとってはそれは悲劇以外の何者でもなかった。

砂漠の大地を、長い列を作って走っていたコンボイはジオンゲリラ部隊の格好の的ではなかった。

ランバ・ラル隊のアコース少尉のザクが手に持つバズーカを戦闘を走る車両に叩き込み、それを合図にして砂丘の陰から次々とジオンのキュイやワツパが飛び出しコンボイへと攻撃を仕掛けていった。

「さあて、狩りの時間だ。かかれえ！！」

突如としてMSに強襲を掛けられたコンボイは慌てふためき満足な反撃も退避も間々ならず次々とMSやゲリラ部隊に蹂躪されていた。

比較的后方に位置していたコンボイも、先頭で起こった混乱を確認する暇も無くバズーカを叩き込まれコンボイは地上で立ち往生することとなってしまったのだ。

キュイがその特徴的な車体でコンボイに迫り、ワツパが低空を駆け巡り戦線を攪乱し、MSが次々と護衛の車両を破壊していく。

ものの三十分もしない内にコンボイは壊滅し、アフリカ共同体の侵攻作戦に大きな遅れを齎す事となる。

- アフリカ中部 -

エイガー少尉は高台でホバー・トラックの車内で砲撃指揮を取っていた。

大砲屋である彼が何故自身が開発に携わったMSや本職である自走砲などに乗り込んで指揮しないかと言うと、それらの機体では揮下の部隊を指揮する事が出来ないからである。

彼が乗るホバートラックは、元々は都市部や山岳地帯での対ゲリラ様に開発がされたもので武装こそ20mmバルカン砲一門と少ないものの名前の通りホバー走行による高い機動性と地形を選ばないという事で戦前から各地で配備が進められていた。

しかしMSが登場する時代になると、このホバー・トラックは新たな任務を与えられる事となる。MSはNJやミノフスキー粒子下での運用を基本とするが、そのため従来の索敵、通信機器では十分な支援が出来ない事が判明した。

これを解決するために、幾つかの試作品が作られた中で高い生産性と通信、索敵性能更にはMSの行軍に追従できる地形を選ばない機動性とで本機の改修案が出されミノフスキー粒子下でも運用をに対応するために改修を施され74式ホバー・トラックとしてMSを装備する部隊に優先的に配備されていった。

そんなことでエイガー少尉もまたホバートラックに乗り込み、今現在後退を始めている前線の支援を行っていた。

「少尉殿!!!前線で一部部隊が取り残されていると言うことです。」

本部から支援砲撃要請が出されています。」

「今全力を上げて味方の後退支援を行っている所だ！そんな余裕は無い。前線にはもう少し耐えてくれと連絡してくれ。」

エイガー少尉らは前線から送られてくる支援要請を捌きつつも、それでも尚余裕が無い状態であった。

無論彼ら以外にも火力支援部隊はいるが、ザフトMSにとって有効打となる兵器を保有しているのはエイガー少尉の部隊しかいなかった。

これは連邦の兵器の威力と言うよりも、ザフトも又ジオンと同じ様にジンを地上戦用に改良を施しており、正面装甲が分厚くなっている為だ。

更に、後方に待機していたレセップス級大型陸上戦艦が前線に現われて40cm砲で攻撃してくる中、防衛ラインに綻びが生まれかかっていた。

この陸上戦艦に対抗するのにアフリカに配備されているミニトレーでは分が悪く、唯一対抗できるのはビック・トレークラスしかないが生憎と他の戦線に持って行かれていく為手詰まりの状態であった。レセップスの砲撃支援により戦線を越えたバクウを何とか撃退しつつも、前線では今だ降り注ぐ艦砲射撃により後退ができない状態が続いていた。

第三十一話・アフリカ侵攻作戦2 - (後書き)

少しアンケートを。グフ、陸戦型ザク？G型ってもう出していいですかね？

私の考えでは今現在バクウと戦って勝てるMSはジオンには無いと思っただけで、ちょっと悩んでいるんです。一応ドムは出すつもりなんですが、その間を埋める感じで史実よりも早く上記のMSとかイフリートなんかを出したいと思っただけなんです。好いでしょっか？

感想の方にお書き下さるとありがたいです。

第三十二話・戦場を離れて・・・

・ジャブロー・

南米に築かれた地球連邦最大の総司令部が置かれる最大の拠点にして地球連邦軍の象徴。

しかし、その本部の存在は隠匿されまた南米と言う広大な大陸とジヤングルとで建設以来外部のものが総司令部まで辿りつけた者はいない。

そもそもジャブローという名称自体も怪しいものだ。

と言うのも、ジャブローとは地球連邦全軍を指揮し地球宇宙を問わず史上最大の軍事力を効率よく運用するために作られたものだがそれは運営する組織を指す物なのか又はその場所の名称なのかはたまたそれらを統合しての名称なのかさえ今となつてはここジャブロージャブローのモグラにいる高官でさえ分からなかった。

南米の地下深く核の直撃にさえ耐えるの鍾乳洞の奥地に建設された人工物。

基地を建設するさいの拡張工事で崩落しないよう施設その物を支えとして巨大な支柱に設けられた司令部の中の会議室の一室で地球連邦を運営する組織の重鎮たちが集まっていた。

円卓に座る地球連邦を良くも悪くも動かし続けた者達がアフリカ戦

線でのことについて話し合っていた。

しかし、その会話は純軍事的なものと言うよりも、戦争は政治の延長でありそれを利用して如何に自分達の利益にするのかという一癖も二癖もある者達がするそれであった。

「さて、漸く此方も重い腰を上げられそうですね。」

「いやいや、全く持ってそうですね。今回のザフトとアフリカ共同体の侵攻は明らかに侵略の意図を持っている。つまりは頑迷な構成国を動かすだけの格好の材料と言う訳ですね。」

地球連邦は開戦以来積極的な行動を取ってこなかった理由の一つに構成国の問題があつたのだ。

一言で言ってしまうえば危機感の違いであった。

地球は宇宙と違い、極少数の紛争や国境問題などがあるがしかし緊迫する宇宙とは違い比較的安定していたのだ。

地球連邦の基管理統治されていた構成国は宇宙のコロニー国家に比べ、その安定した統治と経済的な繁栄、更には地球連邦軍という史上最大の軍隊に守られているという保障の基今まで平穩無事に暮らしていたのだ。

開戦当初の際も、地球に住む市民等は宇宙に住むスペースノイド達とは違い身近に自身の生命や生活の危機と言うものを感じ難かった事もある。

それだけ地球と宇宙との間には実際の距離以上にも果てしない溝が

あつたのだ。

更にN Jが地球に打ち込まれた際にも、地球連邦が保有していた核融合炉によってエネルギー不足を回避した地球は逆に他国に援助を行うだけの余裕さえ持っていた。

つまり、地球に住む者達は自分達の直傍まで近づくまで戦争と言うものを実感出来ずにいたのだ。

だがザフト地上軍がアフリカで前面攻勢に出たことよって漸く地球に住むものたちは戦争と言うものが自分達とは全く関係ないとは言えなくなつたのだ。

「しかし今回は随分と綱渡りでしたぞ。もし情報部が侵攻計画を手していなければ消極的な構成国ではザフトの侵略を防ぎ切れませんんだ。もう少し穏便に事を運ぶ事が出来たのではないですか？」

「嫌々、平和ボケした市民にはこれ位が丁度いい刺激ですよ。これで地球市民も積極的アースノイドに戦争に協力してくれることでしょう。」

「ええ、ええ。如何に連邦のその生産力の半分以上が宇宙であるとはいえ地球での戦いは矢張り構成国の協力を得られれば今後の戦いもスムーズに行きますしね。」

「それに今回の戦争で地球の経済が活性化すれば近年躍進甚だしい宇宙経済に対して対抗もできますし。」

彼等は前線で戦う将兵のことなどまるで関心がないかのように自分達にとって都合が良い方向に向かう戦争にたいして非常に満足して

いた。

だが、その中で一人軍服を身に纏ったゴツプ大将だけがそれを冷やかな視線で見ている。

「全く、老害どもめ。戦争をコントロールしよう等とそんな考えが
実戦では通用するはずがない。戦争は経済的、政治的、摩擦で起こ
るものではない。無論それらは意図して操作する事が出来るが一番
の要因である心理的摩擦、つまりは心や感情と言った問題は有史以
来誰もコントロールすることなど出来ないのだ。」

内心目の前の不毛な議論に対して不満を持っているがそれを表には
出さないよう表面上は軍部からの出席者として会議を静観していた。
暫くして漸く軍部からの報告という事に回ってきたのでゴツプは立
ち上がり軍人としての顔を表情に貼り付け勤めて勤務に忠実な官僚
軍人というポーズを会議の出席者達の前に見せた。

「では軍部から報告をさせて頂きます。ザフトアフリカ連合は本日
5:00をもって侵攻を開始。アフリカ中部及び東岸伝いに進行す
る二隊に分かれ5:10分には国境を越え連邦アフリカ領に侵入目
下ザフトの侵攻に対して八個師団を投入して防衛に当たらせていま
す。しかしアフリカ全面土での攻勢に備え後方には予備戦力として
六個師団を当て並びに新設のMS大隊を侵攻方面の正面に配置して
おります。今の所は遅れは出ていますが当初の予定通り敵の戦力を
一部突出させ敵戦力を拘束することに成功しています。」

「うむ。どうやら大してアクシデントもなく進んでいるような。と
ころでジオンの方はどうなっている？」

「はい、此方も我が軍と共同して複数のコマンド部隊と共に敵領内に潜入。進行開始と共に後方攪乱任務に当てています。それとジオンのMS部隊ですが少し苦戦しているようですね。ジンやシグーといったMSに対しては互角以上に戦えていますですがデインと言った空中機やバクウといった特殊なMSの前には流石に苦戦は免れぬようです。」

その報告に何人かの出席者たちが顔を顰めてうねっているが、当初の予定ではジオン地上軍を遊撃戦力として戦場を迂回、又は突破したMSに対して当ててこれを撃退する計画であった。しかし彼等の予想以上にザフトMSの威力は凄まじく報告書の中には前線からの苦戦の報告が列挙されていた。

「という事は、我が軍がMSを量産する際にはデインやバクウと言った地上専用機にたいして何らかの対抗手段をもつてしなければならぬ。無論ジオンも唯やられている訳ではあるまい。何かしらの戦術を駆使しているのではないのか？」

「無論のことではありませんが。バクウの指揮官はあの砂漠の虎アンドリュー・バルトフェルドです。逆に戦力の誘き寄せどころか餌ごと食い破られるものが多数出ています。」

「うむ。ザフトは唯の民兵と侮るのは危険という訳だな。」

「勿論そうですが、何よりも数が足りません。」

「数が？か。どうしてだ。八個師団と言えば凡そ三十万の兵力ではないか。それにジオン地上軍が合さっているのだろうか？数が足りないことはないんじゃないか。」

「いえ、寧ろ逆です。高々八個師団しか用意できなかったのです。現在我が軍は宇宙及び地球全土において敵軍と対峙しておりどの戦線でも戦力不足は問題になっております。現在地球連邦地上軍が常備している師団の数は百十個師団。しかし、大部分は戦時編成の為再編と再訓練とで動けず、各方面軍や国境警備郡では数が足りません。今回のアフリカ侵攻にたいしてもジャブローで再編が済んだ師団から順次送り出したので部隊の統制当面ではいまいちのところがあります。並びにこの八個師団というのはアフリカ全土においての八個師団と言う事なので三十万の兵力ではとてもアフリカ全土を支えきれません。これは早急に全土での戦時体制の移行と地上での軍の再編及び新たな師団の増強によってのみ解決される事です。」

その答えに何人かの軍関係者が苦渋に満ちた顔になるのをゴップは見逃さなかった。

彼らは連邦軍から兵器や装備の調達を任されている企業の関係者であるのだが、今次大戦において遅々として戦力の増強再編が進まないのはひとえに軍の調達が上手くいっていない事に起因する。

人員は用意できた、訓練も十分、しかし戦う為の装備がないのではお話にならなかった。

長年の連邦からの天下りと軍需産業との癒着により産業全体が硬直化し、軍の要求に対して満足に応えられないのが現状であったのだ。

「ゴップ大将。君の言いたい事は分かった。我々の方でも各方面に手を回しておこう。しかしそれまでの間連邦軍は堪える事は出来るのかね？」

議会の進行役をしていた男がここに来て初めて口を開き、しわがれ

た声でしかし目元は笑っているように見えてその瞳だけは真っ直ぐゴツプを射抜いていた。

だが、ゴツプはその視線をまるで気にする風もなく、あくまでも事務的に官僚軍人としての答えを言った。

「無論その為の連邦軍です。我々は地球連邦市民の生命と財産と安全を保障する為に存在しているのですから。」

その後の会議は幾つかの案件と、今後の戦争に対して各界に積極的に働きかけることで会議は閉幕し、其々が各々の役割を果たす為に部屋を後にしていく。

その中で一人ゴツプ大将だけが最後まで残り、暫くしてゴツプ大将以外誰もいなくなった会議室に一人の男が入ってきた。

「いやあ、久しぶりだね。レビル君。いや今はレビル大将閣下でし
たな。」

会議室に入ってきたたつぷりと生えた白い顎髭が目立つ男がそこには立っていた。

第三十二話・戦場を離れて・・・（後書き）

レビル大将閣下が久しぶりにご登場です。

この後どういった事がこの両者間で話されるのでしょうか？大まかな事が決まっても会話は今だに苦手な作者がお送りしますWWW

第三十三話・ロゴス・（前書き）

久しぶりの投稿で文章が．．．．まあ其れは何時ものことですが。

今思うんですけど個人的にアズラエルって凄いいんじやあないかと思
います。設定を見ると僅か三十台で魑魅魍魎の巣窟であるロゴスを
仕切り、また一環境保護団体であったブルーコスモスを巧みに操り
戦争に協力させるなどその手腕ははつきり言って某ピンクのお姫様
とか遺伝子運命説男とかと比べて役者が違いますね。

彼がもし生きていればコスミックイラの世界もい良くも悪くも変わ
ったのではないでしょうか？

まあ、血は大量に流れると思いますがそれでも．．．．ピンクの悪
女が支配する脳内お天気女の世界よりは遥かにましだと思います。

第三十三話・ロゴス・

ジャブローにて連邦軍が今後の戦況を左右する会議を開いていた頃、ここ北米大陸においても地球連合の経済界に於ける重鎮たちが会議を開いていた。

・北米大陸　ニューヨーク・

嘗て世界の富という富を集め限りない繁栄を誇っていた都市。

三度に渡る大戦においても一度として戦火に揉まれた事の無い都市。

人の限りない欲望と歓喜と、情熱と、冒険心と、ありとあらゆる感情を飲み込み膨らみ続け昼も夜ともつかない光に溢れていた都市。

しかし、今はそんな過去の栄華の面影さえ残さず暗い闇に包まれていた。

NJ投下による核兵器の無効化、その副産物として地球上の多くの国家が頼っていた原子力発電も停止し電力不足は瞬く間に地球全土へと広がった。

衛星からでさえ確認できた文明の光が、NJ投下と共に消えゆく姿を人々は何を思っただろう。

最早自らを守る文明の利器が力を失ったとき、人間という存在が如何に脆いのかを彼らは身をもって知ることとなった。

人類がその英知と限りない欲望と富とを結集して築いた摩天楼から
差す影がエネルギーに困窮する人々の心を暗示していた。

部屋に集まった者達はモニターの光とわずかばかりの照明だけが頼
りの中、各々薄明かりの中で今後の経済の行方について話し合っ
ていた。

「聞いたか？政府が緊急特別法案を議会の承認なしに可決しようと
しているらしい。」

「あの法案をか？馬鹿馬鹿しい。今あれを可決されれば自分達の首
を締める事になるのが判らないのか。」

「それだけ政府も追い詰められているだろう。宇宙での大敗と押
されるばかりの地上。何よりあの忌まわしいNJで経済の建て直し
どころか満足な情報も得られない。これでは幾ら我等が動こうにも
有効な手段とはなりえん。」

「だが、少なくともエネルギーを何とかせねば戦争どころか国家自
体が崩壊しかねないぞ。そうなれば一番得をするのは連邦だ。やつ
らは一挙になだれ込んで連合を併合するだろう。」

「それだけは避けねば。我等が積み上げた富を無理やり強奪される
などあつてはならない。」

集まった者たちはが次々に情報を交換するが、しかしながらそれら
はどれもこれも現状を打開するには至らない。

いや、彼等自身もわかりきっていた。

近代国家においてエネルギーと情報とが断たれれば国家は成り立たないし、ひいては彼等自身にも崩壊の波は押し寄せるだろう。

だが、彼等が有効な手段を打とうにも情報が不足し、また国家を動かそうにもその苗処自身が既に死に体。

連合は徐々に崩壊へと向かっていることをここに集まっているものたちは薄々勘付いていた。

「何をしかたことを話しているのです。そんな事では空の化け物を駆逐するどころか、戦争遂行することさえ出来ませんよ。」

暗い雰囲気の部屋の中に似つかわしくない若い男性の声が響く。

しかし、その響きは何処と無く人を馬鹿にしたようないや明らかに見下した侮蔑の意味を込めた響きを持って会議室に響いた。

「いいですか皆さん。いま我々が求められているのは、一刻も早く地上を汚すあの害虫コージェネイターを駆除し、最後の一匹までも殺しつくすことです。そして宇宙での反攻でプラントを殲滅し、地球を正しい姿に戻すことそう蒼き清浄なる世界を取り戻すことこそいま我々に求められているのです。」

スーツを身に纏、並居る経済界の重鎮達を向こうに置くこの若者こそ現国防産業連合理事にしてその驚異的経済手腕によってロゴスやひいては彼の後援を組織であるブルーコスモスを地球圏において一大勢力にまで上り詰め実質的なロゴスの指導者として辣腕を発揮す

る男、ムルタ・アズラエル。

彼は自慢の金髪をかき上げ、アズラエルは周りの反応を見る。

「だがアズラエル、君の言ってることは判るがしかしながら現状を見てくれ。何処もかも自分の事だけで精一杯だ。とてもではないが戦争など出来る筈が無い。いや我々自身もそうおちおちしていられないぞ。実際この場に集まっているメンバーは実際の半分以下だ。」

一見すると広い部屋であるが、これは各方面から集まった経済界の重鎮やオーブバザー、経済学者や政府高官など様々な人物を収容し会議を行うための広さであり、薄明かりに照らされた部屋の中にはよく見れば空席も目立つ。

それだけ彼等が如何に追い詰められているのかが手に取るように判る。

しかし、アズラエルは弱気な産業界を鼻で笑いこついった。

「何を弱気になっているのです。嘗て再構築戦争を引き起こし、再び国家を我等が手に納めた貴方方が此れしきの事態で動揺するなど、いやはや年は取りたくないものですね。それにそんな貴方達だからこそ僕を必要としたのでしょうか？ だったら僕の言うことにはちゃんと従って貰わないと。そうでなきゃ、皆さん戦犯として裁かれる事になるんですよ。それでもいいんですか？」

その言葉に会議室は一斉に押し黙った。

誰しもが避けていた最悪の事態を事も無げに言ったアズラエルをあのものは憎憎しげに、またあるものは傍観を持ってしかし内心はど

す黒い渦を巻きつつ額を流れる汗を拭きもせずにアズラエルを見ていた。

「ふう、やっと僕の言うことを聞いてくれる様になりましたね。それじゃあちゃっちやと始めますか。」

そういつてアズラエルは椅子に座りなおし、今後の方策を次々と打ち出していった。

もし此処でアズラエルではないものがロゴスのトップであれば、早期の和平もあつたであろう。

しかし、ロゴスは選択してしまった。

自ら歪な醜い肉塊と成り果てた巨体を生かそうと若い指導者を必要とした。

だがその若き指導者の内に燃える狂気と憎悪の炎をとをいまは誰も知らない。

第三十三話・ロゴス・（後書き）

相変わらず短いです。

連合はこれでやっとましな戦力になると思います。正直いって素の状態で戦えば連合は地球連邦と講和に持ち込めるだけの力を持っていますしね。まあ、あくまで講和であって速攻で決めないとずるずる敗北の坂道を真つ逆さまですがwww

外伝・あるいは単なるネタ・（前書き）

最近更新速度が遅くなっているのでリハビリに本編と全く関係のない話を載せます。

前に乗せた超外伝の続きみたいなものです。

外伝 - あるいは単なるネタ -

地球連邦とジオン公国とが火星での植民地争いに熱を上げている中、火星に突如として飛来した隕石から地球外生命体がでてきたのだ。

なんともチープで滑稽で今時のSF小説でさえ取り上げないようなそんな事が実際に起きたのだ。

世間を賑わせた其れは、しかしその正体がわかるにつれ人々は恐怖した。

此处とは違う、宇宙世紀ではなくいまだ西暦のしかも平行世界の地球に降り立った化け物。

BETA

人類に敵対的な地球外起源種

見るもの差別無く襲い掛かり、殺し、食らい、蹂躪する。

人類が有史以来始めて体験する地球外生命体とのファーストコンタクトは血にまみれることとなる。

地を埋め尽くさんばかりのBETAの群れに、唯人類が手をこまねいていた訳ではない。

しかし、新たに植民地として開拓されたばかりの火星は、テラフォ—ミングが不完全であり環境に配慮すれば戦略兵器は使えずまた地球から最短で二ヶ月から三ヶ月という距離は人類側の兵站を徐々に圧迫した。

また、火星環境そのものも人類に大きな脅威となった。

人類側の兵器では火星環境に耐えうる兵器は無く従来兵器を細々と改良したものしか配備できなかつた。

圧倒的なBETAの物量の前に最早火星失陥は時間の問題化と叫ばれていた時、火星に植民コロニーをおくジオン公国はある賭けに出る。

地球連邦との決戦に備えて開発が進んでいたMSザクを実戦投入するというのがあった。

MSザクはミノフスキー粒子下で其れまでの既存の兵器を上回る性能を示し、ジオン公国の来るべき決戦兵器としてジオン本土に温存されていたうちの実に三分の一にも及ぶMSが火星の大地へと降り

立ったのだ。

ザクは、其れまで誰も止める事が出来なかったBETAの大軍を押しと留める処か逆に孤立していたコロニーを救い、BETAを一時的に撤退させることに成功した。

だがこの影で火星で使用禁止されていた核兵器が使用され一気に火星環境が悪化、またジオン公国軍一部部隊が連邦側の植民コロニーを占拠するなどの事件も発生していた。

ジオン公国はMSザクの性能を知り大量生産に踏み切り火星に続々とザクを送り込んでいった。

今までの劣勢が嘘のように戦線を押し上げるザクを目にして人類は確かな勝利を実感していた。

遂にBETA^{ハイウ}本拠地までもその矛に納めたザクは圧倒的な火力と戦力を持って一息に攻略せんと進んでいった。

だが、突如として敵本拠地から現われた新種のBETAにより人類側の優位はもろくも崩れ去った。

遙か彼方の地平線から照射されるレーザーを前に、次々とザクが訳

も判らぬまま撃破され、火星軌道上から打ち込まれたミサイルを一本と逃さず迎撃される。

新たに確認された新種のBETAは光線級と名づけられその射程、威力、照準精度を前に人類の恐怖した。

たった一体のBETAを前に人類が積み上げてきたありとあらゆる兵器が無力化され、BETAの大軍を前に空という空間を失った人類には最早勝ち目は無かった。

ザクのスラスターを利用した三次元機動もレーザー級の前には迂闊にその姿を晒すこととなり、地上にいれば四方から迫ってくるBETAの群れに食い潰される。

圧倒的物量の前に取り残されたザクは、友軍の救助を信じつつ絶望的な戦いを余儀なくされ、しかし肝心の撤退を指示すべき司令部は光線級のレーザーを前にこの世から蒸発していた。

敵本拠地を前にして人類の大敗に終わったこの戦いは、人類側に新たなBETAの出現と自分達の戦術、戦略の破綻を知らせた。

BETAは其れまでの損害がまるで嘘のように文字通り地表を埋め尽くす物量をもって火星を蹂躪し、開戦から半年が経つころには火星の人類の人口は半分以下にまで落ち込んでいた。

正にこの世の終わりを物語る絶望的な光景の前に、人類は唯見ていることしか出来なかった……。

第三十四話・コロニーより愛をこめて・（前書き）

今回はひとまず宇宙に眼を移して、前の感想の方に書きましたが連邦軍によるコロニー輸送の話を書きます。

今回の事で改めて連邦軍の力を実感していただけられたらといいなと思います。

まあ、連邦チートは昔からですが・・・。

第三十四話・コロニーより愛をこめて・

地球のアフリカでザフトと地球連邦軍との戦いがヒートアップしている中、ここ宇宙では比較的小康状態が続いていた。

初戦において地球連合宇宙艦隊は壊滅し、月の裏側がジオン共和国の支配下に入ったあと連合宇宙軍は月面基地プロトレイオスに引きこもり以後宇宙空間での作戦能力を完全に喪失していた。

連合を下したプラントもまた、ジオンの絶対防衛ラインであるソロン要塞攻略戦で戦力を消費し、地球にまで軍を派遣した結果戦力の余裕を失い航路確保に終始していた。

その間隙を縫うようにして地球連邦はある一大作戦を発動した。

世界樹攻防戦により被害を受けたサイド5の内比較的損害の少ないコロニーを修理しサイド7まで曳航しようというのだ。

これは、戦争初期のおりサイド1、およびサイド5はプラントと連合との戦闘に巻き込まれ多大な被害を出したため、急遽コロニー市民の疎開が行われていたのだ。

しかし、各サイドも戦争中ということもありそれ程余裕はなく、また難民受け入れを表明している各月面都市もその収容人数には限りがあり実質避難したコロニー市民の立場が宙に浮く結果となった。

これを受け、連邦政府は比較的無事なコロニーの回収と安全な宙域曳航を目的とした作戦の発動を決定。

条約によりサイド1の安全の確保と帰属権は保障されていたが、しかしNJによつて有耶無耶になったサイド5についてはその地理的要因から各勢力共に狙っており、互いに牽制し合うことに終始していた。

だが、ザフトと連合の作戦能力が衰退した今、地球連邦にとって悲願のコロニーの確保が可能になったのだ。

しかし、回収しようにも戦闘後の残骸回収を目的としたジャンク屋ギルドや海賊がコロニー内部に侵入し勝手にジャンクを漁ったり中には火事場泥棒的に置いて行かれた市民の財産を奪っていくものがわんさかと集まっていたのだ。

地球連邦は最初、コロニー所有の正当な権利と即時退去と財産の（回収されたコロニー資材を含む）返還を勧告した。

しかし、ジャンク屋ギルドはギルドの特権を主張し返還と退去を拒否。

なおも連邦が呼びかけるが、今度は傭兵を雇い追い返される始末。

ここにきて連邦軍はコロニー市民の財産を守るためルナツーより艦隊を派遣。

ザフト連合に対する通商破壊を行っていた各任務部隊も急遽招集されサイド5は完全に包囲された。

しかい、ジャンク屋ギルドおよび中に立て籠もる海賊はなおも抵抗をやめず各方面に連邦の横暴だとして圧力をかけるよう働きかけていた。

だが、地球圏において連邦と対等に渡り合えるはずであった連合はプラントとの戦争で疲弊し、他のギルドを承認した諸国もNJの被災時に連邦から多大な救援物資や資金援助などを受け比較的連邦よりであった。

唯一オーブだけが形式上の遺憾の意を示したが、中立国であるオーブではそれ以上の動きは期待できなかった。

ならプラントはどうかというと、確かにコロニーをめぐる問題は同じコロニー国家であるプラントにとっても無視できない問題ではあったが、開戦時からプラントに対する宇宙市民の感情は冷え切っておりここでジャンク屋を指示すればますますプラントが孤立しかねないと沈黙を持って答える以外なかった。

各国各組織に見放されたジャンク屋ギルドは勝ち目がないと分かるやすぐさま遁走を開始し、離脱者があいつだが連邦の執拗な追撃の前に多くが拿捕されジャンク屋ギルドの吸引力は急速に落ちていった。

傭兵もまた、勝ち目がない戦いはご免こうむると次々とコロニーを後にし中には信用第一とコロニーに残るものもいたがそれはごく少数であった。

しかしコロニーから無事出られたとしてもその後の彼らの運命はそう変わりはいしなかった。

降伏するかそれとも抗って宇宙の塵になるかの二つに一つなのだから。

最後は呆気ないものであった。戦力は減るばかりのジャンク屋はついにコロニーを明け渡しその多くが連邦軍に拘束される結果となった。

中には最後まで抵抗する者もいたが、ジャンク屋は所詮無法集団。国際法の管理外である彼らの運命は多くは語るまい。

こうして無事コロニーを取り返した連邦は早速コロニーの修繕と曳航の準備へと入った。

コロニーの修繕に対してはコロニー公社のスタッフが当たったが何分世界樹のデブリが余りにも多く作業は難航した。

だが、商売根性たくましいやらこの事かとなんとジャンク屋ギルドの方から協力しようという者が出てきたのだ。

彼らの多くは宇宙に身を置くスペースノドが中心でコロニー公社と協力してデブリの除去やコロニーの修繕作業などに携わった。

無論中にはこの機に脱走しようという者もいたが宇宙作業艇では旧式となったセイバーフィッシュを相手に逃げ切れるはずがなく無駄な抵抗に終わった。

そんな中でもジャンク屋ギルドのメンバーは黙々と作業を続けていた。宇宙ではほんのちよつとしたミスで死ぬことはままあるなか明日は我が身かと仕事に打ち込むものが多かった、まあ拘束された者たちにすれば協力することによる恩赦を期待していたのだが。

多くのアクシデントが起きたが無事コロニーの修繕は完了し連邦軍護衛の下コロニーの曳航が始まった。

複数のコロニーが艦隊にひきつられ同時に曳航されるなどなかなか見れない姿を見ようと各国の放送局や中には偽装した連合軍の姿も見受けられた。

しかし、コロニーの周辺を取り巻く連邦艦隊の姿にだれしもが圧倒されコロニーという巨像を従える軍団の前に改めて連邦の底力を思い知る事となる。

連邦はコロニー移送の為だけに計三個艦隊を派遣し、周囲を警戒する任務部隊を入れれば四個艦隊に相当した。

地球と宇宙に多くの戦線を抱えるなか是だけの規模の軍を動かせるのは後にも先にも連邦軍だけであった。

彼らはこれから三カ月をかけてコロニーをサイド7に送る任務が待っている。途中での厄介事を回避するためにもここで連邦軍の健在ぶりを衆目に示しておくことの意義は実際の戦力よりも大きく影響を及ぼす。

ゆえに地球連邦政府は今回のコロニー移送を一種のショーとして演出し連邦軍もまた自らの威信を示す結果となった。

だが、何よりも連邦にとって重要なのはこのコロニー輸送によって宇宙市民の大半を連邦支持へと向かわせたことである。

この一手はのちの地球連邦の計画の布石であることはこの時まで誰も知らない。

第三十四話・コロニーより愛をこめて・（後書き）

次回辺りは移送艦隊の面々にスポットを当てたいと思います。

今回の主役は・・・なんとみんな大好き紅茶提督です。

地球連邦軍内部からみた今回の計画、ということを書いていきたい
と思いますのでよろしく願います。

それではまた。

銀河の歴史にま

た紅茶の雫が一滴。

第三十五話・紅茶と提督・

0079 六月二十八日 地球連邦宇宙軍第六艦隊旗艦ウィンビル
ドン

ワイアット提督の朝は早い。

英国紳士たる提督は、常に時間に正確でなければならず、また慌てず部下の規範になるように態度で示さねばならない。

今日もワイアット提督は、時間きっかりに起き、シャワーを浴び、クリーニング仕立てのまっさらな皺のない制服に裾を通す。

ワックスをかけて丁寧に磨かれた軍靴と軍帽、ピカピカと輝く胸の勲章に両肩の階級章。

癖毛一つない、真っ直ぐと整えられた髪。

そう、英国紳士たる提督は常に身嗜みもどんな時でも崩さず、整えていなければならない。

どんな時でも動じない英国紳士の鏡、それこそがワイアット提督の誇りである。

艦橋には朝早くから人員がつめかけ、みな其々の日々の業務に携わっていた。

エレベーターを使い、艦橋に上がった提督はまず一言、

「おはよう諸君。」

「「おはようございます。提督。」」

敬礼しながら挨拶を返す部下たちに手で応じながらワイアット提督は優雅に自身の定位置であるシートに座った。

提督が座るのを待っていたのか、艦橋には似合わない給仕服を着た男が、優雅な仕草で提督に朝のアッサムティーを淹れる。

艦橋に充滿する紅茶の香りが、朝の清々しい空気を演出し、ここがとても軍艦の中だとは思えないほどであった。

カップをソーサーごと受け取った提督は、カップの取っ手に手をかけ、一口口に含む。

「うむ、やはり朝はアッサムティーに限るな。料理長、また腕を上げたな。」

料理長は提督に恭しく礼をすると、飲み終わったカップとティーセツトを片づけ、艦橋を後にした。

普通の軍艦では、まず許されない事が公然と罷り通っているワイアット艦隊であった。

ワイアット提督は常に「嘗て七つの海を制した英国提督達は紅茶を欠かさなかった。また、紳士たる彼らは戦場においても一種の清涼剤としてアフタヌーンティーを楽しんだのだ。その栄光ある血脈を受け継ぐ我が連邦宇宙軍が紅茶を軽んじる道理などない。」

と、公然と宣言している為、艦隊司令部は渋々ながら認めている状況であった。

無論、それでも苦言を申す士官らにはいるが、実際ワイアット率いる艦隊はアフタヌーンティーの導入と、地球産の紅茶を惜しみなく将兵にふるまう事で有名で、それにより将兵の士気も高くストレスレス対策にも一役買っていた。

また英国紳士たる提督を見習って、連邦軍一の規律と、紳士的振る舞いは内外でも高い評価を得ていた。

因みに、今日提督が飲んだアッサムティーは、態々インドから運ばれてきたもので、提督がただの提督等ではなく、地球から直接物産を取り寄せる事が出来る程の力を持っていることの証明である。

連邦軍においては、地球産というのは殊のほか珍重される。

レビル將軍のトレードマークである葉巻も、ハバナ産の葉巻を愛用していて、原作ではルナツーに持ち込むほどの愛好家であった。

地上軍とは違い宇宙では地球からの補給も難しい、下士官の殆どがスペースノイドで構成されている以上、彼らの地球への憧憬は深い。

そんな中、地球から補給が来る、その事実だけで艦隊の背骨である下士官らの士気は大いに上がるのだ。

そして、地球から態々補給が来る、という事はそれだけ提督が骨を折り、また来させるだけの政治力と確固たる実績を上げている事の証明であり、提督の階級以上の権力の象徴であった。

ワイアット率いる第六艦隊は、第五艦隊、第九艦隊の計三個艦隊を伴ってコロニー輸送を行っていた。

彼らの任務は先の世界樹攻防戦の折に、壊滅的な被害を受けたサイド5を修理し、安全なサイド7まで移送することが目的であった。

この作戦は、軍事的側面よりも、極めて政治的側面、戦争協力のための連邦政府のスペースノイドに対するアピールであった。

曰く、『連邦こそ、宇宙の民を導き指導し、また連邦は決してスペースノイドを見捨てない』

そういうメッセージを多分に含んだ作戦であった。

だが、ワイアット等、実際にスペースノイドに接する彼らからすれば、今回の作戦は政府が思う以上の成果は上げないだろうという、見通しがあった。

何故か？

言ってしまうえば、宇宙市民は連邦の考えなどお見通しなのだ。

確かに、コロニーは彼らにとって重要な場所だ。

だが、もとはと言えば、そのコロニーは自分たちの祖先を閉じ込めておく棄民政策の道具だ。

連邦の甘言や恫喝、時に実力行使を伴って行われた宇宙移民は、歴史に刻まれなくともスペースノイドの一人一人の心に大きな頸木を打っているのだ。

その血を脈々と受け継ぐスペースノイド達にとって、連邦政府の行動は一見歓呼の声を持って迎えられているが、内心では酷く冷めた目で見ていた。

実際ワイアット等この作戦に参加した提督達が見た下士官らの反応は極めて冷静かつ酷く無感動であった。

地球連邦とスペースノイド。

両者の関係は、表に見えずとも日に日に溝が深まっていることを提督達は知っていたし、またこれが長年放置してきた棄民政策のツケであること連邦軍全体で共有していた。

第三十五話・紅茶と提督・（後書き）

連邦とスペースノイド。この作品だお一見するとうまくいっている、
と思っっている方もいるかと思いますが、実際はそうではありません。

結局宇宙移民は棄民政策ですし、地球に戻る事さえできないスペース
ノイドにとって、地球連邦の行いは非常に厳しい目で見られている
筈です。

原作ですと、連邦の組織的怠慢のせいとされていますが、連邦のシ
ステムその物こそ、スペースノイドとの溝を深めている原因に他な
らないかと思えます。

だからこそ、スペースノイド達はジオニズムに心酔し、ザビ家を支
持するし、ダイクンは救世主であり、ニュータイプは解放の象徴と
されながらも、内心では非常に冷めた目で見ていたのではないでし
ょうか？

宇宙移民にとって独立云々人類の進化云々は方便でしかなく、ただ
一心に連邦の楔から自由になりたかったのだと思います。

まあ、私が勝手に思っただけなんですけどねwww

小話 (前書き)

今回の話は大筋から離れて、ちょっとした一市民の話にスポットを当てたいと思います。

それと、報告ですが、ワイアット提督のキャラは管理人様に確認したところ許可が出ましたので、今後も使っていきたいと思います。

改めてこの場で直轄領の管理人様に御礼を申し上げたいと思います。

小話

オーブ連合首長国、

旧世紀、海底火山の噴火に拠り南太平洋に出現した小さな火山諸島の連なりは、何度かの領土問題を経て数多くの国から入植が行われ現在では一国家としての独立と自治を保ってきた。

世界に冠するモルゲンレーテ社やマスドライバー「カグヤ」、建設中の軌道エレベーター「アメノミハシラ」に独自のスペースコロニー「ヘリオポリス」を保有するなど、小国ながら侮れない技術力を持っていた。

その理由として島民の多くは、その祖先を日本に持つものが多い。

旧世紀の政治の不安定と、隣国の脅威の前に多くの国民がオーブへと新天地を目指して特に国内で仕事が無い技術者が家族を伴って入植を果たした。

その名残か、島の名前や様々な物の名前には、遠く故郷を思っか日本系の名前が付けられていた。

現代では「来るものは拒まず。」の姿勢からナチュラル、コーディネイター問わず移民を受け入れる数少ない国であった。

開戦後は真つ先に「中立宣言」を行い、戦火を逃れ、一時の繁栄を謳歌していた……。

その、オーブ諸島に程近い小さな島にあるマルキオ導師はいた。

「これはこれはウズミさま、態々ご足労頂き感謝します。」

盲目の導師、マルキオは相手の姿が見えない為小さく会釈することでお辞儀の代わりをした。

「いえいえ、礼には及びません。導師様には私の方こそ感謝したいくらいです。残念ながら公式の場で導師に国を代表してお礼を申し上げることは出来ませんが、この場でせめてオーブ国民に代わりまして貴方にお礼を申し上げます。」

現オーブ連合首長国ウズミ・ナラ・アス八代表は深々と目の前に座るマルキオ導師に頭を下げた。

獅子と称されるほどの苛烈な性格と、発するオーラとが国民の絶大な支持を得ているウズミ代表では合ったが、今回の中立宣言といい幾たびもの国難に対して、こうしてマルキオ導師に便宜を図ってもらい乗り切っていた。

ウズミ代表とマルキオ導師の付き合いは長い。

若い時、真に人類を導く為に必要なのはなんなのかと探求を重ねていた時、ある事がきっかけで光を失うことになってしまった。

そんな時、マルキオを助けてくれたのが目の前にいるウズミの父で

あった。

ウズミの父親は、精力に溢れ、燃え滾るような強い使命感を持っており、彼と議論を重ねたマルキオは、彼の言う「人類は変化の時、必ずそれを伝える使命を帯びたものが生まれる。そして彼のもと人類は新たなステップへと進んでいくのだ。」

それに感化されたマルキオは以後彼の助けとなるべく世界中を渡り歩き、彼とウズミの父が理想とする世界を創ろうと奮闘した。

ウズミとはその活動の時に親交を深め、父亡き後を継いだ後も、彼との友情は変わらなかった。

「貴方のその誠実なところはお父様にそっくりですね。だからこそ貴方に次世代への導き手を託した。」

マルキオは遠く昔を思い出すように、目の見えない顔を、太陽の光が差す窓へと向けた。

「あの日、導師に託された希望は、子がなかった私にとっても、また人類の明日にとっても大切な宝です。だからこそ、次の世代により良き未来を託す為に我々の問題を解決せねば。」

ウズミはマルキオの言葉に頷きながら、しかし次の言葉には一国の指導者らしい重みと責任のある言葉を紡いだ。

「世界はSEEDを持つものを待望しています。そのために、いま我々が出来る事をせねばなりません。ですが……。」

言葉を濁したマルキオにウズミは怪訝な顔をして聞いた。

「導師、なにか問題が起こったのですか？」

顔を上げたマルキオは、渋い表情をしながらいった。

「先のジャンク屋ギルドの件はご存知ですね。」

「ええ、わが国としてはあの程度しか出来ませんでした。しかしまさか連邦がそのような強引な手に出るとは……。」

ジャンク屋ギルドは国際社会に認められた組織である。その設立にはマルキオ導師本人が深く関わっており、ジャンク屋の特権のもと集まる情報をもとに、戦争を早期終結させるためのオーブや各国政府を繋ぐ情報網を作り上げようとしていた。

だが、条約を批准していない連邦とジオンは、ジャンク屋の特権を認めず国内から排除にかかり、各地で問題になっていた。

今回の一軒は手痛い痛手であると共に、国際社会における連邦への不信任が現われる結果ともなった。

「連邦は旧世代の人類が生み出したエゴの塊です。彼らは自由と平和、統一を掲げながら本当は世界を牛耳りたいだけなのです。そこに彼らが言う自由はなく、多くの人々が連邦という楔に繋がれるでしょう。それでは人類の次の進化はありません。」

マルキオは言葉を強くしながら言った。

「そうですね。あの組織は大きすぎる。本来ならその役目を終え、解体に向かってもいいはずのものを……。」

「それを未だに残してしまったのも我々の責任です。」

連邦は巨大だ、そう巨大すぎるのだ。それゆえ連邦を解体するといふことは事実連邦という名前以上に、今まで世界を規定してきた力の消失を意味し、まだ世界が混乱していた時代では、巨大組織の崩壊の余波を受けきれただけの力は無かったのだ。

その為、連邦は今までその歪な形を残したまま存続してきたのだ。

「ですが、それを次世代まで残す理由はない。我々のエゴの塊を、清算する時が来たのです。」

ウズミは熱っぽくいう。彼は父親と同様に、大国のエゴで翻弄される自国を若い時から体験していた。

その経験が、新しい世界秩序への渴望へと変わり、こうしてマルキオと議論を重ねた結果、ある結論に達していた。

「地球連邦を崩壊させる。もしくは緩やかに地域から解体をし、次世代へと新秩序の構築を託す。」

マルキオ導師とウズミ代表は裏で働き続け、その成果の一つであるジャンク屋ギルドの設立が、暗礁に乗り上げてしまったことに若干の不安も抱いていた。

しかし……。

「そのためにはまず力を蓄えねばなりません。幸い今回の件で捕まった者たちには恩赦が出るよう国際社会および連邦内の協力者に呼

びかけようと思います。それと、今後ジャンク屋ギルドの更なる支援と火星の同士達との連絡を密にせねば。連邦を倒すのに我々は一人ではありません。これからも同士を募り共に進んでいきましょう。

┌

マルキオ導師とウズミ代表との極秘の会見は、これで終了し彼らは彼等の信じるべき道を目指し、活動を続けた。

地図設定(前書き)

テストで上げました。

上手くできているか・・・。

地図設定

```
http://3557.mitemin.net/i27443/  
>i27443—3557<
```

各勢力の色分け。 C・E・70 U・C・0079 六月時点

青：地球連合

緑：ザフト及び親プラント国家

黄色：中立国

驚きの白さ！！：地球連邦

地中海、紅海を制したザフトは大西洋へと虎視眈々を目を向ける。
今だNJの影響下での体制の立て直しを図る連合。
静観の中立国。

驚きの白さで、来るべき反攻作戦に備える連邦。

世界が真っ白に染まる日は近い！？

地図設定（後書き）

テスト作品ですので、いずれ消します。

宇宙図設定。(前書き)

最近別のIS関係の二次小説ばかり書いているので、こつこつして設定でお茶を濁す日々……。

本編はもう少しお待ちを。

宇宙図設定。

```
839 /  
http://3557.mitemin.net/i27  
>i27839—3557<
```

C・E・70 U・C・79 六月の状況です。

大まかに言いますと、宇宙は比較的小康状態ですが、L1航路が使えない以上、プラントは補給戦の確保が難しくなっています。

ジオンのソロモンを出撃した通商破壊部隊が、L1に潜伏、連合、プラントの区別なく襲っていて、特に連合の各月面基地は日に日に苦しくなっています。

プリントは状況を打開する為、L1を突っ切って、新星を攻略、現在L5まで移送中です。

連邦は、のんびり、ゆっくりと外交官筋で中立国に圧力をかけて対プリント輸出が高騰か、じわじわ体力を削っていきます。

第三十六話・ウルフパツク・（前書き）

長らくお待たせいしてすみません。

これからは週一で更新できればと思っています。

第三十六話・ウルフパツク・

ソロモン要塞

ソロモン要塞の固い岩盤を削り抜いたなかに作られた宇宙港に、停泊していたムサイ級軽巡洋艦三隻が、出航の時を待っていた。

最終チェックを済ませ、物資を搭載量限界まで積みこんでいる。

この三隻は、開戦初期から前線において活躍し、先月帰還して艦長ら乗員全員に休暇がなされたのち補給と修理の為ドッグ入りをしている。

ソロモン要塞からは週一で本国サイド3への便が出ており、乗組員全員がすし詰め状態で本国へと休暇に向かう傍ら、ムサイ級三隻は、修理と同時に今までの戦訓から新たな追加装備を取り付けられていた。

そうして、一カ月をかけ補給と修理、並びに改修作業を終わらせたと同時に、本国で命の洗濯をしてきた乗組員が船へと帰って来た。

帰って来た彼らは、久しぶりに見る自分たちの第二家の変わりように少しばかり啞然とし、艦長も話には聞いていた為乗組員たちの前では表情を変化させてはいなかったが、内心、自艦の変わりように驚いていた。

ムサイ級三隻は艦橋の両舷に二連装の対空砲火二基とMSデッキの裏側に二基、全体的にずんぐりとした船体に抑えられた艦橋と、今までのシャープなデザインからだいぶ違っている。

無論それは外見だけではない、中身も最新の索敵電子機器と新型の双方向性レーザー通信機、エネルギー効率の上昇により航続距離も上がり外見以上に中身はかなりの改良が加えられていた。

乗組員らはこれから一週間、改修艦になれるための完熟訓練をしたのち、新たな任務に出る事になっている。

乗組員全員が新しく生まれ変わった船に早く慣れようと訓練に励み、艦長らもまた、予定通り訓練が終わるように乗組員たちを奮起させた。

こうして、ソロモン要塞沖での訓練が終わり、そこで初めて彼らに艦隊司令部からの指示が伝えられた。

解読された暗号文が書かれた紙には、

『本日12:00をもって貴官らは第三十三哨戒艦隊はL1宙域へと航路をとり、そこで通商破壊任務中の第二十八部隊と交代で任務に当たられたし』

暗号文を読み取った艦長は、直ぐにライターで髪を燃やし、航路図を見た後全艦に出撃命令を出した。

L1 航路

かつては国際宇宙ステーション通称世界樹があり、ここを起点に宇宙経済は発展を遂げてきた。

地球からの新鮮な野菜や果物はここから各コロニーへと送られ、逆にプラントなどで生産された工業機械は世界樹から地球上の国々へと輸出された。

だが、L5 事変から全てがおかしくなりはじめた。

プラントの武装化、連合との対立、世界樹は国際的な宇宙経済の中心地から、連合軍宇宙艦隊の寄港地として最盛期には三個艦隊が駐留していた。

そして、ついにプラントが世界樹へと侵攻、MSの威力をもって数に勝る連合を圧倒し、ついに連合軍艦隊は大敗、追撃を防ぐのと世界樹の施設を使わせない為に、連合は世界樹を爆破崩壊させ、結果L1はデブリに埋もれ、両陣営はこの航路を失った。

しかし、連邦のサイド5移送や以前から行われていたジャンク屋によるデブリ回収によってL1はデブリ地帯を縫うようにしていくつかの航路が開かれていた。

プラント所属の輸送船はその航路をとり、今まで絶えず行われてい

る地球連邦、ジオン共和国の通商破壊作戦の被害を大きく抑える事に成功していた……。この日までは。

以前からジオン共和国諜報部では、プラント船がL1航路を通ってジオン連邦の哨戒網をくぐり抜け、プラントへと輸送しているとの情報があった。

ジオン諜報部はキシリア機関の手も借り、実際にいくつかの証拠を上げてはいるが、実際の航路は不明であった。

その為、従来の通商破壊任務に就いていた何隻かをL1に派遣し、実際に証拠を現場で押さえる事と航路の発見が厳命される。

そうして、実際に民間商船に偽装したプラント籍の船舶や、哨戒ラインから見失った船がL1へと航路をとり、そこで発見されるなど確かな証拠と、いくつかの航路を発見する事に成功する。

この成果をもってジオンは本国で休養していた部隊を前線に招集、L1のデブリ地帯での活動を目的とした通商破壊部隊を編成する事になった。

その中の一つに、ソロモン要塞から出航した第三十三哨戒艦隊は早速予定航路上に仕掛けを施していた。

レーザー通信や索敵、偵察を目的とした装置を手ごろなデブリへと取り付け、即席の哨戒衛星を作り、情報から割り出した比較的デブリの薄い宙域へとばら撒く。

この作業には、連邦からレンドリースで共有されたRB-79ボールは、基はコロニー外壁の作業用ロボットスペースポッドを基にし

て作れぬら作業機で、二本のアームは見かけよりも器用で頑丈な装甲をもち、L5移送に当たってもジャンク屋ギルドから本機を売ってくれと打診してくるほどだ。

ボールは戦闘力こそ皆無なもの、大量生産のし易さと、作業用ポッドとしては破格の性能は同盟国であるジオン共和国でも高い評価を得ている。

今回も、MSに混じってボールが一艦につき二機のボールが作業用としてデブリの中をフワフワと浮きながら作業に従事している。

一見微笑ましくとも、彼らは戦争をやっているのだ。

実際に人を殺さなくても、その行為で何百人もの人間が死ぬ事を彼らは忘れない。

それを忘れたとき、戦争は戦争ではなくなり、ただの殺人と化す。

仕掛けを終え、デブリに分散して身を潜めた艦隊は、静かに獲物がかかるのを待っていた。

P i P i P i

偵察に出ていたザクフリッパーからレーザー通信が入り、獲物がL1へと侵入した事を知らせた。

彼らは急ぎスクランブルをかけ、出撃していくザク？の編隊に、奇妙なものを背負ったザクが続く。

通常のザクより燃料搭載量、通信機器を強化されたそれは、MSとしては珍しい二人乗りの機体であった。

一人が操縦士、もう一人が航法とガンナーを兼任する。

事前の測量からと偵察用ザクからの報告で船団の規模と大きさ、どの位広がっているか、どのくらいの速度で来ているか、あとの位で視界に捉えるか。

操縦士が最良の地点ポイントにつき、徐に背中的大型ランドセルの上のカバーがスライドし、中から黒い球体が目の前に散布される。

放物線上に散布されるそれを、航法士が入念にマーキングし、散布範囲の調整と待機地点の指示を行う。

仕事を終えたザクは、周囲に伏せる強襲用のザク達よりも先に母艦に帰還し、周囲は再び静寂が戻る。

しばらくして、レーダー衛星が船団を捉え、途中でいくつかの航路に分かれたのか、想定よりも少ない数ではあるが、十分な規模の獲物だ。

こうして何も知らないまま先ほど球体を巻いた回廊に入っていく、そうしてその中腹で先頭に行く船が球体に接触し、次の瞬間爆発を起こした。

突然の事態に慌てふためく間もなく、爆発の熱を頼りに殺到する球

体。

それが触れるたびに爆発が起こり、船団に混乱が広がる。

彼らはまんまとジオンが仕掛けた機雷源に入ってしまったのだ。

掃海艇や対機雷装備も何もない彼らは、MSを出撃する暇もなく、突入したザク？によって次々と火を噴き、

逃げ出そうとすれば機雷源に自ら突っ込みデブリと化する。

この事態を少しでも多くの仲間に伝えようと、船団の艦長が通信を開くも、妨害され一切の通信が出来ぬまま、ただ船団が日に吞まれていくのを見ているしかなかった。

八隻ほどの船団のうち、機雷で三隻が中破しMSによって五隻が撃沈一隻が機雷源に突っ込みエンジン部分で爆発した機雷によって宇宙のチリへと姿を変えた。

残る二隻のうち一隻は大破し、もう一隻は船団の後方にいた為被害を免れたが、突入してきたムサイに挟まれ、降伏を申し入れた。

このほかにも別の航路で大小さまざまな通商破壊作戦が行われ、こうしてL1はジオン共和国通商破壊艦隊の庭と化しプラントでは「群狼の庭」として恐れられた。

第三十三哨戒艦隊は通商破壊の初戦果に沸き立ち、鹵獲した輸送船の乗員を拘束したのち本体へと送って行った。

彼らジオン共和国艦隊は、誇りある船乗りであり同時にシーマンシ

ツプに則った行動で作戦後の宙域の掃海と救助に当たった。

今回の作戦でプラント側は大型輸送船六隻、民間商船二十五隻に護衛のローレシア級四隻を失い、補給艦四隻を拿捕された。

ジオン側の被害はムサイ級二隻の中破と、MS四機と極めて軽微であり、久しぶりの大戦果を上げ本国は沸き立った。

こうしてプラントはまた一步滅亡への階段を上がり、宇宙での小康状態が徐々に崩れ始めてきていた。

嘗て歩兵は陸上の王者であった。

甲冑を着込み、兜をつけ、手に槍や剣、或いは盾をもち集団において個人の勇が何よりも重視された。

次に騎兵の時代が来た。

馬に乗り圧倒的な機動力と高所からの一撃は歩兵の縦列を瞬く間に蹂躪した。

だが、歩兵は駆逐されなかった。

騎兵に対抗する為に、個人の勇よりも集団の結束を信じ、今までよりも長い槍、より遠くへと飛ばせる武器、弓矢を使い彼らは集団の力で騎兵に立ち向かった。

次に戦車チャリオットが来たが、これはより優秀な騎兵に取って代わられた。

こうして長らく歩兵は地上の主であった。

時代が進み、人の武器も進化し、甲冑や兜は野戦服とヘルメットに変わり、剣や槍、弓はより強力な銃に変わった。

この頃から飛躍的に戦争の方法は進化する。

より効率よく敵を殺害する為にどうすればいいか、どうやったら相手を打ち負かせるか。

様々な戦術が編出され、歩兵はただ命令どおり突撃すればいい存在では無くなった。

こうして質量共に発展した歩兵は、次に大きな脅威を迎えた。

戦車^{タンク}の登場だ。

歩兵の火力では対抗出来ない重装甲を身に纏い、圧倒的な火力と、数十トンもの巨体が四十キロ以上の速度で迫り、轢殺する。

次に出た飛行機はもつと彼等を苦しめた。

地上ではなく空からの攻撃は、何処に隠れようとも彼等を見つけ殺戮し、大空を舞う相手には如何なる攻撃も届かなかった。

歩兵は陸戦の王者ではなくなった。

だが、彼らは技術の進歩と戦術の変化、そして何よりも戦友との信頼を信じて戦った。

彼らは王者ではなくなっても、地上の真の主だった。

その後の進歩で大空を舞う鳥を容易に落せるようになり、世界情勢の変化によりこれ等の兵器が入れない小路を走り、市民という名の敵を見つけ、制圧する。

時代は歩兵に厳しくとも味方ではあった。

人類が宇宙に住む時代になっても歩兵は未だに存在し地上に君臨し

ていた．．．．．その時までには。

人類初のMSの出現。

宇宙空間での活動を目的としたその兵器は、類まれなる汎用性を持つて地上にまで降り立った。

本来18mもの巨体は、戦車や飛行機にとっていい的であり、人型故に歩兵でも死角を突けば撃破できると高を括っていた。

だがNJの存在が、地上戦を数世紀前に戻し、有視界戦闘におけるMSの威力は、18mという高所からの視点とAMBACを応用した高機動。

リニア・タンクの一撃を跳ね返す装甲に、様々な環境に適應できるその汎用性は戦車や歩兵にとって悪夢その物であった。

戦車は装甲の薄い上部を狙われてはどんなに優れた装甲も意味を成さず、歩兵は巨大による威圧感と恐怖により、連携も間々ならぬまま蹂躪される。

頼みの綱の航空攻撃も、最新の電子機器に頼った攻撃をNJによって無力化され著しく攻撃効率が落ち、空にまで進出したMSによって航空機も翼を？がれていった。

歩兵は地上の主であった、だが今はMSこそが戦場の支配者だ。

U・C・0079 六月

ザフトアフリカ共同体連合軍によるアフリカ中部東部における同時進行は、早くもその意図を頓挫し始めていた。

事前に準備した連邦軍とジオン軍の強固な防衛線の前に苦戦を余儀なくされ、平野でこそ地上用MSバクウの力もあり何とか前線を押し進めることに成功する。

だが、他のジンやザウトといったMSはバクウの進撃スピードに付いて来れず、結局前線は膠着、地球連邦は敵の攻勢を受け流しつつ幾つかの突出部分を作り出し、ザフト軍を拘束することに成功していた。

更に前線から部隊を抽出し、中央部の右翼から丁度ザフト軍進出地

点の脇を突くようにしてザフトアフリカ共同体の物資集積所となっている街ペセタを狙う動きを見せた。

この地点を押さえれば、ザフト軍の侵攻は鈍化し、アフリカ共同体領地に侵入したゲリラ部隊の援護にもなる。

作戦は極めて短い準備期間の中行われ、朝焼けの中陽動として前線域での準備砲撃が行われる。

地面を耕す砲撃は、連日の戦いで疲弊したザフトアフリカ共同体兵士を襲い、多くが対応に追われることになった。

砲撃は三十分間行われ、その切れ目を狙い、地球連邦軍第三十三装甲師団及び第五十六機械化師団、隷下の重野砲連隊を伴ったの進撃は、連日の戦いで消耗率が激しく満足の機動も出来ないザフト軍MS隊の現状を狙い、部隊間の層の薄い部分を切り裂くようにして進撃した。

戦車師団が、今までの鬱憤を晴らすように塹壕を蹂躪し機械化され進撃速度が上がった歩兵が戦果を拡大する。

MSが出てくれば、重野砲連隊の砲撃とヘリボーンによる強襲からなる陸と空からの攻撃の前に、碌な稼動も出来ないMSは次々と各坐されていく。

進行部隊は三日目にしてペセタ市を視界に収め、その五キロの地点にまで迫った。

しかし、此処で思わぬ反撃を受ける。

ペセタ市に展開していた部隊は比較的容易に補給や整備を受けられ、前線に出ずっぱりのMSとは違い本来の性能を發揮したMSの前に部隊は思わぬ苦戦を強いられた。

しかし、MSの数の少なさと、地形の複雑さからザフト軍MS隊はペセタでの籠城戦を決定、此処にペセタを巡る壮絶な歩兵とMSの市街戦が繰り広げられた。

市街地に向けての準備砲撃によって煙を上げて崩されていくビル群。装甲車を戦闘に歩兵を伴った戦車が市街地へと突入し、入った直後から彼らは激しい抵抗を受ける。

物資集積地という事もあり、豊富な物資と装備とを使い、防衛線を構築したザフトアフリカ共同体軍は、彼方此方にトラップを仕掛け連邦軍を待ち受けていた。

瓦礫の隅から銃撃を受け、ビルの壊れた窓から対戦車ミサイルが放たれる。

圧倒的な火力を持つ61式戦車も、取り回しのし難い市街戦では分が悪く、戦線は泥沼化し、ビル一つを争う血で血を洗う戦いへと否応なく陥ってしまう。

攻勢から五日、時間をかければ前線から増援が呼び寄せられ進行部隊は市街地と野外とで挟み撃ちになってしまう。

此処に来て連邦軍は市街地の被害を考えず、ペセタの攻略だけを念頭に砲撃による活路を見出すことになる。

市街とを瓦礫の山と化し、撤去の暇も惜しんで戦車の主砲で無理やり吹き飛ばし、道を作る。

市街地中央、ペセタ市官庁前を目指し進む歩兵部隊の前にザフト軍のMSが姿を現す。

MSは三機、どれもジンの改良型でマニピレーターには武器を持たず、代わりに人間で言う手の甲の部分に二対のクローが両手についていた。

肩にはマシンガンやレールガンを装備し、胸の部分には足元を狙えるように機銃が取り付けてあった。

今まで温存されていたザフト市街地戦の切り札が連邦軍歩兵部隊に襲い掛かる。

「クソっ、話が違っぞ！！あんな奴見た事がない。」

「愚痴を言っでないで頭を下げろ。来るぞ！！」

ビルの陰に隠れ頭を伏せた直後に、ビルにレールガンが当たり、周辺に破片を撒き散らしながら大穴を開ける。

ベン・ミラー軍曹はヘルメットに当たる破片の音を聞きながら今までのことを思い出していた。

俺達第689歩兵小隊は、ペセタ市攻略戦に駆り出されこうして部隊全員が地獄の市街地戦を潜り抜けてきたが、戦いそのものは凄惨を極めた。

ビル一つを制圧する為に半日を費やし、野外で寝ているところをスナイパーに襲撃されたことさえあった。

逃げ遅れた市民の遺体が敵味方関係なくそこら中に転がり、回収されないまま酷い臭いを出していた。

俺達を率いるベン・バーバリー中尉殿は、地上での歩兵による対MS戦術の確立の為にこの戦線に送り込まれた。

中尉自身はいい人だと思うが、何分歩兵でMSをやれ、てのが可哀しい。

だが、中尉はそんなことに耳を貸さず、ただただ俺達は命じられるままになっていた。

「やべ、機銃掃射だ。早くビルに隠れる!!」

新型のジンの肩から放たれるマシンガンの掃射がコンクリートの地面を穴だらけにして、ついでに残っていた戦車を蜂の巣にしていく。

「最後の戦車がやられたぞ!! 一体どうすりゃいいんだ。」

「本部に救援は、ヘリボーンは何時来るんだ。」

俺達の目の前に現われたあいつ等は、狭い道なのに戦車の一撃を全てかわし、あつと言う間にオレ達を蹂躪した。

ビルに近かったオレ達小隊はすぐにビルに退避し、敵の攻撃をやり過ぎしたが、そのまま道に残っていた奴らは皆踏み潰されるかミンチになるかだった。

「いいか、お前達、ここが踏ん張りどころだ。全員対MS戦用意、武器を掻き集めろ！！奴の背後に回って背中を攻撃するんだ。」

このままじゃやられる。そう感じた俺達は中尉の指示を理由に行動を開始した。

小隊は丁度、お互い両側のビルに隠れ、向こうの小隊は中尉の右腕パパ・シドニー・ルイス特技曹長が率いることになった。

瓦礫に隠れるようにM-101A3リジーナなんて大層な名前のついている実際は対戦車ロケット弾を構え、MSの膝の部分を狙うようにして照準を合わせる。

と、突然MSが振り向きこっちに目の部分を向けた。

気付かれたか！！

だが、その一瞬の停止が命取りになった、背後に回りこんでいたルイス特技曹長の部隊が構えた対戦車ロケットが奴の背後を直撃し、コンクリートの剥げた地面に倒れる。

「やったぜ！！これでおれたちや勲章もんだ！！」

が、残っていき二機が両側のビルに向けてマシンガンやレールガンを乱射しビルを倒壊させていく。

俺達は装備を引っさげ倒壊するビルから逃げ出さなくてはならなかった、だがその目の前には奴等が居た。

咄嗟に隠れた俺を除いた奴等全員が、奴等の両膝から飛び出した新型の対人地雷によって体を破片が貫き、あたりは一瞬で血の海と化した。

ふと俺の目に中尉が瓦礫に向かって走って行くのが見えた。

「あの野郎、オレ達を見捨てて自分だけ逃げるつもりか。」

何時でも撃てるように拳銃のホルスターに手をかけ、中尉を追うと瓦礫の向こう側は丁度MSの背後に出ていた。

「何やってる、付いて来い。そこにあるランチャーを拾え!!!」

中尉の指示で我に帰った俺は、落ちていたランチャーが装填積みなのを確認し中尉についていく。

「いいか、奴の足の関節を狙え、俺はこいつをお前は向こうをやれ。」

二機のMSは気がついていないのか、目の前の瓦礫に集中する、と瓦礫の中からジープが飛び出し荷台で銃を乱射するルイス特技曹長の姿があった。

「曹長!!!無茶です逃げてください。」

が、俺の悲鳴もむなしく、次の瞬間曹長が乗るジープは蹴り飛ばされ、容赦なくそのマシンガンを叩き込まれた。

あれでは生きては居まい、俺は曹長の敵を取る為照準を背後にあわせ、

「今だ撃て!!」

中尉と同時のロケット弾を発射し、中尉のロケットは見事MSの関節に当たってMSを倒したが、俺のロケットはそれでビルに当たってしまった。

「クソっ外れた!!」

が、次の瞬間には物凄い速度で振り返ったMSの機銃を浴び、俺と曹長は瓦礫の山から叩き落された。

.....俺も年貢の納め時か.....。

足に銃撃を受け、動けない俺は隣を見ると、血達磨になっていた中尉が目に入った。

ああ、俺もこうなるのか。

MSが俺にマシンガンの銃口を合わせ、その瞬間に横から対戦車ミサイルが肩に命中し、MSと俺の間を通り過ぎるようにヘリボーンが現われた。

ヘリに銃口を向けようとヘリの方ばかりに注目した結果、もう一機

のヘリに気付かず、背後から必殺の一撃を受け、あんなに苦労したMSはその巨体を崩れさせた。

俺はこのとき、漸く要請したヘリボーンが来たのだと悟った、そして何故もつと早く来てくれなかったんだと後悔した。

その後、後続の部隊に無事救助された俺は野戦病院に送られ、担架の中でペセタ市の陥落を伝えられた。

ヘリボーンが遅れたのは、本部から送られた降下部隊の援護の為だそう。

残っていたMSはあの三機だけで、俺達はまんまと囲にされ、その間に敵司令部を攻略、引き返してきたヘリボーンによって俺は救われたのだ。

全くふざけやがって。

何でもつと早くにそれを教えてくれなかったんだ。

そうすればあんなに死ぬことはなかったのに……………。

その後、瓦礫の山の上で俺は支えられながら勲章を授与された。

寡兵の中MSを二機も仕留めたその功績に報いる為だ。

中尉は奇跡的に一命を取り留めた、運よく臓器を外れていたらしい。

だが、俺の方はもう除隊だろう。

打ち抜かれた足の神経が傷つき、歩兵としては致命的だ。

後方に送られる為に、ヘリに乗せられた俺は、廃墟となった街を見て、かつての戦友たちのことを思い出していた……。

第三十七話・MS（モビルスーツ）

Hunting（ハンティング）

今回登場したMSキマイラは大分前にアンケートで頂いた教授さまの作品です。

この場で改めて感謝の意を伝えたいと思います。
素晴らしいアイデアをありがとうございます。

設定集（前書き）

此処にある設定集は感想で何度も寄せられた質問に対して予め予防線として書いておくものです。

あくまでも現時点での設定ですのでまだまだ明かせないものも多くありますが、作品が進み次第乗せていきたいと思えます。

また、こちらの乗せて欲しい設定がありましたら、感想のほうにお寄せ下さい。

設定集

世界観

再構築戦争により連邦から脱退した国家群が形成した北半球を中心とする国家群（大西洋連邦、ユーラシア連邦、東アジア共和国、スカンジナビア王国、赤道連合、オーブ連合首長国）とブリテン島インドセイロン島及び赤道以南を中心に形成された地球連邦とが存在する。宇宙においては独立国としてサイド3のジオン共和国が内外ともに承認され、L5のプラントにおいては独立運動の真つ最中。L5事変及び血のバレンタインデーによって大西洋連邦、ユーラシア連邦、東アジア共和国などプラント理事国が同盟を結び連合軍を結成。戦争が勃発するもMSを要するザフト相手に連合は連戦連敗。遂に地球にまでザフトの侵攻を許してしまう。

その後地球連邦による両国間の仲裁が図られたが結局合意とはならず連邦も否応無しに戦争に巻き込まれる事となる。ジオン共和国も連邦との同盟に基づき宣戦を布告し現在三すくみの情勢で地球宇宙において争いあっている。

エネルギー事情。

地上では原子炉が主流で一部国家では地熱、太陽光、太陽熱発電によって賄われているが、殆どの国が原発に頼り切っている。

地球連邦は軍用に各軍事拠点に丸々大都市一個分を賄えるほどの発電量を誇る核融合炉を配備し、隠匿していた。

NJにより地球のエネルギー事情は逼迫し、多くの国でインフラの破壊と餓死者や暴動による犠牲者、経済的打撃で国として成り立た

なくなつた国家が続出。各地で難民を生む。

中立国など被災当初から連邦から多大な援助を受け、U・C・0079六月現在では多くの国が持ち直し始めているが、しかし、難民の流入で社会不安が増大し、いぜん予断を許さない。

軍事技術

C・E・連合側は特殊な粒子系P・S装甲やミラージュコロイド等の技術に優れ対ビーム装甲やアンチビーム爆雷などを開発装備している。ザフトは高出力のバッテリー関連で優れ技術や部品の精度において連合を大きく上回っている。その他、量子コンピューター関連でも進んでおり連邦が進める光集積回路と開発競争を行っている。U・C・連邦・ジオン側は実弾系列やミノフスキー粒子に関連する技術に優れ、メガ粒子砲など連合やプラントに比べ威力の高い兵器や、ミノフスキークラフト等全領域での活動や、豊富な通常兵器と補助兵器などで安定性が高い。

動力関係

連合ザフト系列はエイプリルフルクライシス以降大型艦はレーザー核融合炉を使用しそれ以外は太陽電池などバッテリー駆動にシフトしている。

連邦・ジオンも基本似たような形だが、ミノフスキー・イヨネスコホワイトベース型核融合炉等のNJに左右されない動力を保有し艦隊旗艦やWB等の特務艦に採用している。また一部MSにも核融合炉を動力とするものがあり、連邦において最強のMSシリーズとして知られている。

地球地理関係

地球連邦

ブリテン島：再構築戦争の折ユーラシアにもアメリカにも屈せず北半球で連邦に最後まで加盟し続け、後に両国の緩衝地帯として機能する事になる。地球連邦海軍大西洋艦隊の寄港地がありベルファスト基地は欧州随一の軍港として知られている。嘗ての戦争の教訓から滑走路等は山を削り貫いた地下基地に建造され、ブリテン島そのものが不沈空母と化している。

開戦当初ユーラシア側からの侵攻が予想されるも、N.Jの影響で国内問題が噴出し結果大西洋連邦との間で制空権制海権争いに終始する結果となる。

最近極秘裏に物資の集積が行われているとの情報もあるが果たして
.....

インド：北東北西よりユーラシア、東アジアの圧力を受けるアジアの峠。地球各地に食糧の輸出と優秀な労働力により防衛は強固。マドラスにアジア方面軍司令部が置かれ両国の侵攻に備えている。地球連邦インド洋艦隊の寄港地でもある。

南アフリカ：政治的経済的な要所であるダカール。アフリカ防衛の要キリマンジャロ基地があり、ザフトと唯一戦線を接する地域である。0079六月より始まったアフリカ侵攻に対してジオン軍と共に強固な防衛ラインを引く。

オーストラリア：比較的戦争とは無縁な穏やかな地ではあるが、条約によりカーペンタリア湾をジオンが租借しジオン潜水艦隊の母港

となる。

太平洋艦隊の寄港地であるポートモレスビー基地との連携により開戦から着々と戦力を整えている。

南米：地球連邦軍総司令部通称ジャブローがあると言われる地域。しかし、その具体的な中心部は誰も知らず、また南米それ自体が難攻不落の要塞と化しているためコロニーの直撃以外壊滅させることはほぼ不可能である。

地球連合

ニューヨーク：旧ニューヨーク。再構築戦争の折復興し名を改めた。ロゴスの膝元でもある。

カリフォルニア：地球連邦時代には此処に一大基地を建設する案があったが、大西洋連邦になってからは基地建設は中断されている。

パナマ：大西洋と太平洋を結ぶ運河の要所であり、宇宙への出口マストライバー施設も完備している。現在大西洋連邦が占領中、運河を挟んで連邦とは日々小競り合いが起きている。

ハワイ：大西洋連邦太平洋艦隊の本拠地

北京：東アジア共和国首都

カオシユン：東アジア共和国所有のマストライバー。ザフトの次なる攻撃目標か？

オデッサ：ユーラシア連邦の重要な資源地帯。この一帯で後にNJ

Cのマテリアルベースとなる鉱物が眠っている。

ビクトリア：ビクトリア湖を灌漑して建造されたマスドライバーバ
ビリスがあつたが、開戦初期ザフトの奇襲によって陥落している。

アラスカ：地球連合軍総司令部。原作ではサイクロプスによって壊
滅したが果たして……。

グリーンランド：原作では壊滅したアラスカの変わりに地球連合軍
総司令部が置かれた。現在は基地を建設中であるが果たしてアラス
カにはサイクロプスが運び込まれているのか？

ヘブンズベース：デイスティニーにおいて、ロゴス派の牙城として
対ロゴス同盟と激しい戦闘を繰り広げた。アイスランド島丸々一つ
が軍の工廠と要塞を兼ね非常に堅牢な防備を誇った。

C・E・70ではまだ要塞としては機能しておらず、まだ建設の途
中である。

ザフト&親プラント国家

バナデューヤ：アフリカ共同体の首都、バルトフェルド隊が駐留し
ている。

ナイロビ：アフリカ共同体第二の首都。

バビリス：ビクトリア攻略のさい奪取したマスドライバー。現在急
ピッチで修復が行われプラントとの航路を開こうとしている。その、
資材確保の為ザフトは南アフリカへと侵攻する。

ペセタ：南アフリカ侵攻の際に物資集積地となった都市。しかし、兵站が伸びきり攻勢の限界に達した所を連邦軍に付かれ都市を攻略されてしまう。攻略の際激しい市街戦が展開され、大勢の市民が犠牲となった。

スエズ：地中海の東の出口。ユーラシア連邦によって占領されていた同地を、アフリカ共同体と共に攻略し以後、北アフリカにおけるプラントの影響力を確固たる物とした。エルアラメインによるバルトフェルド隊の活躍が特に顕著である。

ジブラルタル：地中海の西の出口。ザフト潜水艦部隊の本拠地が置かれている。

中立国

スカンジナビア王国：スカンジナビア半島に作られた連合王国。比較的NJの被害が少なかった地域の一つ。

赤道連合：大国にはさまれた不遇の国家。中立を謳うも、領海内を常に他国の船が監視する状況に不満を募らせている。

オーブ連合首長国

オノゴロ島：オーブの国策会社モルゲンレーテの本社が置かれている他秘密ドッグや研究施設などを多数保有する。

カグヤ：オーブが保有するマスドライバー施設。原作では自爆により破壊されているが……。

アミノミハシラ：オーブが戦前より建設を行っている軌道エレベーター。従来のHLEVシステムよりも遙かに高効率であり現在は軌道衛星上で建設が進んでいる。ここに拠点を置くオーブ氏族の一人サハク家頭首ロンド・ミサ・サハクの居城としても有名でありオーブ本国とは一定の距離を保った立場である。地球連邦軌道艦隊とは相互不可侵を結んではいるが、サハク自身は戦力の強化に余念がないようだ。

組織関連

ジャンク屋組合^{ギルド}

単にギルドとも訳されることも。ジャンク屋とはそもそも宇宙空間でのデブリ回収業者を指していたが、地球連邦のコロニー公社のような組織だった存在ではなく殆どが個人経営であった。しかし、大戦勃発により宇宙や地上での治安が悪化に伴い自分達の安全を確保する必要に駆られた。こうして幾つかのグループが作られたが組織の繋がりとしては弱く、世界中で求められるほどの活動は出来なかった。それに目をつけたマルキオ導師や他の先見ある人物達が交渉し資金を集め、遂にジャンク屋組合^{ギルド}として業界を纏め上げる事に成功し、また世界各国の首脳と話し合った結果ジャンク屋はある程度の権利を認められるほどまでになる。マルキオ導師はこれを国際条約として締結したかったが、地球連邦並びにその支援を受ける中立国などが難色を示し、逆に連合、プラントなどの国家がこれ等を承認した。

ジャンク屋の特権としてジャンク屋ギルドを認めた国家の領土内に限り兵器の回収を認められ、またそれらの国ではジャンク屋ギルドのマークを付けた船舶は戦時中に限らず自由に出入りが出来る。回収したジャンクの売買は自由に行って良く、また兵器の保持（自

衛に限り）も認める。並びに業務上知りえた事は守秘義務がありジャンク屋ギルドのメンバーは常に中立で特定の国家には加担してはならない。

が、そもそも国家の範疇外である彼らは無法者と言ってよく、特に条約を結んでいない国家との間で無断にジャンクを回収するなどの問題も数多くある。一番大きな問題としてL1の地球連邦所属コロニーサイド5事変であり、連邦にまだ所属が認められているコロニーを勝手に占拠し挙句コロニー市民の財産を略奪したとして連邦との間で問題となった。結果連邦軍が艦隊を派遣しジャンク屋ギルドは降伏。多くの組員が逮捕される結果となった。

このためジャンク屋ギルドの求心力は一時低下し、各国でも波紋を呼んだ。

各国のジャンク屋への立場

連合・プラント 取り合えず承認。

中立国 同じく承認。一部友好国も。

連邦 非承認。連邦領への立ち入り禁止及びジャンク屋の全ての権利を認めない。

ジオン 同じく非承認。勝手なジャンク回収に対して無警告の攻撃を容認。

火星（マーシャ等）連邦の属国状態の為表向きは判断を保留。しかし裏では技術や資源の取引をしており反連邦、独立運動に備えている。

国際連合

戦争前に連邦を除き全国家が参加していた国際機関。しかし、コペルニクスの悲劇により首脳部全員が死亡。プラント理事国による連合の結成により発展解消という建前で事実上解体される。

ブルーコスモス

本来は地球環境を保護する自然保護団体だったが、コーディネイターの存在を自然の摂理に反するとして過激化。現在はロゴスの支援も受け組織を拡大し各国にシンパを広げている。その過激なテロリズムと思想は連合軍にも広まり一部では今回の戦争の要因の一つとも言われている。

ターミナル

現状の世界を憂い、各国の志を同じくする有志の下で作られた地下組織。様々な組織にメンバーが存在し独自のルートから情報収集活動をして世界の状況を好転させようと日々活動をしている。嘗てシィゲル・クラインや若き日のジオン・ズム・ダイクンもメンバーでありこの時二人が知り合い以後のプラントジオン間の交流にも繋がった。現在は戦争終結のために穏健派であるクライン議長にマルキ才導師が組織の運営者として活動している。

一族^{クライン}

人類を存続させる事を目的として組織。一族という名称を持っているがメンバー自体に血の繋がりはなく情報操作や戦争の誘発、阻止などによって世界を動かしてきた。一説にはラプラス事件を裏で操っておりその後の再構築戦争を引き起こした黒幕とも言われているが………。

ロゴス

地球規模の軍産複合体の名称であり、ブルーコスモスの盟主であり国防産業連合理事であるムルタ・アズラエルが現在指導者としての

立場を取っているが、本来はそれほど反コーディネイター色の強い組織ではなかった。そもそもは地球連邦の圧倒的な国力に対抗する為に連合よりも早くから各国間の水面下で協定が結ばれ、地球連合の下地にはその経済的な太い繋がりの上に成り立っている。その存在は人類の有史以来から始まるとされるが実際は再構築戦争で連邦の支配を嫌った資本家達の集まりが母体である。しかし連合軍結成の折異なる国家同士に共通の兵器や装備、さらには物資等を供給するなど組織としての力は間違いなく地球上でも屈指の実力を誇り、現在は大西洋連邦を中心にN.Jの被害から立ち直りつつあり戦時特需による利益で今までの損失の埋め合わせを行っている。

第三十八話 - 新星攻防戦 -

新星

もともとは東アジア共和国の資源衛星であり、産出される鉱物資源はL4のメンデルコロニー群の建築資材として重宝されてきた。

開戦と共に、連合軍の重要な資源拠点として新星には艦隊が駐留し、世界受講傍線の後は、地球と月とを結ぶ重要な航路として要塞化が進められ

てきた。

C・E・70六月

宇宙での拠点確保と資源確保を兼ねザフトはL4に侵攻。コロニーメンデルを巻き込んだの攻防は既に三週間を過ぎようとしていた。

ザフト指揮官であるラウル・クルーゼは、旗艦ヴェサリウスで指揮を取りながら、敵の消耗が思った以上に早いのを感じ取っていた。

既に攻防も三週間を過ぎ、駐留艦隊の凡そ半数を撃沈したが、こちらの被害といえは軽微に留まっている。

このまま行けば最終的にはザフトの勝利だろうが、ただ単に要塞を落としに来たのではなく、攻略した後、要塞をL5のプラントと月との間まで

輸送しなければならない。

その為に、無駄に戦力を消耗したくはなく、今までも直接決戦するようなことはせず、後方のコロニーメンデルとの連絡を絶つような動きをして

、それに釣られて出てきた艦艇を落とすし、また引きこもっても補給のあてもなく結局はコロニーとの補給戦を確保する為にも何度か艦隊を派遣せ

ざる終えなかった。

その、事如くを退け、幾らか時間がかかってはしまったが、こちらの消耗を少なく収める事が出来た。

そろそろ本格的に攻勢に出てもいい頃だと、ラウル・クルーゼは判断し、ザフト全部隊に総攻撃に指示を下す。

漆黒の宇宙を切り裂くビームとミサイルの応酬。

連合軍は、艦隊の半数と共に機動戦力の実に六十パーセントを失い、残った機体も旧式機や満足な補給も修理も受けられなかった機体ばかりだ。

対するザフトも消耗はしていたが、連邦軍がL1のコロニー移送の隙を突き、本国からの補給と、地球から直接打ち上げられた物資で比較的戦力

の維持に成功していた。

ザフトは真つ直ぐ力押しをするようなことをせず、多角方向から要塞に迫り、応戦の為に撃した駐留艦隊を襲う。

機動戦力で劣る連合は、要塞の火力に縋るしかなかったが、そもそも未完成の要塞では十分な火線も維持できず、期待したほどの効果は挙げる事

がなく、ザフトMS隊は容易に連合艦隊に取り付く。

駐留艦隊が壊滅するまでそれ程の時間はかからなかった。

艦隊を失った要塞は脆く、MSと艦砲射撃により対空砲火を無力化され、あっさりと要塞は陥落する。

基地司令は撤退のタイミングを誤り、最悪要塞を自爆する手はずが、撤退が遅れた為自爆が不十分になってしまう。

この思わぬ幸運に恵まれたザフトは、要塞を攻略して直に移送準備へと入り、簡単な補修と施設の復旧に努め、こうして新星攻防戦は幕を閉じる

。だが、今回の戦いで一番の被害を受けたのは連合でもザフトでもなく、L4のコロニーメンデルだ。

新星は元々東アジア共和国の管轄ではあったが、L4に建造するコロニーメンデルの建設資材の調達衛星でもあった。

故に比較的両者は近く、その為今回の戦闘でコロニーとの連絡を巡り互いに幾度となく戦い、そして……メンデルは幾つもの流れ弾で壊

滅した。

この事件は連合とプラントの非道として世界中に報道され、中立国を中心に反戦運動が盛り上がるが、しかし、それらの声も直にエイプリルフー

ルクライシスの犠牲者の怨嗟の声とブルーコスモスの暗躍によって飲み込まれていく。

これ等も全ては、たった一人の男の舞台劇の一部だとも知らず……

要塞の補修は一週間で済ませ、曳航船に引かれてL5へと移動を開

始する要塞を守るように周囲に展開したザフトは、途中でさして妨害も受けず

無事に要塞を移送する事が出来た。

これは連邦はコロニー移送ということで三個艦隊を出勤させ、また強固に守りを固める要塞を相手にするよりも、連邦・ジオンともに脆弱な輸送

航路を狙った通商破壊の方が成果をあげ易く、何度か威力偵察部隊を派遣はしたが、本気で要塞を奪取しようという事は余り熱心ではなかった。

ザフトは新星をボワズと命名、L5と月とL1との丁度中間地点に置き、ここをザフト防衛線と定め以後要塞としての形を整えていく。

だが、宇宙でのバランスが徐々に地球連邦、ジオン共和国に傾いて来つつあるのは覆しがたく、地上での苦戦が、ザフトの庭である宇宙でも影を

刺し始めてきた……………。

第三十九話 - V作戦 -

U・C・0079七月

アフリカ中部における連邦とザフト・北アフリカ共同体との戦争は膠着状態に陥り、状況を何とか打開しようと試みるも、実質的な指揮官であった砂漠の虎ことアンドリュー・バルトフェルドが北アフリカ共同体内のジオン・連邦のゲリラ戦に悩まされそれを鎮圧する為に後方に下げられてしまう。

後任の指揮官も、ただ悪戯に力押しをするばかりで結果として無駄な犠牲が増え続ける状況には何ら代わりがなく、戦線は依然として膠着状態が続いた。

連邦軍はジャブローからの補給で戦力を整え、着々と反攻作戦への準備を整えていく。

所変わって此処はサイド7

戦争がなければ地球連邦七番目のコロニーとして完成していた筈だが、地球連邦政府が宇宙の安全が確保されるまでコロニーの建設を行わないとして、サイド7は既に人が住んでいるのにもかかわらず、未だに完成の日が分からない事で市民の間に少しずつ不安が広がっ

ていた。

そんな中、コロニーの内壁と外壁に設けられた巨大な空間に二機のMSが佇んでいる。

一機はイエローカラーの装甲をしていて、MSの顔に当たる部分はゴーグル状になっており、もう一機は白と赤と青のトリコルカラーの派手な機体で、顔の所ももう一機と比べ完全な瞳の形になっており、人間臭さを残していた。

「ではこれよりRX-78-1、RX-78-2両機による機動実験及び試作粒子砲の射撃実験を行います。両機スタート位置にどうぞ」

実験室を望む観測所に詰める科学者達は忙しく動きながら、各種の機材を操作していく。

眼下に広がる空間に佇む二機のMSは両機とも等間隔を保ちつつスタートラインに立ち、カウントダウンの終了と共に一気に駆け出す。舗装された道から段々荒地に変わり、障害物を乗り越え急な坂を駆け上がっていく。

「やはり二号機の運動レスポンスは素晴らしいですね。テム博士もそう思いますよね？」

観測所では双眼鏡を当てて観察していた男が、後ろで実験の様子を見ていたテム・レイ博士に声をかける。

「いや、まだまだだよ。三号機で試しているマグネットコーティン

グのデータさえあればガンダムはもつと強くなれる」

テム博士はモニターに表示される各種データを比較しながら実験の様子を伺い、既に頭の中では次の事を考えていた。

機動実験も佳境に入り、現在はスラスタ出力を最大限まで上げて、上昇の限界点まで高度を上げ続けていく。

そして……。

「燃料がレッドゾーンに突入しました。飛行実験を終え回収地点に戻ってください」

機動実験が終わり次は問題の射撃実験に移る。

連邦のMS開発は戦前より行われてきたが、しかしそれは人型戦車の枠を出すことはなく、初期には戦車の車体にそのままMSの上半身を乗せたような物まであったが、彼らが今作り出そうとしているのは完全に白兵戦を主眼とした真の意味で連邦初となるMSであった。

そして漸く長年の研究の成果の結果こうしてRXシリーズとして外見上は完成されていたが、問題の中身やまたパイロットの問題。それと戦う為の武器が必要になってくる。

地球連邦は地球圏のどの国家組織よりもビーム系の技術に長けており、連邦初となる完全な人型MSの主兵装としてビームライフルとビームサーベルの携帯は必須であった。

しかし、エフィールドを用いてミノフスキー粒子を安定させようと

も、従来のバッテリー駆動では出力が足りず、単純に威力や収束率を落としては兵器として使い物にならない。

その後、ビーム兵器の小型化、実用化には大いに悩まされ、様々なアイデアや工夫を凝らし幾つもの試作機が作られた。

今回の射撃実験では従来の内部ジェネレーターから共有されるエネルギーでビームライフルを撃つのは違い、外部に外付けのジェネレーターを設け、MS本体と分離する事により安定した出力を得ようとした結果だったが・・・。

射撃実験場に到着した一号機及び二号機はそれぞれ別のタイプのライフルを手に持ち、的である廃車となったガンタンクに照準を合わせる。

一号機はライフルその物にジェネレーターをつけた結果、ライフルそのものの重量が増し片手では保持出来ず両手で構えて撃つ。

二号機の方は、背負い式のジェネレーターからケーブルで供給されたエネルギーを使い、ライフルを撃つも、ケーブルそのものが邪魔となりこれも大きな課題を残している。

実験の結果、一号機が使用したビームライフルは重量及びライフル本体にジェネレーターを搭載した為廃熱が追い付かず照準性能や整備性が悪化し、二号機の方もジェネレーターの供給方式その物が機体の機動の妨げとなり、背負い方式の結果矢張りこちらも費用の上昇と整備との関係で成功とはいえない。

「今回の実験では両ライフルともメガ粒子のドライブには成功している。だが肝心の収束力やエネルギーロスの問題。廃熱やMS本体

のリンクの誤差なのでまだまだ改善の余地がある」

テム博士からのダメだしもくらい、研究者一同再び同じ壁に突き当たるとる。

「テム博士、従来のバッテリー方式を改善したほうが良いのではないですか。現在のジェネレーターの出力ではライフル、ソード共に十分に稼働できません。矢張りMS用の小型熱核融合炉の開発を進めたほうが良いと思います」

はあ、まあ結局はそこに行き着くのだが。

「軍からの要求はバッテリー駆動でのMSだ。ジェネレーターを入れたことで重量は増したが従来のMSに比べ稼働時間は大幅に延長している。それに今の我々では核融合炉の小型化まで予算が回らん。皆分かっているだろう、あともう一押しなんだ頼む」

テム博士はいい人だと思う。

地球出身のエリートだと思っていたが科学者としても優秀だしこうして頭を下げている姿を見れば純粹に人物として好感が持てる。

でも、人というのは安易な方法が提示されればそれに飛びつきたくなる性だ。

まして核融合炉を装備すればそれは現行いや今世紀最強のMSが誕生するだろう。

皆その幻想に捕らわれているんだ。

私もそうだが、核融合炉とガンダムとが合わされば最強のMSが誕生する。

歴史に名を残す兵器の誕生に自分が携わると夢想するだけで、これ程の高揚感はなくそして現実にどんと冷めていく。

それでも開発を止められないのは私も心底この研究に入れ込んでるからだ。

願わくば、このMSが歴史に名を刻まれるようになると切に願う。

第四十話 - 大西洋海戦 -

C・E70八月中旬

ザフト潜水艦隊はジブラルタル基地から出撃し大西洋の制海権を確保する為に連合軍大西洋艦隊の基地であるアゾレス諸島に攻撃を仕掛けた。

地球連邦参戦から大西洋は地球を支配する二大勢力による制海権争いが勃発すると予想されたが、しかし当初の予想に反し大西洋連邦、ユーラシア連邦、更に地球連邦までもずっと沈黙しているままだ。

大まかな理由として上げられるのが、互いに戦力の消耗を嫌ったという点が一つ。

NJにより原子力で動く主力艦隊が無力化され連合連邦両勢力とも艦艇の改良に手間取ったという点。

更に言えば海戦当初は地球上での戦闘は予想されておらず結果として地球上の戦力が不十分なまま開戦を強いられてしまい、広大な領土を持つが故に常に戦力を前線に貼り付けておかなければいけないという状況が各国の手足を縛っていた。

無論、それでも互いに相手の戦力を削ろうと空爆や制空権争いを繰り返すも、ユーラシア連邦は北アフリカでの大敗で戦力に余裕がなく、大西洋連邦も難攻不落と謳われるブリテン島を単独で攻め落とすには戦力に不安があり結果として小競り合いに終始している。

また、イベリア半島に上陸しジブラルタルを制したザフトが何時大

西洋に進出するか分からない以上、無闇に艦隊を出撃する事も適わずこうして開戦から凡そ半年もの間大西洋は不気味な緊張関係が続いていた。

だがそれは水上艦艇に限ったことであり、いち早く復帰した潜水艦隊による通商破壊や破壊工作など大西洋では水中において激しい戦いが行われている。

当初ザフトは連合と地球連邦の共倒れを狙っていたが、自分達のあまりの進撃速度の速さで逆に両陣営とも戦力温存に走った為狙ったような機会が訪れず漁夫の利を逃してしまふ。

しかしそれでも大西洋に進出するという事はオペレーションウロボロスにおいて重要な意味を持つ。

大西洋を制する事が出来ればパナマのマストライバーを望む事が出来、ユーラシア連邦と大西洋連邦の連携を絶つ事にもなる。

次いで残る東アジア共和国のカオシユンではあるが、国内情勢が不安定な今大西洋にザフトが現われればまず間違いないくパナマを警戒しアジア近海の警戒は疎かになるはず。

そこを突いてカオシユンを攻め落とす手もあるが……連邦の裏庭を通るといふリスクが常に付きまとう為あくまでもカオシユン攻略は補助的な役割であり第一目標はパナマと定められた。

紅海において地球連邦海軍相手に通商破壊作戦を行っていたマルコ・モラシム隊長を本作戦の切札として呼び寄せせるも、モラシム自身はジオン軍が開発した新型MSの影がチラつくインド洋にから余り離れたたくはなかったが、命令を受け渋々ジブラルタルへと帰還した。

ジブラルタル基地司令は、ボズゴロフ級潜水艦十六隻を投入し予備戦力として更に八隻、アフリカ共同体の艦艇とも協力してまずは大西洋のへそであるアゾレス諸島へと攻撃をかける。

アゾレス諸島は小さい島ながらも、他に島が無い大西洋でその中心地に位置し、長らく大西洋連邦艦隊の基地として使用されてきた。

その為膨大な物資が備蓄され厚い哨戒ラインが敷かれ更に強力な艦隊が駐留しブリテン島とまでは言わずとも強固な守りを持っていた。

そこにザフト潜水艦隊は夜襲をかけた。

投入された五十二機のグリーンと支援用に三十機のデインが投入され、まず音も無く近づいたグリーンが停泊中の連合軍艦隊に襲い掛かり、更に投入されたデインが滑走路を爆撃し突然の奇襲に連合軍はなす術も無く次々と撃沈されアゾレス諸島は僅か一回の夜襲で基地機能の大半と駐留していた艦隊を失う。

連合軍も夜が明けるところにはアゾレス諸島救援の為艦隊を出撃させるも、昼過ぎに上陸したザフトMSジンにより既にアゾレス諸島司令部は降伏し、基地はザフトの手に落ちていた。

アゾレス諸島陥落の報を聞いてショックを受けた大西洋連合海軍本部は、東海岸防衛の為大西洋から艦隊を集めるも、ザフト潜水艦隊は真正面から戦うようなまねはせず、大西洋連邦とユーラシア連邦のシーレーンを断つ為通商破壊作戦を行い、時に単独で東海岸の哨戒網を潜り抜け姿を見せるなど連合軍を挑発した。

海軍のプライドを傷つけられた大西洋連邦は、市民からの突き上げ

と大統領命令もありアゾレス諸島奪還作戦を発動。

東海岸中から集められた艦隊を動員し一路アゾレス諸島を目指す。

来るべきブリテン島上陸作戦の為に温存していたアイオワ級アイオワ、リシユリユー、リットリオを投入し虎の子のアリゾナ級まで投入した。

アイオワ級は連邦軍の圧倒的な航空戦力から艦隊を守る為に、過剰ともいえる対空砲火を備えまた上陸支援用にモスポールされていた旧世紀の戦艦の主砲を流用して装備するなどその砲撃能力は侮れないものがあつた。

次いでアリゾナ級は大西洋連邦、ユーラシア連邦のみが保有する超弩級戦艦でありその五十口径を越える主砲を九門備え最強という名に相応しい武装を誇っている。

これ等のほかにも旧式ながらモスポールされていた戦艦や巡洋艦駆逐艦を復帰させ、空母三隻スペングレー級強襲揚陸艦を六隻と補給艦も含め二十隻を超える大艦隊がアゾレス諸島を目指し大西洋を横断する。

まんまと敵を引きずり出すことに成功したザフト潜水艦隊は作戦通りアゾレス諸島を放棄し、ジブラルタルに逃げ帰ったかのようにアゾレスから撤退した。

これを好機と見た連合軍はアゾレス諸島に最低限の守りを置きザフト潜水艦隊を追撃。

勢いに乗った連合軍はこのまま一挙にジブラルタルをまで奪還しよ

うと艦隊を進め遂にトラファルガー沖まで誘き寄せられてしまふ。

ここではたとえ連合軍大西洋艦隊提督は気付いた。

自分たちが誘き寄せられた事を。

この時提督は一時的にアゾレス諸島まで撤退しようと考えたが、しかしその判断は遅きに失した。

ジブラルタルに逃げると見せかけたザフト潜水艦隊はそのまま南下し、カナリア諸島に身を伏せていた。

そして連合軍大西洋艦隊がジブラルタルへと向かっていく間に、アゾレス諸島を包囲し僅かな守備兵士が残っていなかった連合軍は降伏。

ここに連合軍大西洋艦隊が退路を断たれ包囲される形となった。

補給を断たれた大西洋艦隊提督は周囲の反対を押し切り撤退を決意するもそれを逃がすまじと、ジブラルタルから出撃したMSディンが大挙して大西洋艦隊に襲い掛かる。

これまでの戦訓から予め周囲に幾重にも索敵機や哨戒機を飛ばしていた大西洋艦隊は攻撃を事前に察知し、三機の空母から出撃した制空戦闘機スピア・ヘッドの艦載機タイプであるスピア・ヘッドMを出撃させMSディンと交戦する。

MSディンは既存の航空機よりも装甲、火力、機動性に優れ連合軍の主力航空機であるスピア・ヘッドでは手も足も出なかった。

その為、連合軍ではデインとのドッグファイトを禁じ長距離からのミサイル飽和攻撃へと戦法を変えている。

今回も出撃した百二十機余りのスピア・ヘッドから長距離ミサイル、ロングランスが発射されジブラルタルから出撃した八十機のデインに牙をむく。

MSデインはミサイルが命中する前に手に持つライフルと散弾銃でもって空中で対空砲火を形成しミサイルを迎撃していく。

それでも半数以上のミサイルが弾幕を突破しデインに迫るも、MSの驚異的な運動性能によりミサイルの追尾を振り切り或いは追い過ぎさせてライフルで次々と迎撃していく。

しかしそれでも八十機いた内の十五機ほどがロングランスが命中し戦線を離脱する。

残りのデインが艦隊に迫る前に次は艦隊を守るイージス艦からの対空ミサイルが発射され思うように接近できず、更に第2次攻撃とばかり上空に上がったスピア・ヘッドが残りのミサイルを叩き込む。

MSは接近されてこそ脅威だが、事重力のある地球ではMSの機動力は制限されてしまい、更に地球上で長年戦訓を溜め続けてきた連合軍は地球での戦い方に熟知している。

敵が一撃必殺の短刀を持っているならば、こちらは長槍で相手となり敵を寄せ付けない。

敵の長所を殺し味方に優位な状況を作り出すことこそ、戦場で最も重要なことの一つである。

長距離ミサイルからの波状攻撃だが、ミサイルを撃ちつくした航空機が帰還すると状況は悪化する。

今まで上空にいたディンが次々と降下し海上すれすれを高速で飛行しはじめた。

レーダーに映る投影面積を小さくし更に空気抵抗を削ったディンの高速飛行形態は瞬く間に大西洋艦隊との距離を詰める。

スピア・ヘッドがいた為、上空を押さえられては適わないと不利を承知で遮るものの無い空中での戦いを挑んだが、MSは本来その戦場を選ばない他には無い汎用性こそが売りである。

ディンも空こそ飛べるがそれはどちらかといえば制空権の確保よりも地上の支援であり、その為余り航続距離は考えられていない分重武装を誇っている。

そして一旦ディンがその楔を外されると共に真の力を発揮した。

あつと言う間に艦隊に取り付いたディンは、まず外輪部を守る駆逐艦戦隊を血祭りに上げる。

艦隊の盾となろうとした駆逐艦六隻が瞬く間に沈み、ミサイルの口ツクが間に合わない間に今度はイージス艦が撃沈され見る間に大西洋艦隊は戦力を目減りさせていく。

再度航空機を出撃させようとした空母の甲板にディンが乗り込み、艦橋とエレベーターにライフルの砲弾を叩き込む。

両肩に備えたミサイルポッドから発射されたマイクロミサイルが命中し、辺りは火の海と化した。

大西洋艦隊提督は味方の被害報告に胸が締め付けられる思いをしなから何とか撤退しようとして指示を出す。

幸い艦隊の中核をなす船は比較的最新鋭の艦隊で固めているので思ったよりも被害が少なく、またアイオワ級がその名に恥じに猛烈な対空砲火を上げデインの攻撃を寄せ付けない。

その分、旧式艦艇で構成される艦隊外輪部の被害は正に目を覆いたくなる程だが、それでも目の前の惨状から何とか逃れようと対空砲火に優れるアイオワ級を前面に押し立て活路を開こうとあがく。

外輪部艦隊を粗方片付けたザフトではあるが、艦隊中央部は正に火の壁が迫る猛烈な対空砲火の嵐が吹き荒れ迂闊に近づくことさえ出来ない。

運悪く敵の対空ビーム砲が命中してしまったデインが、唯の一撃で粉々にされた光景を目にすれば誰しもが躊躇ってしまう。

その味方に当たってもかまわないという気迫に押されたザフトは、バッテリーの問題もあり撤退を決意し機微を返しジブラルタルへと戻っていく。

この隙に大西洋艦隊はデインの包囲網を脱し、デインの行動範囲から逃れる海域まで来ると今度は針路を北に取る。

南に針路と取れば連邦の領海を通ることになり、そうなれば地球連邦海軍南大西洋艦隊とかち合う可能性があり、北の航路を取れば大

きく迂回するような形にはなるがそれでもグリーンランドの制空権まで辿り着く事が出来れば何とかなると提督は考えていた。

それに従い、多くの損傷艦を抱え思うように船足が進まない中、大西洋艦隊は北へ北へと進んでいく。

カナリア諸島から再びアゾレス諸島を奪還したザフト潜水艦隊は、満身創痍の大西洋艦隊を追い嫌がらせのように攻撃をかける。

攻撃を受け損傷し弱まった船を真つ先に攻撃し、一旦攻撃をかけたら直さま引くということを繰り返す。

更に敵の針路上に予め潜水艦を配置し夜襲を行い、大西洋艦隊は既に出航した時の面影はない。

大西洋艦隊全艦が被害を受け、無傷な船は見当たらない。

連日の戦いで武器も弾薬も尽きかけ補給の宛てはおるか味方からの援護さえ期待できない日々を、彼等は戦い続けた。

そして、グリーンランドの制空権まで入る事が出来たのは僅かに八隻のみ。

生き残ったのはアイオワ級二隻にアリゾナ級一隻それと僅かに旧式の駆逐艦が三隻に輸送艦が二隻、それ以外は全て失われまた生き残った全艦が大破認定され長期間のドッグでの修理を要した。

そのうちアイオワ級二隻は東海岸まで曳航するまで持つ事が出来ず、そのままグリーンランドにとどめ置かれ、ここに大西洋艦隊は壊滅した。

一方的な敗北を喫した大西洋連邦は以後艦隊の行動を東海岸及びカリブ海、パナマ近海に限らざる終えなくなり、地球連邦も大西洋に新たに出現した脅威に対抗するためMSの実用化を急がせることになる。

ザフトはほぼ完勝したとはいえ広大な大西洋の制海権を握るには兵力が少なく、またインド洋において遂にザフトが恐れていた事態が起きその余裕を失っていた。

第四十話 - 大西洋海戦 - (後書き)

アイオワ級は皇国様のアイディア兵器、アリゾナ級はソロモン守備兵様のアイディアを元に出しました。

御二人ともここで感謝を述べさせていただきます。

それと折角の船を沈めて申し訳ありません。MSのない連合はザフトにとっていい鴨にされてしまうという運命なもので。

第四十一話・地球至上主義

世の中には様々な主義主張がある。

古代ギリシアにおいては千人に問えば千の答えが返ってくるという。

国家でもそつだ。

強大な国家であればあるほど意思の統一というのは至上命題となる。

それは人類統一を成し遂げた国家でさえも例外ではない。

実際その国家は二十年と経たず崩壊し、現在は僅かな土地にしがみ付く様にして存在しているに過ぎない。

だが、彼等は今でも胸を張ってこう言う。

『自分達は地球連邦の一員』だと。

地球連邦軍中枢ジャブロー

南米にあるとされる地球連邦の拠点ではあるがその詳しい中心地は誰一人として知るものはいない。

それもそのはず、広大な南米大陸そのものがジャブローでありまた

核の直撃にさえ耐えうる強固な岩盤の穿って作られた司令部は正に鉄壁。

ここを正攻法で攻略しようと言うならそれは地球連邦軍全軍を上回る戦力を持つ事になるが地球圏で最大の軍事を誇るのは連邦自身であり身内の反乱さえ起こらなければ外部からの攻略は不可能といつていい。

そのジャブローの中心部から少し離れた地下都市に築かれたビルの一室で何事か秘密の会談が開かれていた。

「では、このまま行けば戦争は早期に終結し連合とは講和、プラントは半属国としての占領というわけですか。それはいいけません」

ハバナの吸殻を水晶で作られた灰皿に落とした男は顔を顰めた。

これは別にプラントに同情している訳ではない。

そもそも今回の騒乱の原因ともなったプラントに対しては地球連邦の誰しもが含むところがあった。

では何故彼が地球連邦の勝利に否定的なのか、いやそうではない。

早期の終結という所が彼等にとって面白くないのだ。

「さようですな。最低でも一年半いや二年はやってくれなくては。それに主戦場は地上のアフリカ、アジア地域に限定して」

杖と付いた白髪の老人が男の言葉に肯定の意見をいう。

「海運も忘れてもらっては困る。それと戦争で民需は目減りする一方だが地球が戦場となってくれば地上の経済が回る。軍需は宇宙に任せ地上は民需に専念すべきだと考えるが」

彼等は一体全体何を話しているのか？

地球圏規模での未曾有をの災害と戦争が同時に起こった今次大戦でいったい何を成したいのか。

「今の連邦はまったくなくなっていない。そもそも連邦は地球の守護者でありスペースノイドの保護者ではない。アースノイドなくして地球はありえんというのに」

比較的彼等の中で若い人物が語気を強め今の政権を批判する。

別に彼等は反スペースノイドではなく過激なブルーコスモスのように絶滅など考えてはいない。

だが彼等が一番気にしているのは地球上での経済規模の縮小を問題視していた。

「ですがスペースノイド、ルナリアンの経済規模を侮る事は出来ません。悔しいですが我連邦でも地球で生産されるよりも圧倒的にコロニー産が多いのです」

実際ここ二十年間で火星への移民も含め地球圏全体で経済規模は拡大している。

だがそれと反比例して地球上での企業が月やコロニーに工場や本社を移し、各国でもそれに習う動きが活発化していた。

ここに集まっている彼等はそれらの行動に懸念を示していた。

何故ならば地球の経済規模が縮小すればまず間違いなく地球から離れられない中小企業がつぶれるか宇宙に基盤を置く会社に併合されてしまう。

そうなると初期から宇宙に拠点を置く企業にとってこれはまたとないチャンスになる。

いち早く宇宙に出たと言うアドバンテージを生かし少数の大企業による地球を含めた地球圏経済の支配、並びに地球が逆にコロニーの植民地にされる事に危機感を覚えているのだ。

「地球圏の経済を月に独占されて堪えるものか。戦争を少しでも長引かせて地球上の企業を保護し戦後然るべき時に資本を注入し再度地球上の経済を活発化させる。その為に今回の戦争連邦は勝ちすぎたはいけない」

仮に戦争を長引かせることなら出来るが、最終的に地球上に敵がいなくなつては困る。

今次大戦では長らく連邦と冷戦状態であった連合国が軒並み国力を低下させこのままでは戦後国家は残るかもしれないが連邦の敵となる存在が地球上ではなくなってしまう。

逆に宇宙はジオン共和国にプラントという潜在的な脅威が常にある。

まず間違いなくジオン共和国は今次大戦の勝利者として宇宙において強い力を持つようになる。

そうなれば中世期の世界大戦の様にジオン共和国が覇権を握る可能性がある故に彼等はジオン共和国も今回の大戦では何かしらのそう国家中枢に打撃を受けて欲しかった。

少なくとも戦後の復興経済においてジオンと言う強力なライバルを未然に蹴落とすことで地球上の復興経済資金を地球上の企業に回す事が出来る。

「故にこのV作戦。これは使えると思いますよ」

「うんそうだ。MSの早期量産体制が整えば戦争が終結してしまう。だが今この計画は我等の手の中にある」

彼等は机の上におかれた極秘の烙印が押された書類に目をやる。

「戦後の連邦に英雄は不要だ。レビル君にはさっさと引退してもらおう。その為に抜かりは無いな」

「ええ、既に情報は幾つかリークし恐らくザフトが食いついてくるはず。全く自分たちが利用されているとも知らず」

「ははは、無知なものには我々エリートが導いていく義務がある。新人類なんぞ妄想でしかない」

彼等はみな地球で生まれ地球で過ごしてきた。

宇宙に一度ならず上がった事はあっても彼らは宇宙には馴染もつとはしない。

其れゆえの傲慢さか、彼らの食事衣類にいたるまで全てが地球産でありコロニー製品を毛嫌いしているものもいる。

「だが、よくこんな情報が入りましたね」

「いえ全くですよ。彼には感謝しないといけませんね」

「そうだな、エルラン君には今後とも我々の良きパートナーとなつて欲しいものだ。はははははははは」

部屋の中に笑い声がこだまする中、宇宙では隕石に偽装したザフトの軍艦がサイド7へと忍び寄っていた。

第四十一話・地球至上主義 - (後書き)

おじさん達の暗躍だと思ったか。残念我等がエルラン中将でした(爆)

次回「ガンダム大地に立つ」

君は生き残る事ができるか

第四十・五話・ガンダム大地に横たわる -

サイド7

地球連邦が進めるコロニー開発の中で最も新しいコロニー。

しかし建造中に戦争が勃発し工事は中断、一応最低限どの施設などは揃ってはいるが既に人が住んでいる手前これ以上の工事の延期は市民感情から言って無視できない問題であり、地球連邦は最低限コロニーの環境を安定させる為コロニー公社に建造の再開を依頼。

各国も敢てこれを邪魔せず、またコロニーを攻撃された連邦がどのような報復に出るのか。

ラグランジュ1での事件以来スペースノイドの感情が地球連邦ジオン共和国に偏った今、下手に手を出そうとするものはいなかった。

だが、このコロニー公社から派遣された船団には裏がある。

それはサイド7開発が進んだ地球連邦初の本格的MS RX-78ガンダムを回収する為に船団に紛れ一隻の最新鋭強襲揚陸艦が護衛と称して随行していた。

ホワイトベース艦橋

「パオロ艦長、あと三日でサイド7に到着予定です」

「うん、よろしい。船団にも遅れた船はないな。だが気になるのは」

艦長席に座るパオロ・カシス大佐は天井にあるレーダーを見上げあ
る一点を睨む。

「アンノウンとの距離はどうだ」

「はっ、以前一定の距離を保ちつつこちらの後を着いて来ます。や
はり狙いはこの艦でしょうか」

オペレーターアンノウンの報告から不明艦に動きがないことを確認したパオロ
艦長は軍帽をかぶり直し真っ直ぐ操舵席の先の宇宙を見つめる。

「それならば機会は沢山あったはずだ。実際ルナツー補給の際本艦
は先行して航路の安全確認を行っていたのだからな。その時に何ら
かのアクションを取らないという事はアンノウンには別の目的があ
るのだろう」

パオロ艦長はそう言いつつも、心の中でこの作戦前に急遽予備役か
ら招集された時のことを思い出していた。

新型艦の艦長に成れたのは嬉しいが、しかしこの戦いで息子をなく
したせいも余り気分が高揚したとは言えず、本来はそのまま退役す
る身であった自分が何故態々現場に呼び戻されたのか。

それを考えると今の地球連邦軍内にある大きな二つの勢力の派閥問
題がかかわってくる。

ひとつはレビル大将を筆頭としたタカ派の連邦改革グループ。

もうひとつはジャブローのモグラと揶揄される今の地球連邦軍の硬

直化した体制を作った保守派グループ。

戦争が始まってから保守派は大きく勢力をそがれ逆に改革派が大きく伸びたがそれゆえに組織内で歪な構造が広がってしまったのだ。

前線に近い者ほどレベル將軍を英雄視し彼を支持するが上層部や特に中間の管理職など後方勤務の者は保守派が多い。

これはお互いに距離感の違いから出てくる問題なのだが、しかし前線と後方の亀裂が実際の戦場にまで持ち込まれる可能性が今の連邦には常に付きまわっている。

例えばアイツはアイツと親しいから補給を滞らせたり、敢て危険な最前線へと飛ばして名誉の戦死をさせたり。

そして現在。

現役いま共に派閥に興味がなかったパオロは同期よりも大分昇進が遅れ退役したときには万年中佐と揶揄されていた程だ。

だからこそ彼のようなものに今回の作戦のお鉢が回ってきた。

連邦の威信を賭けたMS開発は今後の戦局のみならず地球連邦内の改革派保守派の抗争に大きく影響することとなる。

MS開発を戦前から押していた改革派が今回の成果で戦局が好転すれば連邦軍内部での主導権を取り、逆に保守派は追い落とされる羽目になる。

退役中佐の身で再び前線へと飛ばされしかも一階級進め大佐の地位

を与えられたということは非常時の場合独自の判断を下す権限を与えると共に万が一の事態で責任の所在をはっきりさせる目的もある。

パオロは今まで連邦軍で働いてきた経験から自分が何を期待された何を背負わされているのかを薄々感じ取りつつ与えられた任務をこなしつつ行き帰りと何事もないことを祈りつつ指揮をとっていた。

第四十一話・ガンダム大地に立つ・

星星の煌きと暗黒の空間で彩られた宇宙。

人類に残された最後のフロンティアにして人類の生存を拒む最も過酷な空間。

その宇宙に浮かぶ巨大なシリンダーの物体。

スペースコロニーに、三つの影が近づいていた。

単眼、中世の騎士と野武士を合わせた様なフォルムをして、背中に一對のブースターを備えたそれらはMSと呼ばれる人類が開発した宇宙で戦う

為の鎧であった。

三機はセンサーの死角になる部分を通り、コロニー表面に静かに着地し建設用の大型物資搬入口の扉を開く。

ゆっくりとコロニーの遠心力が作り出す人口重力の中を進みとある場所に出た。

コロニーの大地の部分と外壁の丁度真ん中の位置する広大な空間。

無論酸素など無い荒涼とし大地が広がっている中一人があるモノを

発見する。

近づいてコンピューターが識別したそれは通称ガンタンクと呼ばれる連邦のMSモドキであった。

しかし、何かの標的にでもされたのか、両肩の砲身部分は取り外され右肩から半身がドロリと溶け落ちている。

ライブラリーで検索しても、MSの装甲をこつまで破壊する兵器など見付からない。

そして彼らは気付く、周囲に同じようなものがゴロゴロと転がっているのを。

背中に悪寒が走る。

ここはMSの墓場だ、そして自分たちは新たな加わる仲間だと。

最早動かないはずの唯の鉄屑となったMSが今にも動き出しそうな気がして彼等は段々と平常心を失っていった。

P i P i P i

警報、衝撃、迂闊。

余りにも迂闊であった。

此処はすでに敵地、それなのに三機が一箇所に集まっているなどまるで見つけて下さいと言わんばかりの暴挙。

事実コロニーの内側と外側の空間を警戒する哨戒機が三機のジンを発見するのにそうは時間がかからなかった。

と、同時に三機も又本来真っ暗な闇が広がっているはずの地上部分、彼等にとつて外壁を下とすると丁度真上にコロニーの大地がくるがその一箇所に不自然な光を発見したのだ。

夜間飛行する航空機が灯す光の反射を察知した彼らは自分たちが敵に発見され包囲されようとしていることを悟る。

すると一機が手にもつ76mm重突撃銃を上空に向けあろう事が哨戒機に向け発砲した。

この瞬間警報は戦闘開始の合図となり、コロニー全域にシエルターへの避難勧告が出されたのはMSジンが地表に出る寸前であった。

宇宙世紀0079 九月十八日 サイド7近海 ローラシア級イ
ゴリ

サイド7に向かう輸送船団を追跡してから二週間。

連邦の紹介網を潜り抜け、常に緊迫した艦内で既に乗員のストレスは限界に達しようとしていた。

艦長であるアーノルド・クオリヤーロフは輸送船あがりの四十代ほどの男性であるが、目元の大きく熊を浮かべ正に疲労困憊。

乱れた服装を繕う力も無く、グツタリと艦長席に横たわっている。

彼らはプラント評議会直々に指示を受けて動いていた。

ザフト情報局が掴んだ地球連邦のMS開発計画。

長年ザフト内部で噂されていた連邦のMS開発は此処に来て遂に事実である事が判明したのだ。

早速連邦のMS開発状況を躍起になって探ろうとしたプラント評議会だが、連邦の分厚い防諜の前に早くも頓挫しようとしていた。

だからこそ、ザフト及びプラント評議会は危険を承知で貴重な戦力から抽出し彼らはその白羽の矢が刺さったというわけだ。

慎重に連邦の勢力圏を掻い潜りつつも、運よく目的のMS関連と思わしき新型艦を発見した彼らは慎重に慎重を重ねて追跡し、遂に連

邦のMS開発の拠点と思わしき場所を発見したのだ。

サイド7近海まで辿り着いた彼らは、そこで微量ながらミノフスキ
ー粒子の反応をキャッチした。

クオリヤーロフ艦長はしかし緊張の糸を解そうとせず、浮遊してい
たデブリの影に隠れてじっと機会が来るのを待っていた。

偵察に向かわせた三機のジン。

これ程の戦力を偵察のみに使うなど本来ならばあり得ない事なのだ
が……。

サイド7内部

爆発、轟音、炎が揺らめきコロニーの脆弱な大地に二体の巨人が聳え立つ。

偵察に出たジンだが、しかし内部で連邦が設置したセンサーに発見され一人が暴走。

コロニー内で戦闘を始めるといふ暴挙に出た。

突如として出現したザフトのMSは、慌てて迎撃に出た連邦軍を蹴散らし連邦軍期待のMSが乗るトレーラーに迫ろうとしていた。

「何をやっている。早くトレーラーを動かせ、民間人は後回しでいい。何としてもガンダムだけは守りぬくんだ」

ガンダム開発主任であるテム・レイ博士はガンダムに搭載するミノフスキー・イオネスコ型核融合炉の調整中に警報を聞き直さまガンダムをトレーラーに乗せて移動させようとしていた。

だがしかし、MSジンの攻撃で道路が崩落しトレーラーは立ち往生してしまったのだ。

「テム博士、此処は危険です！！一刻も早くシエルターに退去を」
トレーラーを守っていた警備兵の一人がテム博士に近づいて退避するよう促す。

「何を言っているんだ。まだコイツは完成したばかりなんだぞ。それをみすみす敵に奪われるなど・・・」

テム博士が最後まで言葉を言い切る前にジンが放った砲弾がトレーラーの近くを直撃する。

「うわー!!」

道路の支えの部分を撃ち抜かれ一気に崩落する道路からトレーラーと共にテム博士達が転げ落ちる。

ドオオン、と土ぼこりをたてながらトレーラーは窪地の下で止まり、覆われていたシートの一部が剥がれその素顔を外に晒す。

テム博士以下、ガンダムの移動に関わっていたもの達はしたたかに体を打ち非常時にノーマルスーツを着ていなければ大怪我をする寸前であった。

だからといって彼等が危険を免れたわけではない。

それどころか危険は向こうから彼等に迫っているのだ。

興奮したMSジンのパイロットは連邦のMSの顔を確認しゆっくりと近づいていった。

足元に居る避難民を無視して一歩一歩近づいていくその姿は、正に旧約聖書に出てくる傲慢な巨人ゴリアテそのもの。

もう一機が連邦軍コロニー防衛部隊と戦闘を繰り広げている中ジンのパイロットはガンダムに近づいていくが、その視界の隅に一人の

少年が連邦のMSに向かって飛び出しているのを気づいては居なかった。

「父さん!!」

「!?!?アムロ。こっちに来ちゃいかん」

テム博士はこちらに走ってくる息子の姿を見て思わず叫ぶ。

「父さん!!」

アムロは走り出していた。

自分でも何故そうしているのかさえ良く分かってはいなかった。

しかしアムロは足を止めようとは思わない。

あそこには父がいるからだ。

母親と別れ、碌に家に帰ってこない世間的に見ても酷い父親だと思う。

近所の人達からの評判も、コロニー設計に携わっているが実際は何をやっているのか判ったものじゃないと、陰口を叩かれているのをよく耳にし

た。

それでもアムロは必死に坂を下り、足元に転がる人だったモノに転びそうになりながらアムロは走る。

帰りの遅い父の書斎に勝手に入り、コンピューターを覗いていた日々。

そこで見つけた連邦のMS開発の設計図と操縦マニュアル。

アムロはそこで気付いた。

父が本当は何をしているのかを。

コロニーのみんなに内緒で連邦のMSを作っていてそれがどんなに危険なことなのか。

アムロはこの時から内内に溜めていた父への反発を強めていった。

でもアムロは父を見捨てることは出来ない。

喉が渇く、それほど走っては居ないはずなのに既に汗はダラダラと流れ服はびっしょりと濡れている。

鼻で吸い込んだ空気に血と今まで嗅いだ事のない臭い、是が硝煙の臭いなのか？

生まれて初めて戦場の臭いを嗅いだ少年は自分の両足がまるで鉛の重しを付けられたようにガクツと重くなつたのを感じた。

それは恐怖であった。

生まれて初めて体験する戦場の恐怖、身近に感じる肉親の危機と人の死。

二十歳も過ぎない少年にとって是は自分の価値存在感生きる意味、全てを揺るがすほどの衝撃的な出来事だ。

アムロは重い足を何とか前に踏み出す。

あと少し、あと少しの所で。

そこでアムロは初めて気がついた。

自分がさっきから八口を抱えたまま走っているのを。

途端アムロはなんだか自分の姿が滑稽で笑い出しそうになった。

避難民の列に並びお隣のフラウと一緒にシエルターに向かおうとしていた時に、連邦軍のトレーラーが割り込んできて群集が非難の声を上げていた。

そんな時でもアムロは家から出たままの姿で手に八口だけを持っていた。

父親に生まれて初めて買ってもらったオモチヤ。

これ以外にプレゼントなどされたことの無いアムロにとって父から送られた大切な宝物であり親友であった。

うんと小さい頃、地球を離れる時に買い与えられた子供をあやす為の道具。

もう随分と古くなってしまったがアムロは独学で学んだ工学で様々な改造をして今でも持ち歩き続けていた。

群集が割って入ったトレーラーに今にもつめいりそうな雰囲気になったときそれは起こった。

突如として大気を裂く轟音と共に嫌な風きり音が響く。

轟音のうちに崩壊する道路と巻き込まれるトレーラー。

幸いな事に道から落ちた避難民は居なかったが、しかし、自分達のコロニーを攻撃しているものの仕業と知ると群集は我先にとチリジリに逃げ出

してしまった。

人々の悲鳴が聞こえる中、アムロは見てしまった。

ほんの、人の姿が小さな人形のように見えるような遠くなのに何故かノーマルスーツのヘルメット越しに父の顔を見てしまったのだ。

その後は自分でも良く分からない。

瞬間的に体の中が、カツと熱くなりそして今現在に至っている。

そして父に向け。

「父さん!」

と叫ぶ。

父の声は遠くて聞こえなかったがしかし自分の声が届いたような気が、そんな気がアムロにはしていた。

第四十一話・ガンダム大地に立つ - (後書き)

ガンダムの小説を書いていて何が一番難しいか？

それはガンダムを大地に立たせること。

それをよくよく痛感しながら書きました。

何度も書き直して修正して、それでも納得がいかず。

しかしガンダムを無視して書くことは決して出来ない。

こういうのをサラッと書ける人が羨ましいです。

実際題名で大地に立つなんて書いていますがまだガンダムのコクピットにさえ入っていない。

あと今回は色々が無茶苦茶なところがありますが、ご了承ください。

それでは又どこか、キーボードを叩きながら深いガンダムの重力の井戸に捕らわれる感覚を覚えつつ。

第四十一話・ガンダム大地に立つ2 - (前書き)

今回は短めです。正直UCに触発されて書いたので嗚呼嗚呼ー嗚呼
ああとあのBGMを歌いながら読んで下さいwwww

では、また次回で。

第四十一話・ガンダム大地に立つ2 -

「アムロ、危ないー!!」

父テム・レイの声がアムロの耳に入った気がするが、突然後ろから車に撥ね飛ばされたかのような衝撃を受け、地面に叩きつけられたアムロにとってそれを気にする余裕はなかった。

戦場の流れ弾が運悪くこちらに来て、その爆風によって風に飛ばされる木の葉のように宙を一瞬舞、地面に叩きつけられたアムロを見た瞬間。

テム・レイは半ば無意識に飛び出し息子に駆け寄った。

「おい、アムロ。しっかりしろアムロ」

「うっうっ」

幸い爆風に煽られただけで目立った怪我も無く、それに安心したのも束の間、今この瞬間にも一歩一歩近づいてくる敵の存在にテム・レイは一瞬迷った。

このままアムロと共に逃げるか、それともガンダムの為に息子を見捨てるか。

だが、次の瞬間テムの心は決まった。

息子を抱え、トレーラーの梯子に手をかける。

肩に息子を担ぎながら、男の子一人分を加算された体重を片手一本で支えながら登るテム博士。

ノーマルスーツの内側を汗でびっしょりと濡らしながら、不思議とそれが苦にはならなかった。

息子とガンダム。

どちらも自分の生涯を賭けて守り、あるいは作ったものだ。

それをどちらか一方を選ぶなど出来るはずがない。

ガンダムのコックピットを外側から開け、シートにアムロを座らせるとそこで漸く、テムは息子がずっと八口を抱えたままだったことに気付く。

「そうか、お前はずっと一緒だったんだな八口」

テムはノーマルスーツのポケットから長方形の光学集積媒体を取り出し。

「アムロ、お前にガンダムとこのガワラスキー回路を託す」

八口の内部にそれを差込、蓋を閉めた後もう一度息子の顔を見る。

母親譲りの優しい目元に、跳ねっ返りの強い癖毛。

コックピットを操作してコックピットを閉める中、ノーマルスーツ越しのテム・レイの顔は何故か満足そうであった。

「おめでとうなら、私の愛しい息子よ」

コックピットが閉じ、完全な闇の中でアムロは一人ガンダムの中にいた。

「うしうしうし、とお．．．さん？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2758q/>

機動戦士ガンダム-連邦の野望-

2011年12月5日00時45分発行